君よ、花よ

櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君よ、花よ

【Ｎコード】
Ｎ０８６５Ｕ

【作者名】
櫻

【あらすじ】
公爵家三女リディアに届いた文通相手こと皇太子からのＳＯＳ。しかし友達の一大事と屋敷を飛び出して城へ向かったリディアを待っていたのは、豪奢なドレスと天蓋付きベッドのある後宮だった。本物の皇妃を迎えるまでの身代わり。それが皇太子の願いと知ったリディアは、会ったことのない未来の皇妃のために今日も皇太子に近づく姫君を蹴散らしていく。途中逆ハーレムになる予定のラブストーリー。

◇　1話

“助けてくれ”

手早く封筒から取り出した便箋に書かれていた、それが一言目。

「――まぁ」

いつもの流麗さなど程遠い、殴りつけたような文字にリディアは震えた声を上げた。

こんなことは初めてだった。

手紙の主が助けを求めたことが、ではない。

誰かに助けを求められる。それ自体が初体験だ。

それに助けてくれと言われても自分では。

「一体どうしたら……」

「お嬢様？　いかがなさいましたか？」

困りきって漏らした呟きに、傍に控えていた侍女が反応する。

「クロエ……」

「もしや、その手紙に何か不穏なことでも？」

今年二十歳になるリディアより二つばかし年が上なだけだというのに、歩き方にも話し方にも見られる落ち着きは格段に違う。

そんな事を思って溜息をつきそうになり、リディアは慌てて首を振った。

人を羨むのは余裕がない証拠だと、姉にも言われている。

「いえ、少し困ったことになっているだけよ。大丈夫」
「お嬢様、それは大丈夫ではないと言うんです」
「そうとも言うけれど。でも本当に困っているのは私じゃないの、だから私は大丈夫」

言いつつもう一度手紙に目を落とす。

“うちに来てほしい”

助けを求める言葉に続くのはそれだけ。細かいことなんて何も書いていない。
大体うちって、軽く書いてるけどようするにこれは――。

「ちょっと文通相手の家にお呼ばれしただけよ」
「は？　え、ちょっとお待ちください！　文通相手のお宅って、それってもしかして――」

言いかけ、クロエが嫌そうに顔を顰める。
その意味を理解できないまま、リディアは迷うように便箋に視線を落とした。

「理由も事情もさっぱり分からないわ。でも、彼は助けを求めてる」

今までこんなことはなかった。
もう十年にもなるのに、こんな風に切羽詰った手紙なんてもらったことがない。
きっとものすごく困って、どうしようもなくてリディアに助けを求めたに違いない。
そう思うといてもたってもいられなかった。

自分の立場を考えると、安易に言う通りにはできない。
それでもリディアは不思議とそのことで悩んだりはしなかった。
困ってしまったのはこれが初めてのことだから。
悩んでいるのは助ける方法が思い浮かばないから。
――自分は一度だって、見捨てるなんて選択肢を出さなかった。
だってそんなの当然だ。
彼は、自分の。

「彼は私の、大事な友達」

そう、たった一人の対等な友達。
便箋をそっと折り畳み封筒に戻す。次に顔を上げた時、リディアは覚悟を決めていた。

「クロエ」
「は、はいっ！」

凛と放った声にクロエがびしりと背筋を伸ばす。
その立ち姿を見もせずにリディアが続けた。

「屋敷を抜け出すわよ」
「はいっ！　……はい？　申し訳ありませんお嬢様。もう一度仰って頂いてよろしいですか？」
「あら、聞こえなかったの？」

呆けたクロエの声にようやくリディアが視線を向ける。
その瞳に映る侍女の、滑稽なほど強張った顔をリディアはこれから先ずっと忘れないだろう。
だがここで笑ってなどいられない。毅然とした態度を保ったまま続ける。

「屋敷を抜け出して城へ行きます。支度をなさい」

行ったことのない遠い場所の名を出す。

それでも怖くはなかった。

「ダチが私の助けを待ってるの。放ってなんかおけないわ！」

この気持ちとクロエさえ在れば、何だってできるのだから。

◇　2話

大陸南部に位置する国サンセット。
その首都で暮らすアヴェリン公爵の三女リディアには、一つだけ楽しみと呼べるものが存在する。
文通。
それは姉二人とは違い、深窓の令嬢として屋敷奥で育てられたリディアが外の世界を知る唯一の手段でもあった。
鞄に忍ばせた封筒を指先でそっとなぞる。
滑らかな触り心地は上質紙の証だ。おいそれと買えるものではない。
これだけ上等な紙を殴り書きに使えるだけの財力を持つ男に、自分はこれから会いに行く。
会うのは十年ぶりだ。そう考えると緊張する。

「今日も大聖堂は混み合っておりますね」
「……」

誰にも見えぬよう、布で覆い隠された馬車から伝わる人々の声にそう言ったのはクロエだ。
リディアの緊張をほぐそうとするような柔らかな声に沈黙で答え、ちらりと窓から外を覗き見る。
クロエの言う通り、色とりどりの硝子で飾られた大聖堂の前には人が溢れ、外からでも祈りを捧げているのが見えた。
かつて聖女によって救われた経歴を持つこの国には信心深い者が多い。
これはその証なのだろう。……見るのは初めてだったが。
物珍しそうに見つめたままぽつりと零す。

「皆何をあんなに一生懸命祈っているのかしら」
リディアは祈るという行為をよく知らない。
意味は知っているが、やったことがないからだ。
（願いが誰かに叶えられてきたわけじゃないけど）
それでも祈ったことがない。何でだろう。
首を傾げて唸っていると、クロエがくすりと笑い「違いますよお嬢様」と返した。
「祈りだけではありません。彼等は救いを求めているんです」
「救い？　女神や聖女に助けてもらいたいの？」
「勿論です。王族だって救いを求めるのですから、私どものような民草が救いを祈ってもおかしくありません。……まぁ、あの御方はリディアお嬢様に救いを求めていらっしゃるようですが」
あの御方。溜め息混じりの言葉にどきりとする。
「救いなんて大層なものじゃないわ」
「ですがお嬢様をわざわざ城へとお誘いするぐらいです。よほどの事情がおありなのではありませんか？」
「それはそうだけれど……」
だからこそ自分がここにいる。
ただ、救いという言葉はあまりに仰々しい気がした。
大聖堂を通り過ぎる。溢れかえっていた人はまばらになり、それでも誰かしら祈りを捧げているのを見て気が重くなった。
あんな風に祈られても困る。
何せ相手は――。

「相手は皇太子よ？　公爵の、それも娘に救いなんて求めないわ」
少なくとも女神に祈る類の救いは求めないだろう。
口を尖らせて返すとクロエが盛大に溜息をついた。

「皇帝です。あの御方はとっくに帝位を継承なさいましたよ」
「え？　そうなの？　いつの間に？」
「……お嬢様。いくらお屋敷の中に閉じこもっていらしても、国の情勢ぐらいは知っておいてくださいませんと」
「か、彼は何も言ってなかったもの！　いつも皇太子って呼んでたけど咎めなかったし！」
「それでもです！」

拳をぐっと握り締め力説するクロエに若干引き気味に笑いを返す。
そこで馬車ががくりと速度を落とした。
からりと回る車輪が石畳を踏んで止まる。
やや慌てた様子に眉を顰めるとクロエが先行して馬車から降り、呆けた声を上げた。

「クロエ？　どうしたの？」
「お嬢様！　いえ、あの。城に着いたんです……けど」

訊ねるもいまいちはっきりしない答えだ。
まさか、両親に先回りされてしまったのだろうか？
どくんと鼓動が跳ねる。
バレたら怒られるなんてものじゃない。
それでも城に着いたのなら出ないわけにはいかないだろう。馬車も止まってしまったことだし。
息を深く吸い、うるさく鳴り響く鼓動を抑えつける。その一瞬の

隙をついて足を外へと踏み出した。

「――え？」

そして、固まった。

「「お待ちしておりました」」

城と町を繋ぐ石橋。馬車はその真ん中に止まっていた。城の敷地にすら入っていない。

それはいい。止まったのなら歩けばいい。

だが、これは一体何だ。

「な、何でこんな大勢出迎えがいるわけ？」

ずらりと並んでいるのは銀の鎧を纏った騎士達。

彼等はまるで大聖堂から溢れる人々のように城から溢れ出て、リディアを見て膝をついた。

目眩がしそうだった。

◇　3話

そこから先のことは、ただ眩しかったとしか言いようがなかった。
城への一本道を真っ直ぐに伸びる銀の鎧が弾く光の洪水に、用意された馬車の乗り心地の良さに圧倒されていたせいかもしれない。
しかし一番リディアの精神を磨り減らしたのはそんなものではなかった。

「何で騎士がぞろぞろ付いてくるの！？」

早すぎず遅すぎず、絶妙のリズムを刻んで進む馬車。
それを取り囲む騎士の群れにクロエが小さく悲鳴を上げていた。
ほとんど息に近い声に、それでも慌てた様子でリディアは彼女の口を押さえた。
クロエの言葉はリディアの不満と同じだ。
しかしそれでも聞かれてしまうとなると、何となく気が引ける。
そっと窓から外を覗き見る。
幸い騎士達はクロエの声が聞こえなかったのか、黙々と歩いていた。
ほっと胸を撫で下ろし、深く椅子に腰掛ける。
ふかりとした椅子は贅を凝らしている。
こんなものを用意できるのが一介の民草とは到底思えなかった。

「皇太子が私の護衛でも命じたのかしら」
「そうだとしても数が多すぎます！　そもそも、お嬢様が今日登城することは当の私達しか知らないはずですのに」
「……確かにそうね。護衛といっても命なんて狙われたこともないし。……あら？」
「どうなさいました？」

「いえ、何だかこの馬車城に向かってないんじゃないかと思って」
直線で突き進むはずの馬車が右にかくんと曲がる。
姿勢が崩れそうになる振動に外を見ると、馬車は明らかに城への道から外れていた。
風が吹き込む。それは花の香りを含んでおり、甘く柔らかだった。

「いい匂いね。花でも咲いているのかしら」
「そうでございますね。……庭園はもっと先のはずですが」
「城にはなくても、この先にはあるのかもしれないわ」
「そこに陛下がいらっしゃるのでしょうか」
「分からない。でも助けてって書いていたぐらいだもの。城じゃない所で話したいのよ、きっと」

そうだとしたら皇太子もいい場所を選んでくれたものだ。
もしかすると十年以上外に出ていないリディアを気遣ってくれたのかもしれない。
ふっと柔らかく笑いながら椅子に座り直す。
そんなリディアを不安気に見て、クロエが「お嬢様」と切り出した。

「このまま馬車の中にいて本当によいのでしょうか」
「どうしたの？　突然」
「もしや私達は、とんでもない場所に連れていかれるんじゃないでしょうか」

ぎゅっと手を握りしめるクロエは不安げだった。
騎士に囲まれ、どこへ行くとも知れぬ馬車に乗せられたせいかもしれない。確かにそういう意味ではリディアも不安がないわけじゃなかった。しかし怖くはなかった。

にっこりと笑ってみせる。

「大丈夫よ。だって彼は私のダチだもの」

自分が彼を助けたいと思ったように、彼も同じことを思うだろう。そう考えたら怖くはなかった。ひどいことはしないと信じているから。

自信満々に答えたリディアにクロエが溜息を漏らす。

「……以前から思っていたんですが、何故友達じゃなくてダチなんです？」

「あら、だって親友のことをダチって言うんでしょう？　皇太子が言ってたわ」

「間違いとは申しませんが、貴族の令嬢が使う言葉では――」

たしなめる言葉はそこで止まった。

馬車が止まり、騎士達の気配がさざ波のように引いていく。

何事かとクロエと目を合わせる。

すると馬車のドアが開いてほっそりとした腕が伸びた。

どう見ても女の腕にしか見えないそれを凝視していると、硬い声が聞こえる。

「お下りください」

「え？　あぁ、はい。どうもありがとう」

腕に導かれるままひらりと馬車から下りる。

そうしてここがどこかを確認しようとして、リディアは目を丸くした。

「これは……」

呟き、むせ返りそうな花の匂いに目眩を感じる。
目の前にそびえ立つ、つるんとした陶器の如き肌を持つ塔。
それはいい。ここがどこかは分からないが、今は気にしないことにする。
それよりも塔を取り囲むこの花畑はなんだろう。

「お気に召して頂けたようで何事で御座います」

はっと振り向くと、無表情で頭を下げられる。先程馬車から下りる手伝いをしてくれた女だ。歳はクロエより更にいくつか上に見える。

「あなたは？」

くらり、くらりと花の匂いに圧倒されつつ訊ねる。
すると女はちょこんとスカートの裾を持って腰を折り曲げた。

「この塔で女官長を努めております、ヤナと申します」
「ヤナ」
「リディア様をお部屋までご案内せよと、陛下から仰せつかっております。――どうぞこちらへ」

必要なことは言い終えたのか、ヤナがくるりと背を向ける。
それを慌てて追いかけ、追いかけ。
ヤナの言うお部屋とやらに辿り着いた所で、リディアはようやく何かがおかしいと気がついた。
豪勢なほどレースがあしらわれたカーテン。天蓋付きのベッド。
少女趣味をありったけ詰め込んだ部屋に、クロエならずリディアまでもが一歩引きそうになった。

◇　4話

僅かに開かれた窓から入り込む風がカーテンを揺らし、部屋中を甘く染めていく。それはこの引いてしまうほど少女趣味な部屋を更に乙女チックに見せていた。

幾重にも重なる薄いレースのカーテンは春のうららかな日差しを絡めとりながら、腕を広げてリディアを待ち構える。おいで、おいでと言うように笑いながら。

無論、だからと言って誘われるまま中に入ることもできなかった。

飛び込めば体が丸ごと沈みこみそうなベッドも、薄桃色を基調にした絨毯も猫足のソファも、どれもこれも真新しい。そんな部屋に一番に入っていいのか分からず、リディアは困惑を顔に出してたじろいだ。

そんな彼女の意図を察したのかそうでないのか、ヤナが後ろで深々と頭を下げる。

「こちらで御座います。陛下がいらっしゃるまでしばしの間お待ちくださいませ」

「あ、ありがとう。それでこの部屋は何？」

「これからリディア様が生活される部屋で御座いますが、何かおかしな所でも？」

「おかしな所というか何というか……」

口を濁すリディアに代わり、クロエが「この趣味は一体誰のものでしょう」と呟いたが、それはヤナに黙殺されてしまった。

自分の落ち度を探すように部屋に目を向けるヤナに釣られる形で、ちらりと部屋を覗き見る。

何度見ても変わらない少女趣味は、どう考えても場違いだった。

少なくともリディアには似合わない。

（こういうのが似合うのは、もっと……そう、例えばお姫様みたいな人よ。そうだわ、私よりロザリア姉様の方がずっと似合う）

リディアは自分とは似ても似つかぬ双子の姉を思い描き、そっと溜息をついた。

自分には不似合いな部屋。

それなのに自分がここで生活することになるなんて。

憂鬱からもう一度溜息を漏らし、そこでリディアはぱちりと目を見開いた。

生活？　今ヤナは生活って言わなかっただろうか。

「ここで生活というのはどういうこと？」

慌てて尋ねると、微かに眉を顰めたヤナが淡々と答える。

「私どもは陛下より、今日よりリディア様がこの塔に住まわれるのでお世話をせよと仰せつかっております」

この塔に住む、だなんて。

「そ、そんなわけないでしょう。私は皇太子――陛下と話を済ませ次第屋敷へ戻るのよ。一泊もしないわ」

「ですが陛下はそう思っておいでのようです。それに御存知ありませんか？」

「何を？」

知らないことなら山ほどある。だからこそリディアはここまで来たのだ。

ごくりと唾を飲み下し答えを待つ。

そんなリディアの顔を無表情に見据え、ヤナは実にあっさりした声で返した。

「ここは後宮で御座います。妃となる以上、一度足を踏み入れれば余程のことがない限り帰省は叶いません」

「お嬢様が妃！？」

「私が妃！？」

「そう伺っておりますが」

ぽいと放られた答えにクロエと二人悲鳴を上げる。

きんと甲高い声が塔を、室内を響かせて頭が痛くなりそうだった。しかし今はそこに構っていられない。

リディアは口をぱくぱくさせるクロエを放置してヤナを怒鳴りつけた。

「待ちなさい！　私、そんな話一言も聞いてない！」

「そうだったのですか？　あっさりここまで来られたので全て御存知だったのだとばかり」

「いくら私でも考えなしに後宮に入ったりしないわ！　知らないから来ただけよ！」

小首を傾げる姿に全力で声を放つとそれだけで息が切れそうになったが、混乱がリディアから息苦しさを奪っていたおかげで無様な姿を見せずに済んでいた。

こんなに大声を出したのは生まれて初めてだ。

……できればその貴重な体験をこんな場所で使いたくはなかったのだが。

腰に手を当てて部屋から背を向ける。

絶対に部屋には入らないという意思表示だ。

しかし今日久しぶりに外に出たリディアと、日々貴族に仕える女

官長では格が違った。

「私どもも詳しい話は存じ上げません。ですからこの話の詳細は陛下に御伺いした方がよろしいかと」

「陛下はいついらっしゃるの」

「政務が終わり次第いらっしゃる御予定です。それまで廊下で待つおつもりで？」

「……う」

別にリディアはそれでも構わないが、陽の光も届かない廊下に立つことをクロエにまで強要するのは気が引ける。

「どうぞ部屋でお待ちください」

「……」

「それでは私はお茶の準備をしてまいりますので」

「まだ部屋に入るとは言ってないわ！」

眉間に皺を刻んで悩む。

するとその迷いをつくようにヤナが頭を下げ、くるりと背を向けて歩いて行った。リディアの声も聞かずに。

濃紺のメイド服が遠ざかっていく。

それを見送り、リディアはずるずると壁を背に座り込んだ。こんな姿を見られたら姉達にも両親にも咎められるだろうが、今ぐらい許されてもいいはずだ。

（だって、だって……！）

「妃だなんて、そんなの聞いてない」

しかしヤナが嘘をついているとも思えない。

皇太子への信頼と疑念で頭がパンクしそうになる。
そんなリディアの肩にそっと触れ立ち上がらせたクロエは、緊迫した様子で部屋を睨んだ。
「お嬢様。やはり私達、おかしなことに巻き込まれたのでは」
「今更だけど私もそんな気がしてきたわ。けれど皇太子がそんなことするなんて」

少なくとも人の気持ちを無視してリディアを後宮まで呼びつけるとは思えない。
では一体ここはどこで、何故自分はここにいるんだろう。
やはり屋敷を抜け出さず、手紙で事情を訊ねるべきだったのか。
あれこれ考えていると泣き言が漏れそうになる。
と、そこでクロエが唇に手を当ててリディアを止めた。

「しっ！　……誰か来ます」
「ヤナじゃないの？」
「いえ。足音が違います」

大理石で作られた廊下をかつんと踵が落ちる音がする。
ヤナにしては少し重い音だ。
クロエが言う通り、ヤナがお茶を持って戻ってきたわけではないらしい。
「誰？」

囁くように問いを零す。
日差しが届かないのか、見えるのはうっすらとした人影だけだ。
それでさえ上半身が闇に消えてよく見えない。
だから相手を判別できたのは、耳朶を打つ声だけだった。

「リディア」

耳をくすぐるような、それでいて突き刺さるように硬い声。

リディアは自分を呼ぶ声に幼い頃の記憶を引き寄せ、慌ててドレスについた埃を払った。

「クライヴ？　あなたクライヴね」

皇太子だとか陛下だとか、そんな肩書きを無視して問いかける。

息せき切って発された言葉に返ってきたのは密やかな笑い声だった。

◇　5話

「それで、一体これはどういうことなの？　クライヴ」

ヤナが無言で淹れた紅茶がふわりと空気を揺らす。白くけぶった湯気に、クライヴの姿が見えづらくなったがリディアは目を凝らして彼を睨みつけた。

襟足と前髪が少し長いプラチナブロンドは毛並みの良い猫のように艶々と光を放ち、そこから匂い立つばかりの気品が感じられる。顔の造りからして繊細なのだ。無理もない話だった。下手をすればリディアの姉、マリアやロザリアより美しく見える。

しかし久しぶりに会った幼馴染の成長ぶりにリディアは感嘆の息はおろか、驚きさえ見せなかった。

否、見せるどころではなかったのだ。

「お前こそせっかく俺が用意した部屋に入らず廊下にいるとはどういうことだ」

「入りづらかっただけよ！　それよりクライヴ、あなたいつの間にそんな態度大きくなったの」

「俺は元々こうだが？」

「……何だか今色々と裏切られた気がする」

幼い頃はもう少し可愛くはにかんでいるような男の子だったのに、いつの間にこうなってしまったんだろうか。

リディアが恨みがましい目を向けるとクライヴはにやりと口の端を吊り上げて笑った。

長い前髪から覗くアイスブルーの瞳が細められる。まるでリディアをからかうように。

（やっぱり全然可愛くなくなってる）

そもそも姿勢からして可愛くない。

猫足のソファに足を組んでふんぞり返って座っている姿は、見た目が繊細なクライヴにはひどく不似合いに思えた。だがこれが真実だ。

紅茶を口に運ぶ。甘い熱が喉を通り、ひりりと痛んだ。

それにしても不思議だ。

手紙では素直なのにどうしてこうも実物は違うのか。

歳とて殆ど――三つしか変わらないはずの彼が変貌して自分だけが変わっていないことが悔しくなり、リディアは立ち上がって腕をさっと横に振るった。

ここにあるものを見ろ！　と強引にクライヴの意識を向けさせる。

「それより何よこの部屋！　何でこんな少女趣味満載なの！」

本当は言うべきところはそこではないし、王族相手にこんな言葉遣いをする自分も大概偉そうだなと思わないでもなかったが、言ってしまったものは変えられない。問いたいことは山とあったが、クロエがいる前で話していいことか分からず問えなかった。

それに偉そうにしていたらクライヴが不敬罪で牢に入れてくれるかもしれない。

そこから両親に助けられれば事が手早く解決しそうだ。

その場合、クライヴを助けられなくなることが気がかりだったが。

リディアの言葉にクライヴは不思議そうに首を傾げる。

と、すぐに眉を顰め不安気に訊ねる。

「気に入らなかったか？　お前が喜ぶようにと用意させたんだが」

「……私がこれを見て喜ぶとでも？」

「一度でいいからお姫様になってみたいと言ってただろう」

言われてみればそんな話をしたようなしていないような。
だがそれは今よりずっと幼い頃の話だ。
「何年前の話よ……」
（っていうか覚えてたんだ。そんな昔の話）
呆れるべきか喜ぶべきか考えあぐねて、とりあえず肩を落とす。
そんなリディアを支えるようにクロエがさっと斜め後ろに回ろうとしたが、それはクライヴの一言によって止められた。
「下がっていろ」
「ですが！」
「俺に二度言わせる気か」
「――っ！」
簡潔な言葉。
それが意図することを悟りクロエは手をぎゅっと握り前に声を荒らげたが、相手が悪い。
リディアは申し訳ない気持ちになりながらも首を振った。
二人きりになった所で何かが起きるとも思えない。
「クロエ、下がっていなさい。何かあれば呼ぶから」
「……承知致しました」
一瞥さえくれずに放った言葉に何を感じたのか、クロエは苦々しげな声と共に一礼した。
絨毯を滑るように歩く気配が遠ざかっていき、最後にぱたんと音を立てて消える。

さぁ、と心の中と外で声がする。
前者はリディア、後者はクライヴだ。
「これで心置きなく話ができるな」
――これで心置きなく彼を怒れる。

◇　6話

クロエもヤナもいない二人きりの部屋。
しんと静まり返ったその場所でクライヴはゆったりとティーカップを口元へ運んだ。

「いい侍女だな」

しみじみとした声に、初めリディアは茶でも褒めているのかと勘違いした。
しかし数瞬遅れてそれがクロエのことだと知り目を細める。

「あれだけきつく睨んでいたのに褒めるなんて意外だわ」
「俺が睨んだぐらいでは引かなかったよ、あの女は。それだけお前に忠実だからいいと言ったんだ」
「そう。あなたのお眼鏡に適う侍女を連れているなんて誇らしいわ」

公爵が知ったらクロエは褒められるかもしれない。
そう思うと嬉しくならないわけではなかったが、今はクロエの話より本題に入りたかった。
二人の間に置かれた焼き菓子に手を伸ばす。一口食べると濃厚なバターの香りが広がった。
そのまま黙々と焼き菓子の味を楽しんでいると、足を組みかえたクライヴが首を傾げる。

「何だ、怒っているのか」

途端、リディアは噛み付くようにクライヴを睨みつけた。

「こんなことされて怒らないでいられるとでも？　私はあなたに危機が迫っていると思って飛んできたのよ」

訊かれるまでもなく、確実に、完璧に、どうしようもなく怒っているのだ自分は。

荒々しくティーカップを置き、怒りに紅潮した頬を見られまいと顔を逸らす。すると「ふむ」とクライヴが頷き姿勢を正した。きっちりと着こなす白の略服が衣擦れの音を立てた。

（もしかして謝るつもりなのかしら）

一応人の気持ちを汲んでくれているのだと分かり、リディアはほっと息をつこうとする。

だがそれは少し早かったようだ。

「確かに事情も話さずに呼びつけたのはこちらだ。幸いここには俺達しかいない。必要なら謝るが」

……必要ならと言われても。

それはあれだろうか。願わなければ謝らないと？

ぴき、とどこかで音がする。

きっと今自分のこめかみには青筋が立っているんだろう。

リディアは遠いどこかに向けてぼやきながら、しかししっかりと首を振った。

こんな横柄な態度で謝られても腹が立つだけだ。

「いらない。それにクライヴはもう皇帝になったんでしょう？　下々の者に簡単に頭下げちゃ駄目」

ちくりと刺すように言うとクライヴがぴくりと指先を震わせた。

ティーカップの中身がぐらりと傾いて溢れそうになる。

「聞いたのか」

「クロエにもっと勉強しなさいって怒られたわ」

「余計なことを。わざわざ隠していたというのに」

「……教えてくれたっていいじゃない。私だってちゃんとお祝いしたかった」

ここに来て初めて動揺を見せるクライヴにおや？　と片眉を上げる。

しかし動揺は一瞬だったらしく、クライヴはすぐに元の調子を取り戻して足を組んだ。ただし視線はリディアから外され、やや気まずげだったが。

「皇帝になったと言った途端に手紙が来なくなるかもしれんと思っていた。……俺が皇太子だって知った時もそうだったからな。催促しに行くまで返事を書いてくれなかった」

「皇太子と文通だなんて知られたらお父様に怒られると思ったんだもの」

ただでさえ外の世界とリディアを隔離したがっている父親だ。権力を持った人間と繋がると知ったら反対されるに決まっている。文通という行為自体が奇跡のようなものなのだ。

「それに今はあなたが皇帝と言われても返事ぐらいはするわ。ダチでしょう？　私達」

今でもクライヴがそう思ってくれているのならば。そんな思いを籠めて訊ねる。

はっと見開かれたアイスブルーがリディアに向けられる。しかし

答えはなかった。
代わりに「悪かった」と呟く声が耳朶を打つ。
答えがないことに失望を覚えそうになった心が、その一言で救われた気がした。
皇帝が謝罪するのは駄目だと思いつつ矛盾したことだとは思うが。
両手の指を絡めて膝の上に置く。
怒るのはこれで終わりだ。
リディアは深く息を吸い込んで「じゃあ」と声を放った。
怒りが消えた後に残るもの。それを消し去りたかった。

「私の質問に答えて」
「何だ」

言うとクライヴも察したのか、何でも答えてやるというように目を合わせた。
その澄んだ目に背中を押されるように、頭に浮かぶ質問を次から次へと投げつける。

「まず、ここはどこ？」
「後宮だ。先々代皇帝が造りあげた、今の所は俺のための後宮」
「どうしてここに連れてきたの？　手紙には城に来いって書いてあったのに」
「本当は城の方が都合がいいんだが、予定が狂って急遽場所を変えた」
「こんな入念に部屋を作っていたのに予定が狂った？」
「あぁ。城に呼んだ後で後宮に連れてくる予定だったからな」

どんな予定を立てているんだ。
淡々と答えるクライヴに溜息をつきそうになりながら、しかしリディアは毅然と前を見据えた。

これから先の質問が一番大事なことなのだ。
真っ直ぐな視線にクライヴの表情が引き締まる。それを見届けてから凛と問うた。
「教えて。――助けてくれっていうのは嘘だったの？」
もしそれが嘘だったら、自分はクライヴをどうするのだろう。
そう考えると胸がざわついた。
今自分はたった一人の友達を手放すかもしれない質問をしたのだ。
時が長く感じられる。だが実際は数秒とかからず答えが返ってきた。
「勿論嘘じゃない。俺はお前に宛てた手紙の中で、一度だって嘘をついていない」
一切の逡巡を感じられない声だった。
力強い声に体から力が抜けそうになる。胸に溜まった息を深く吐き出すと、クライヴがすっと手を差し伸べた。
（……？）
訳が分からずクライヴを見つめる。その視線を受け止めてクライヴがそっと笑んだ。
今まで見たことのない、ぞっとするほど甘い笑みだった。
「リディア」
「な、に」
「俺と結婚してほしい」
だから何で、そんなとんでもないことをさらっと言ってしまうん

だろう。

「私に側室になれというの？」

「失礼な。側室ならここまで手間はかけない。正妃としてだ」

どちらが失礼だ。

「理由は」

「愛しているからだ」

「嘘だわ」

甘く囁くような声にすぐさま即答する。

そう、こんなことは嘘でしかない。

理由は分からないし、問われた所でリディアには答えようがなかったがそうとしか言いようがなかった。否、そう思わなければやっていられない。……自分達は友達なのだから。

（ダチに向かって愛してるだなんて、変だわ）

親愛なら別だが、クライヴが別の意味で言っていることぐらいリディアにも分かっていた。

だから物語に出てくるお姫様のように胸をときめかせたりはしない。

告白を嘘と断言され、クライヴが瞠目する。

しかしすぐに目を細めて笑った彼はどこか安堵しているように見えて、リディアはますます彼のことが分からなくなった。

◇　7話

友達を助けるつもりが、こんな訳の分からない状況になるなんて。
リディアは自らが放り込まれた状況を理解できぬままクライヴの答えを待った。
真意を見透かしてやろうとじっと碧眼を見つめる。すると彼は凝視されるのに耐えられないのか、実にあっさりと白旗を上げた。肩を竦め、降参とばかりに溜息をつく。

「メリアルドという国を知っているか」
「私だって隣国ぐらい知っているわ」

唐突な問いに面食らい、ぱちりと目を見開く。
それでもしっかり頷くとクライヴは悪びれもなく「そうか」と頷いた。
……ところで、今の話は嘘ということでいいのだろうか。
そこの所をしっかり追求したかったが、クライヴが口を開くのが先だった。

「では、プリンセス・オルテンシアの話は？」

プリンセス・オルテンシア？

「ううん、知らない。誰？」

（プリンセスって言うんだからお姫様なんだろうけど）

だが生憎とリディアの狭い世界の中にそのような名前を持つお姫様はいない。素直に首を振ると、そこは予想済みだったのか淡々と

した説明が返ってきた。

「メリアルドの第二王女だ。本名はミレーニア・メリアルド。瞳が紫陽花の色に似ていることから、プリンセス・オルテンシアと呼ばれているそうだ。メリアルドでは紫陽花のことをオルテンシアというらしい」

「ふぅん。……それで、そのプリンセス・オルテンシアがどうしたの？」

「俺は彼女を皇妃に据えたいと思っている」

さらりと放たれた言葉に動きを止める。

思わず両手を口元に当てて顔を綻ばせた。

「まぁ、そうだったの」

彼はまだ若いが皇帝だ。血を絶やさないようにするには正妃――皇妃が不可欠だ。

他国へ嫁ぐプリンセス・オルテンシアは不安を抱えているかもしれないが、クライヴが望んで皇妃に据えるのなら誰も文句は言わないだろう。

これはもしかして、もしかしなくてもおめでたいことじゃないか。

皇帝になった知らせはもらえなくとも、この大事な知らせを聞けたのは満足だった。

そう思い即座におめでとうと口にしかけ、不意にリディアは動きを止めた。

「ちょっと待って。それならどうして私を皇妃にする話になるの？」

リディアはアヴェリン公爵の三女。プリンセス・オルテンシアではない。

そして皇妃は国に一人きり。側室と違って二人といない大切な存在だ。
口を尖らせて咎める。そんなリディアにクライヴは実に面倒くさそうに答えた。
「その必要があるからだ。サンセット皇室はまだプリンセス・オルテンシアを皇妃として迎える準備ができていない。だからリディアには全ての用意が整うまで、彼女の身代わりになってもらいたい」
身代わり？　自分がメリアルド王女の？
些か現実味に欠ける話に何とか文句をつけようと口を開く。
突然そんなことを言われてあっさり承諾などできない。
「用意が整っていないのなら椅子を空にしておけばいいじゃない」
どんな準備がどれだけの期間必要なのかは知らないが、何年も先の話ではないはずだ。少なくともリディアはそんなに長い間身代わりなどできない。自分がメリアルド王女を演じた所で、ボロが出るのは分かりきっているのだから。
ふぅ、と溜息をついたクライヴが遠くを見据える。
「そうだな。それが一番いい方法だ。だが、いい加減元老院や他国から女を送られるのには飽きた」
「飽きたって……」
「揃いも揃って自分の娘をいずれは皇妃にと後宮に送り込んでくるんだ。プリンセス・オルテンシアとの婚儀が終わる前にとな。相手をする身にもなれ」
「そんな理由で身代わりをさせられる私の身にもなってよ……」
思わずぼやくと「そうだな」とクライヴが苦笑を漏らす。

微かに吊り上がった唇が歪み、困ったように見つめられる。
それが助けてくれと言っているようでリディアはふいと目を逸らす。

「それが私を身代わりにする理由？」
「あぁ。皇妃がいた所で今度は国母にするために娘を送り込むんだろうが、皇妃がいればどこにも通わん理由にはなる」

皇妃を正式に娶る前に短期決戦を仕掛ける者達を遠ざけるため、クライヴには一刻も早く皇妃が必要だ。しかし隣国の王女を迎えるには準備が足りない。
彼の話を要約するとそういうことなのだろう。
だから身代わりが必要なのだ。自分がどこの姫にも通わなくていい理由が。
皇妃をただ一人の皇妃とし、ゆくゆくは国母とするために。
それは理解できた。ただ、腑に落ちない。

「それって私が側室になるのでは駄目なのかしら」
「あ？」
「要するに誰か一人に通えば、それが他の側室の所に行かない口実になるんでしょう？　それにプリンセス・オルテンシアやメリアルド王室はこのことを御存知なの？　婚儀前に見知らぬ女が身代わりをしているだなんて、クライヴやサンセットの印象が悪くならないかしら。政治ではなく、後宮の問題を解決できないって言っているようなものだもの」

必要なのは理由だ。それさえあれば相手が誰でも構わない。
ならば何故自分は皇妃の身代わりという道を提示されたのだろう。
不思議に思い尋ねると、クライヴは一瞬意外そうな顔をした後で「そうか、そうだったな」と低く笑った。

「屋敷に閉じ込められていただけで、お前は決して馬鹿なわけじゃないんだな」
「……クライヴ」
「いや、すまない。確かに説明が足りなかった」

くつくつと喉の奥からこみ上げる笑いをそのまま吐き出すクライヴに低く囁くと、ひらひらと手を振った彼は上機嫌に首を振った。

「案ずるな。これはあらかじめ許可を取った上でのことだ。リディアはただ頷けばいい」
「偉そうね」
「俺より偉い奴などいないからな」

言われてみればその通りだ。
むっと顔を顰め今更ながらにクライヴが国で一番偉い存在だと認識したリディアは、もう一つ気になっていたことを問うた。

「ねぇクライヴ」
「何だ」
「どうして私をプリンセス・オルテンシアの身代わりに選んだの？
私よりマリア姉様やロザリア姉様の方が適任だと思うんだけど」

姉達は身内の贔屓目に見ても美しい。
マリアは知的な魅力があるし、ロザリアはそこにいるだけでぱっと周囲を華やかにする明るさを纏っている。同じ両親から生まれたのか疑問に思うほどに、二人の容姿は完璧だった。そんなことはクライヴも承知しているはずなのだが。

「他に頼む相手がいないからだ。俺をダチだと言う女など国中探し

てもお前ぐらいのものだ」

それも言われてみればその通りだ。
誰が皇帝相手にダチだなんて言うだろうか。同性ならともかく。
自分の図々しさを痛感し視線を逸らすと、すっと伸びた手がリディアの髪を一房掬い上げた。

「綺麗な髪だ。こんなに艶やかな黒髪など見たことがない」
「やめて。こんな色、陰気で暗いだけよ」
「俺はそうは思わない。それにお前の瞳も紫陽花の色だ。プリンセス・オルテンシアと同じ赤い紫陽花」
「……姉様達はアザレアの色だと言っていたわ」
「あぁ、言われてみればそうも見えるな。二つともよく似た色だ」

優しく髪に触れる手をやんわりと払いのける。
そうして褒められたにも関わらずむくれ「あ」と声を上げた。
クライヴが自分に身代わりを頼む理由、それは。

「似ているのね。私達」

顔立ちはともかく、髪と瞳の色が同じなのだ。
確信を籠めて尋ねると肯定を含んだ笑みが返る。
その優しい笑顔を見て、ふと訊いてみたくなった。

「クライヴは、プリンセス・オルテンシアのことが好きなの？」

わざわざリディアを巻き込んでまで護ろうとしている女性。
それはクライヴの中でとても、とても大切なものなんじゃないか。
好奇心と確認を綯い交ぜにした問いへの返答は一瞬にも満たなかった。

「好きじゃない。愛しているんだ」

笑顔と同じ優しい声だった。

その真っ直ぐな視線と声を受け止め、リディアは覚悟を決めてにっこりと笑った。

満面の笑みにクライヴが動揺したようにさっと頬を赤らめる。

何故ここで赤くなるのかは分からないが、とりあえず疑問も彼の反応も無視してリディアは覚悟をそのまま口にした。

「分かったわ。私があなたを助けてあげる」

「では――」

「えぇ」

家族やクロエに知られたら全員から説教をされることだろう。

こんなことをして嫁の貰い手がなくなったら、と母は嘆き父は憤慨するだろう。

それでもリディアはこれから先の決断を一生後悔しないだろうなと思った。

大事な友達が大切にする人。それはリディアにとっても大切な人だ。

息を吸い込む。吐き出した言葉は実に軽やかだった。

「本物の皇妃様がいらっしゃるまで、私がプリンセス・オルテンシアになるわ」

◇　8話

堂々と笑って放った覚悟にクライヴが滲み込むような笑みを見せた。
ゆるゆると緩む頬は本当に嬉しそうで、リディアは自分の決断が正しかったのだと確信する。
皇帝だなんて言葉が信じられないほど幼い笑顔は眩しい程に美しく、そこだけ癪だが。

「リディアが皇妃になるなら俺も安心できる」

深い安堵と共に言われ、胸を張ってみせる。

「そりゃあ、私ならクライヴに言い寄るなんてしないものね。むしろそんなことをする人がいたら追い払ってあげる立場だし、そこだけはプリンセス・オルテンシアにも安心して頂きたいわ」
「追い払うか。できるのか？」
「分からない。でも必要ならやらなくちゃ」

そのためなら無理な演技だってやってみせるつもりだ。
リディアが自信満々に返すとクライヴがぷっと吹き出した。何が楽しいのか肩を震わせて笑う。そうすると幼さが払拭され、一気に大人らしく見えるから不思議だ。
弧を描く薄い唇を見ていると人の悪い笑みで返された。

「随分とやる気だな。何がお前に火をつけたんだ？」
「あら、だってロマンティックじゃない。皇帝とお姫様の恋だなんて、物語の定番だわ」
「お姫様、か。確かにそうだな」

「えぇ。それもかのメリアルドの王女様。まだお会いしたことはないけれど、お似合いなんじゃないかしら」

大陸中央に位置する国、メリアルド。

南部にあるサンセットとは隣国であり、他三国も含めて全ての国と交流を持つ貿易国だ。

リディアはまだ訪ねたことがないが、東と西、二人の宰相の采配により資産にも資源にも恵まれた国だと聞く。商人がいつか店を構えたいと願う、人と物で溢れている豊かな国だ。そのメリアルドの王女に想いを馳せ、リディアはうっとりと目を細めて「それに」と続けた。

「政略結婚にせよ何にせよ、お互いがお互いを望んでいるのならそれはとても素敵なことじゃない？　私もその方が嬉しいわ」

クライヴが皇太子だって知って少しした頃、あぁこの人はいつか誰か知らない女の人と結婚させられるんだろうなと思ったことがある。彼はそれを当たり前のように受け入れて、当たり前のように傍に置いて子供を産ませて育てるのだと。

世の中の皇族が皆物語のような恋はできない。

自分がどう頑張ってもお姫様にはなれないように。

それが分かっているからこそ、クライヴが自分で好きになった人と結婚するという話はリディアの心を浮き立たせた。

両手を合わせてにこにこと上機嫌に笑う。

それに対して返ってきたのはどこか苦い笑いだったが、その不自然さにリディアはまったく気付かないまま「あ」と声を上げた。

「そういえば婚儀はどうするつもりなの？」

側室であれば式典など不要だろうが、皇妃はそうはいかないだろ

う。
しかしリディアにはクライヴの隣に並んで婚儀を執り行う自信がなかった。
なるべくなら人目につかぬ場所にいたいぐらいだ。
第一、ここまでの展開でリディアは一生分の勇気と行動力を使い果たしてしまっている。これ以上派手なことは避けたかった。
（それに万が一メリアルド出身の人がいたら見破られてしまうかもしれないわ。プリンセス・オルテンシアだなんて名前がついているぐらいだもの、きっとメリアルドの人なら誰でも知っているような御方でしょうし）
今までの自信満々な態度から一転しておずおずと尋ねると、それが面白かったのかもう一度笑われた。
「心配するな。今年は先々代の十三回忌があるから式典は来年に持ち越しだ。もっとも本来なら皇妃を迎えるのも来年にすべきだろうが、こればかりは仕方ない」
「そ、そう……。よかった」
「俺としてはリディアに花嫁衣装を着てもらうのもやぶさかでないがな」
「……そういうことばかり言っているから女性関係で苦労するのよ、クライヴ」
にやりと人の悪い笑みで言われ、呆れ混じりに返す。
それを楽しげに受け入れるクライヴに溜息を一つぶつけ、リディアはさっとドアへ視線を向けた。
「とにかくこれで話は終わりだわ。――クロエ！」
「はいっ！　何でしょうか、お嬢様」

「……おい、今この女間髪入れず答えたぞ。まさか俺達の話を聞いていたんじゃないだろうな」

ドアの向こう側にいるはずのクロエを呼ぶと、即座に開かれたドアからぱっと顔を輝かせたクロエが現れる。あまりにも早い反応にクライヴがひくりとこめかみを引き攣らせるが、クロエは丁寧な所作で首を振る。

「いいえ、私は何も。自分の名前が聞こえるまでしっかり心の耳を閉じておりました」

「嘘を言うな。そんな細かい特技があるわけなかろう」

「まぁ、さすがクロエね。心の耳が閉じられるなんて」

「リディアもいちいち信じるな！」

何かおかしいことでも言っただろうか。

激昂するクライヴに小首を傾げると、彼は疲れたとばかりに大きく溜息をついて仰向いた。さらさらとプラチナブロンドが後ろに流れる。

夕焼けに近い赤みのある日差しが窓から注ぎこむ。

その光を全身に浴びるクライヴは絵画のワンシーンのような静謐さで、天使のように愛くるしかった子供時代とは違うもののやはり綺麗だなとしみじみ思った。

（私もクライヴみたいに綺麗だったら、姉様達みたいに外に出られたのかしら）

こんな陰気な髪色ではなく、美しい顔立ちだったなら。

美しくないから屋敷から出られない、というわけでもないだろうがリディアは幼い頃からずっと自分だけが美しくないせいだと思い込んできた。今だってそうだ。

そう考え、ともすれば落ち込みそうになる気持ちを抑えこんで無理矢理顔を上げた。

（でもこんな私だからこそ、クライヴを助けてあげられる）

それに髪と瞳の色でいうならプリンセス・オルテンシアとて同じだ。

だからリディアは自分の顔立ちには文句をつけても、この髪と瞳の色にだけは文句を言わずにおこうと思った。

それはプリンセス・オルテンシアをも貶める言葉だ。

クライヴとてそんな言葉は聞きたくないだろう。

胸に手を当て、心を落ち着かせる。

すると鼓動に合わせるような静けさでクライヴがちらりとリディアを一瞥した。

「どうやら説明を求められているようだぞ、リディア」

耳朶を打つ声に「え？」と瞠目する。

そうして辺りを見渡し、あぁと納得した。

「……」

無言でこちらを見下ろし、怖いほどの笑みでリディアの言葉を待つクロエの姿を見れば納得せざるを得ない。

どうやら心の耳を閉じていたという話は嘘だったようだ。

リディアはクロエの反応を予測し身震いしつつ、浅く長く息を吸い込む。

「あのね、クロエ。一つ聞いてほしいことがあるのだけれど」

「何でしょうか」

にこにこにこにこ、笑顔は消えない。
あまりに完璧な笑顔に耐えられず後ろに引きそうになりながら、それでもリディアはきっぱりと言った。

「私、今日からここで暮らすことにしたから」
「……」
「勿論リディア・アヴェリンとしてじゃないわ。メリアルド王女ミレーニア様の身代わりとして皇妃になるためにここに残るの」
「……」
「お父様とお母様には申し訳ないと思ってる。でも、私は二人の助けになりたいの。分かってくれる？」
「……」
「く、クロエ？　何だかさっきからずっと返事がないようだけれど」

だ、駄目だ全然返事がない。
リディアは説明を終えても表情一つ変えず笑っているクロエが怖くなり、じり、じり、と後ろに下がる。
それを追うようにクロエの腕が伸び、怯えたように震えるリディアの肩をがっしりと掴む。

「クロエ？　何？　どうしたの？」

一瞬伏せられた顔がぱっと向けられる。
それは先ほどとは一転して般若のような険しさだった。

「――おじょおさまぁぁああ！！！！」
「ひぃぃっ！」
「どぉしてそのような大事なことを！　このクロエに相談もなしに決めてしまわれるのですかぁぁああ！！！」

「そんなこと言われたって――！　い、た！　ちょ、クロエ！　痛い！　舌噛む！」
「知りませんそんなの！」
ぐわんぐわん、世界が回るほど揺さぶられてリディアは目を回しながら、舌を噛まないよう必死に口を噤む。
（駄目……も、吐く……）
頭と一緒に胃の中も回り続け、顔面蒼白になりながら目を閉じる。
「おい馬鹿やめろ！　リディアが死んだらどうするつもりだ！」
クロエのあまりといえばあまりの豹変ぶりに抵抗もできずにいると、クライヴがぐいとリディアの肩を抱き寄せる。
あぁ、助かった。
心底そう思ったリディアだったが、読みが甘かったようだ。
リディアを挟んで対峙する侍女と皇帝。
二人はお互いの立場など一切無視し、一触即発の様相を呈していたのだから。

◇　9話

思いがけず優しい力で抱きとめた手が優しくリディアの髪を梳く。
たっぷりとした黒髪が指と指の間から零れ落ち、頬へと流れる。
するとクライヴはリディアが呆気に取られるほどの甲斐甲斐しさで頬にかかった髪を払い、ゆったりとした所作で口づけた。まるで労るような仕草に、リディアは自分が吐きそうになっていたことも忘れぽかんと口を開ける。胃の中の不快感などすっかり消え去っていた。
だがそんなクライヴの姿に驚きよりも怒りを発した者が一人いた。
クロエだ。

「お嬢様を誑かすとは、どういう御積りですか。皇帝陛下」
「誑かすとはまた異なことを」
「何の理由もなくお嬢様が皇妃の身代わりなんてするものですか」

指を突きつけるなどという不遜なことはしなかったものの皇帝を前にするには些か大きな態度で追求するクロエに、あくまでクライヴは余裕たっぷりに笑う。

「リディアが望んだことだ」
「貴方が望ませただけでしょう！」

寛容とも取れる笑みは、この状況を楽しんでいる風ですらある。
まさか今髪に口づけたのもわざとだろうか。
ふとそんなことを考えてしまうリディアだったが、二人の剣幕に押されて口を開くことができない。

「……お嬢様の優しさにつけ込むとは卑劣な」

それは困りきったリディアを見かねて放った言葉だ。
しかし口を挟まずにはいられなかった。

「クロエ！　やめなさい！」

いくらクライヴが許しているとはいえ、ここは彼のテリトリーだ。
たとえどんな理由があろうと彼を罵倒しようものなら処罰される。
リディアはここでクロエを失うわけにはいかないのだ。
鋭い声にクロエが口を噤む。
その様子を満足気に見るクライヴを睨めつけ、リディアはふらつきながらも彼の手から逃れた。惜しむように案ずるように伸ばされる手も避けて、ただクロエだけを見据える。

「クロエ、あなたは屋敷に戻ってお父様とお母様に伝えてちょうだい。短期間ですがリディアは後宮で過ごしますと。私は不肖の娘だから心配が尽きないかもしれないけれど、どうかご安心くださいって。それからあなたに罰を下すことは私が許しませんとね」

そう、クロエにはリディアの言葉をアヴェリン公爵に伝えるという重要な役がある。
叱責を受けるかもしれない。責任を取らされるかもしれない。
そう考えると恐ろしくなったが、アヴェリン公爵がリディアの願いを聞かずにクロエを処罰することはないだろうということは分かっていた。
そんなことをすればリディアが何をしでかすか分からないからだ。
だから安心して彼女を外に送り出すことができた。

（それに、私のせいでクロエまでここに留まることになるなんて嫌だわ）

クライヴの願いを叶えると決めたのはリディアだ。
一人で戦う覚悟はできているし、閉じ込められるのには慣れている。
しかしそこにクロエを巻き込むつもりなどなかった。
彼女は自分と違って自由なのだから。
しかし、毅然と言い放った命令にクロエは小さく首を振った。

「その命令は承服しかねます」
「クロエ……。お願い、分かって。私は――」
「分かっております。もう何年もお仕えしているのです。何を言った所でお嬢様をお止めできないことはこのクロエが一番よく分かっております」
「だったら！」
「ですがこのまま引き下がるつもりは毛頭ありません」
「じゃあどうするつもり？」

問うと、スカートの裾をつまんでたおやかな仕草で一礼したクロエが笑う。

「私もここに残ります。お嬢様を一人残すなど私にはできません」
「……そんなことは私が認めないわ。あなたはアヴェリン公爵家に戻るのよ」

頑として頷かないクロエと根競べのように睨み合う。
互いに譲らず引かず、降り落ちる静寂さえ押しのけるように火花を散らしていると、喉を鳴らして笑ったクライヴがそっとリディアの肩を叩いた。
「許してやれ、リディア」

「クライヴ……でも」
「どの道アヴェリン公爵には俺から伝える気でいた。そのぐらいの筋は通すさ」

まるでこうなることを予測していたかのような冷静さに手を握りしめると、もう一度肩を叩いたクライヴがクロエに向き直った。
透明なアイスブルーの瞳に見据えられ、今度こそ従順に腰を折るクロエに声を掛ける。

「リディアを支えてやってくれ。後宮はリディアには息苦しすぎる」
「御意。――有難う御座います」
「構わん。お前が言わなければ俺が命じる所だったからな」

やはりこうなることを分かっていたのか。
にやりと口の端を吊り上げるクライヴに、胸中で可愛くないと舌を出す。だからそのタイミングで振り向かれ、リディアは慌てて目を逸らす。

「どうした」
「う、ううん？　何でも」

心の声は聞こえないだろうが、やましいことに変わりはない。
だが取り繕うように笑ったのが悪かったのか。
クライヴは眉根を寄せてからじっとリディアを見つめ、盛大な溜息をついた。
失礼なことを考えていたのは、即効でバレてしまったらしい。

◇　10話

心の中の失礼極まりない言葉を隠すべく笑ってみせる。
そのまま沈黙を貫くとクライヴがやれやれと首を振った。
まぁいい。そんな言葉が耳朶を打つ。

「それより今後の話だ」
「今後の話？」

あぁ、とクライヴが頷く。
ゆったりとした所作で猫足のソファに腰掛けた彼は顎をしゃくって扉の向こうを指し示す。

「今後は女官長のヤナを頼れ。あいつにはお前のことを話してある。ただし他の侍女はお前のことを知らないから、くれぐれも注意しろ。特にそこの」

指を指され、クロエが眦を吊り上げる。

「そこの、とは私のことでしょうか？」
「お前以外に誰がいる。いいか、今後リディアのことをお嬢様と呼ぶことは禁じる。呼ぶならミレーニアか、姫と呼べ」
「……承知致しました」

……クロエ、今一瞬舌打ちが聞こえた気がするんだけど。
リディアは一瞬そう言いかけたが、慌てて言葉を呑み込み別の問いを発した。

「ヤナは知っているのね。私がアヴェリン公爵家の人間だって」

どうやら孤軍奮闘は避けられそうだ。
安堵するとクライヴは少し不服そうな顔を浮かべた。
「本当はもう少し手駒を増やしたかったが時間がなかった。他に二人ほどリディアのことを知っている人間がいるが、後宮内には入れんしな」
「後宮に入れない？　……もしかして男の人かしら」
例え家族であろうと後宮内に男は入れない。
今の所は俺のための後宮、とクライヴは言っていた。
ここは正真正銘、彼しか入れない女の園なのだ。
「宰相ユリウス・コンクラードと近衛騎士団副隊長のレナード・マクスウェルだ。この二人は必要不可欠な人材だからな。言わないわけにはいかなかった」
「必要不可欠な人材？　まぁ、確かに高位の方だものね」
「それだけじゃない」
小首を傾げるとクライヴが自分の隣をぽんぽんと叩く。
……座れということだろうか。
一瞬迷ったが、放っておくといつまでも催促していそうなのでリディアは素直に隣に座ることにした。
リディアがあっさり従ったからか、満足気な笑みを浮かべた辺り読みは当たっていたらしい。
「ユリウスにはリディアの教育係を頼むし、レナードには護衛を頼む。こればかりは俺やヤナだけでは手が回らんからな。それに二人にはお前の後押しをしてもらうつもりだ」
「後宮に入る妃に教育係と護衛？　何だか不思議な話ね」

「側室ならばそんなもの無用の長物でしかないが皇妃となれば話は別だ。公務もあるしな」

婚儀も済ませないうちから公務に参加させていいのだろうか。

リディアはクライヴの言葉に疑問を抱いたものの、彼がそう言うのだからそういうことなのだろうと結局は「ふぅん」と一言返すに留めた。

護衛はともかくとして、教育係がいるというのは心強い話だ。

父であるアヴェリン公爵の許しが得られるかさえも分からぬ状況であれば、後押しがあるというのも喜ばしい。

クライヴとプリンセス・オルテンシアのために出来る限りのことはしたいと思っているが、力になってくれる存在は少しでも多い方がいいとリディアは安堵の息をつきながら傍に座るクライヴに向けて無邪気に笑いかけた。

「それなら二人にはこれからお世話になるというわけね。一体どんな方達なのか楽しみだわ」

偽りの皇妃などという国の重要機密に関わりそうな話ができる相手というのはどういう人物なんだろうか。

純粋な好奇心を覗かせ考え込んでいると、クライヴが少し気まずげに目を逸らした。

「……あー。いや、それはな」

どうしてそんな、やましいことがありますとばかりに顔ごと背けてしまうのか。

「？　どうしたの？　クライヴ。もしかしてコンクラード様とマクスウェル様って気難しい方なの？」

クライヴと目を合わせようとソファに膝立ちになって顔を近づける。至近距離でふわりと香る甘い匂いに気を取られた時、あからさまに狼狽した様子のクライヴが「いや」と口を濁らせる。

「別に悪い奴等じゃない。二人とも俺の幼馴染だし気心も知れているし、どちらかといえば温厚な方だ。……ただ、少しアクと俺への忠誠心が強いだけで」

「うん、分かったわ。少しじゃないのね」

それだけ聞ければ十分だ。

要するに敬愛する主への忠誠心故にリディアへの風当たりが強いということだろう。……恐らくはクライヴがねじ伏せるように命令したのが原因なのだろうが。

それにしても一体どんな目に遭わされるのか。

考えるだに恐ろしいが今更後には引けない。

自分はプリンセス・オルテンシアになると決めたのだ。

ならば、誰に疎まれようと嫌われようとやるしかない。

ただ一人、クライヴが望んでくれる間はリディアは一人道化を演じるつもりだった。

「……お前の力になることは確かだ。そこは信用してほしい」

「クライヴが頼んだのなら間違いないでしょうね。けれど、もし力になってくれなかったとしても構いはしないわ。クロエもいることだし、こちらはこちらで頑張るから」

リディアを安心させようと付け足された言葉に首を振る。

そのままクライヴの腕からすり抜けるように立ち上がり、室内を見渡す。その目にふと留まったのは壁に設えられたクロゼットだ。

近づいていき、ひやりと冷たい木の取っ手を握り締めて引く。そ

のまま引いて引いて、自分の体の横幅程度まで開けた所でリディアは呆けた声を上げた。

「――まぁ」

きぃ、と音を立てて開かれたクロゼット。そこには色鮮やかなドレスがずらりと並んでいた。

何十着、そんな言葉では足りないほどの量は全て同じサイズだ。

靴や帽子、装飾品もぎっしりと詰め込まれている。聞くまでもなくリディアのために揃えたのだろう。

「本当に用意がいいこと」

嫌味というより本気で感心して呟く。

ともあれ、これはいい武器であり鎧だ。

流石にプリンセス・オルテンシアともあろう者が着た切り雀でいるわけにはいかない。

ひとまずは後宮にいる姫君達の嘲笑の的にならずに済んだことにリディアは感謝し、ほっと胸を撫で下ろした。すっかり戦う気でいるその背中にクロエが問いかける。

「どうなさるおつもりですか？」

「そうねぇ……」

今日のお召し物は、と訊ねるような緊張感のない声にリディアも似たような声色で返す。

人差し指を唇に当て、うーんと目を閉じて答えた。そうすることで少しでも思考力が上がるとでも言うかのような仕草は、幼い頃からの癖だった。

「プリンセス・オルテンシアになると一口に言っても、王女様がどんな立ち居振る舞いをするのか私では分からないわ。公爵令嬢とはいえ、私は令嬢としての教育を受けていないんだもの」

それは教育係のユリウスでも教えにくいことだろう。何せ男だ。ならば別の所から知識を得るしかない。

真っ暗な視界の中で思考が組み立てられていく。今自分が一番しなければならないこと、必要なこと――そういったものを考えていくのは楽しかった。

幼い頃から屋敷を出られなかったリディアにとって、思考は唯一の自由だ。

もっとも、あれこれ考えた結果を行動に反映させることは稀だ。それも屋敷の外で派手なことをやらかそうというのだから緊張もひとしおだが、ここで行動できなければ何のために後宮に留まるのか分かったものではない。

「お嬢様は今のままでも十分だと思いますが」

「そうはいかないわ。――あぁ、そうだ。クライヴ、一つお願いがあるのだけれど」

きっぱりとしたクロエに首を振り、そのままくるりと振り返る。さらりとねだる声にクライヴが片眉を上げた。

「何だ。ドレスや宝石ぐらいならすぐ贈れるが」

それはもういい。

「それはいいわ。今ここにあるもので十分だから。それより私に本をくれないかしら」

「本？　一体何に使うつもりだ」

「勉強よ。だからお姫様のことが書いてある本をありったけ頂戴。後宮が出てきたらもっといいわね。後宮での細かな仕来りやマナーはヤナやクロエに教えてもらうけれど、お姫様らしい振る舞いは学べる相手がいないから、こればかりは本に頼らないと」
「ほぉ。構わんが、勉強した後はどうするつもりだ」
「その後？」

興が乗ってきたのか、紅茶をカップに入れ直して静かに嚥下したクライブが訊ねる。

「そうね」

その優雅な仕草を見てピンと来たリディアは口元を緩めて挑戦的に笑った。

「お茶会でも開こうかしら。後宮の姫君達はよくお茶会を開くって昔本で読んだもの」
「確かによく開いているな。だが茶会なんて開いてどうする」
「皇帝が皇妃を側室に紹介して回るだなんて話は聞いたことがないでしょう？　だから私がプリンセス・オルテンシアの存在を皆に伝えるの」
「宣戦布告ですね」

えぇ、そうよ。笑ったまま答えたリディアにクロエがにやりと笑う。リディアが負けん気の強い性格だと知っているクロエには、このような態度は日常茶飯事なのだろう。ただクライヴだけが意外そうに、興味深そうにアイスブルーの瞳を僅かに見開いていた。

◇　皇帝の秘め事

とっぷりと日が暮れた頃、ようやく執務から解放されたクライヴは後宮へと足を向けていた。
中天にかかる月を見上げる。
活気ある城内も今は静まり、後宮に至っては物音一つ立てていない。
カツン、と大理石を踵が叩く。だが密やかな静寂を打ち破っても尚、後宮に住まう者達は侵入者を咎めようと外に出てこない。

（静かなものだ）

夜の呼吸が窓から流れこみ、クライヴの髪を揺らす音だけが彼の耳に届く全てだ。
もっとも後宮内はただ眠りに就いているわけではない。
通り過ぎる扉から、肌に伝わるほどの緊張感を感じる。
ここで止まれと、そして扉をノックしろと願う声が聞こえるようだ。その声を無視して先に進むと、途端に落胆したように緊張感が消えていく。

（今までどの部屋にも入ったことがないのに、まだ期待をしているのか）

胸中で苦々しく笑う。
しかし別に彼女達に非があるわけではないのだ。期待をすることも落胆することも、そうしなければならないだけの理由を背負って彼女達はこの後宮に足を踏み入れているのだから。
その色でもって皇帝であるクライヴの心を射止め、ゆくゆくは皇妃に。

家を盛り上げるために掛けられた期待に押し潰されずにここに留まれる強さを、クライヴは決して厭うてはいなかった。

（まぁ、だからと言ってみすみす声を掛けたりはしないが）

欲しいものも必要なものもすでに見つかっている。他のものになど目をくれるはずがない。

そんな薄情なことを考え自嘲じみた歪んだ笑みを浮かべた所で足を止める。

「こんな時間に何の御用ですか」

「……何だ、お前か」

「御期待に添えず申し訳ありませんが、お嬢――姫様が廊下に立っているとでも御思いでしたか」

月明かりに照らされた影は不満そうに言いながら、目的地である扉の前に立っている。

皇帝である自分相手に一歩も引かないのは、主への忠誠心ゆえだろう。

夜分に訪ねるのだ。警戒ぐらいされても別段不思議ではない。不思議ではない、が。

（この侍女にいちいち邪魔をされるのも面倒だ）

自分はこの部屋の主に用があるのだ。それをわざわざ誰かに断るのは面倒なことだし、せっかく手が届く場所に手繰り寄せたのに邪魔をされたくはない。

毅然とした態度でこちらを見据える眼差しを冷ややかに見返す。

そのどこまでも居丈高な態度のまま、クライヴは硬い声で告げた。

「そこをどけ。彼女に用がある」
「姫様はもう就寝なさいました。用件はこのクロエが御伝え致します」
「もう寝ているのか」
「久しぶりに外に出たのです。疲れるのは当然のことかと」
「……そうか」

責める視線を、そこだけは素直に受け止めて答える。
情に訴えて彼女の主を城まで連れ出し、これもまた情に訴えて引き止めたのは自分だ。侍女に謝罪などできないが、素直に悪いと思っているのも事実だ。それでも。

「寝ていても構わん。そこを通せ」
「……何故です」
「お前に理由を聞く権利があると思っているのか」

クロエが口を噤む。
暗がりの中でもはっきりと分かる苦々しい顔が、言い返そうかどうしようか逡巡しているのが手に取るように分かる。口の端を吊り上げて彼女の反応を見守るが、結局何も反論はなかった。
いい侍女だ。
本人を前にして口にはしないが、そう評価して笑ってみせる。

「後宮の主は俺だ。俺がどこに行こうと、誰にも意見される筋合いはない」
「……御意」

影が滑り、扉の前から消えていく。
それを見送りもせずクライヴは早々に扉を開け、ふわふわとした家具で整えられた部屋に足を踏み入れた。すると真っ先に柔らかな

レースの降る天蓋が目についた。
そしてその中心で眠る小柄な女の姿も。
「こうしていると本当に姫のようだな」
お姫様になりたいと願っていた、あれはいつのことだったか。
くつくつと笑いベッドに近づいていく。月光を柔らかに纏うレースを静かにどけてそのままベッドの端に座ると、細かな皺を刻んだシーツに黒髪が一房流れた。それを繊細なまでの力で掴んで指先で弄ぶ。誰も見ていない横顔は幸福そうに緩んでいることだろう。
「リディア」
返事をしてほしいのか起きてほしくないのか、自分でさえ分からない。
返ってきた寝息に寂しさを感じたのか安堵したのか、それも分からない。
ただ自分がいつでも触れられる場所で眠っている姿を見るのが溜まらなく嬉しく思え、クライヴは緩めた口元に黒髪を持っていく。花の香油がつけられたそれに衝動的に唇を落とすと、心から満足したとばかりに淡い息が漏れた。
（もっと触れられたらいいんだがな）
今なら頬を撫でても抱きしめてもキスをしてもバレない。
しかしそんなことをすればリディアの信頼を裏切ることになると、クライヴは小さく首を振って理性を呼び起こした。
「……今は、これでいい。お前が傍にいてくれればそれで」

明日も明後日もその先も、当面はこのままでいられる。その事実だけが自分の心を軽くした。
家から引き剥がされたリディアには申し訳ないが、嘘偽りなくそう思うのだから仕方がない。
一つだけ気がかりなのは。

（全てを知ったら、きっとお前は烈火の如く怒るんだろうな）

いや、それだけならまだいい。
激怒してそのまま屋敷に引きこもり、二度と手紙をくれなくなったら。
考えると心が軋んで苦しくなることをあえて想像し、クライヴはアイスブルーの瞳を悲痛に細めてリディアを見下ろした。
無邪気に眠る表情はもう二十歳だというのにあどけないが、この無垢な心をこそ守りたいと思ったのだ、自分は。
もう一度髪に唇を落とす。慈しむように、愛おしむように。
そうして数秒、たっぷりとリディアに触れてから耳元に顔を近づけ、目を閉じる。
今はまだ面と向かって懺悔する勇気がない。

「リディア」

答えがないと知りつつ名を呼び、続ける。

「お前は本当に俺がメリアルド王女と結婚したがっていると思っているんだろうな」

呟き、今度こそ自嘲の笑みが漏れる。
そんなことは当たり前だ。
自分がリディアにそう伝え、縁を取り持つための芝居を願い、こ

こに留まらせた。
自分という友人を救うため、彼女は一瞬にして多くのものを捨てたのだ。
無論、知らないのはリディアとクロエだけだ。
全ての事情は予めアヴェリン公爵に伝えてある。そうでなければいくら皇帝と言えども、公爵令嬢を無理矢理後宮に呼ぶことなど出来はしない。これは予定されていたことなのだ。
せめてもの慰めとして、嘘は極力少なくした。
メリアルド王女ミレーニアは実在するし、プリンセス・オルテンシアも実在する。自分を助けてほしいことにも変わりはないし、元老院の狸共が自分の娘達を後宮に入れたがって鬱陶しいことこの上ないのも嘘ではない。
だが、それでも嘘をついたのは事実だ。
あれだけ自分を真っ直ぐ信じてくれたというのに。
息が触れ合うほどの近さで眠り続けるリディアを見下ろす。
途端、泣きそうに顔が歪んだことを自覚するのにしばらくの時間を要した。

「リディア。……リディア、リディア」

縋るようにリディアを呼ぶ。
全てを知った時、知られてしまった時。
どうか、お願いだから。

「俺を嫌いにならないでくれ……リディア」

答えはない。
それが救いなのか責め苦なのか分からぬまま、クライヴはリディアの隣に横になって彼女の頭をそっと撫でた。壊れ物を扱うような仕草はユリウスやレナードが見たら目を剥くほど優しいが、無論見

せてやるつもりはない。

「リディア」

（俺の紫陽花（オルテンシア））

今はまだ何も言えなくとも、いつか必ず全てを話そう。

強烈に襲いかかる眠気に従い瞼を閉じる。

リディアと同じ深い闇の色に満足な溜息をつき、クライヴはそのまま眠りに就いた。

◇　11話

リディアが後宮に入ってから三日が経った。
部屋から出られないことは窮屈だったが、元々屋敷に軟禁状態だったリディアは大した不満も持たずに日々を送っていた。クライヴから贈られた本もある。これを読破してお姫様らしさを身につけないことには何も始まらないので、黙々と読みふけっていたら更に四つの夜が明けた。
その間、アヴェリン公爵家からの反応はまったくなかった。
あまりの手応えのなさにリディアは一瞬自分が見放されたんじゃないかと悲しくなったが、自業自得なので何も言わずにただ頭に叩き込んだ知識を抱いて立ち上がる。
今日からは実践だ。気は抜けない。

「やるわよ、クロエ」
「はい、姫様」

クライヴが大量に贈ってくれたドレスの一つを身につけ、ふわふわとした裾を踏まないように部屋の中央へと歩く。そうしてベッドの傍に立ってから腕を横に伸ばすと、クロエがさっと扇を渡した。
廊下を誰かが歩いて来る。
それを無視し、親指と中指をずらすように動かして扇を開く。
白のレース地に紫陽花があしらわれた扇はクライヴに贈られたものだった。
しっとりとした薄紫の花で口元を隠し、心持ち顎を上げてから見下ろすようにクロエを見やる。冷たく、温度を感じさせない視線で。

「どう？　クロエ」

だが主であるリディアにそんな目をされ、クロエは悲しみではなく僅かな喜色を浮かべた。……いや、決して彼女が危ない趣味を持っているからというわけではないのだが。

「もう少し角度をきつくして見下した感を強めるとよいかと」
「あら、まだ足りないのね。これでも私結構頑張ってるのに」
「姫様は優しすぎます。やるなら相手をねじ伏せるぐらいの気概でいかねば」
「そうね……。私、もっともっと頑張って誰もがひれ伏すようなお姫様になるわ」
「その意気です！　さぁ、ではもう一度」

むしろそう言い、さらに冷たくされることを所望するクロエの声に大理石を叩く靴音がぴたりと止まった。
入るか、このまま見なかったことにして帰るか。
扉越しにでもそんな葛藤が見え隠れする沈黙に、リディアは首を傾げて「クライヴ？」と呼びかけた。別に隠すようなものなどないのだから当然だ。だというのにクライヴときたら、何がそんなに気まずいのか嫌々扉を開けて渋い顔を浮かべた。

「……何をやっているんだ、お前達は」
「見ての通り、姫らしくするためのレッスンですが。それが何か？」
「何で姫のレッスンで見下すだの何だのという話になる」

低い声で問われ首を傾げるリディアに代わり、クロエが淡々と答える。
どうやら初日の印象が最悪だったせいで彼女はクライヴへの警戒心をより強めている様子だったが、それだけではないだろうことはリディアにも分かっていた。毎朝毎朝隣に寄り添って眠っているクライヴを見ることは、リディアにとっても心臓に悪い話だ。

しかしリディアはその件でクライヴに文句を言ったことはない。
（ダチというのは一緒に寝ることだってあるって聞いたことがあるもの。別に変じゃないわよね？）
それに自分は偽りとはいえ皇妃だ。
クライヴが夜この部屋を訪れ、一緒に眠るのは至極当然のように思えた。
第一そのためにこそリディアは後宮に呼ばれ、お姫様になる練習をしている。
そのクライヴが自分を見て渋面を浮かべるので、リディアは不安になって頬に手を当てて眉根を寄せた。
「ねぇクロエ。やっぱり変みたいよ、私達。この練習法じゃ駄目なのかしら」
すると思わず扇を落としそうになるほどの勢いで手を掴まれた。
「いいえ！　姫様のお考えに間違いなど御座いません！　陛下は後宮を分かっていらっしゃらないだけです」
「お前な、後宮の主は俺だと言っているだろう。分からぬはずがない」
「ですが陛下は殿方であらせられます。殿方に女の本性など分かりはしません」
もうすっかり姫様と呼ぶことに慣れたクロエは、それでもクライヴにはどこまでも不遜な態度でリディアを庇うように前に出た。今までだって何もされなかったというのに、一体何を警戒しているんだろうか。
不思議に思っているとクライヴが溜め息混じりに問う。

「……リディアもそう思ってるのか？」

否定を返してほしそうな問いに、分からないわと答える。

「でも後宮というのはとても怖い所なんでしょう？　だったらしっかりと戦う力を得なくてはならないわ」

「誰から聞いた、そんなこと」

「ヤナがくれた本に書いてあったの。歴代の皇妃様方はあんなひどいことをされて、どうやって耐えていらしたのかしら」

クライヴがくれた本に書いてあったのは優しくてふわふわしていて、そしてちょっと強くて凛としたお姫様の生きる世界だった。勿論リディアの好きな系統の話だし、目指す形がそこにあることは間違いない。

しかしヤナがくれた本を読んでいると、それだけでは後宮で生きていけないと分かってしまった。

『ここは戦場なのです。リディア様』

後宮に留まると決意した翌日、ヤナが密やかに告げた言葉。

女官長として務める彼女の言葉の重みは計り知れないものがある。

手をぎゅっと握りしめて本に書いてあったことを思い出していると、ずいとクライヴが手を出した。

「リディア。ちょっとその本貸せ」

「？　いいけど、どうするの？」

「いいから」

強引な言葉に従い、素直に本を手の平の上に乗せる。

するとクライヴはやや急いた様子で本をパラパラとめくり、無言で閉じた。
何があったんだろうか。
「クライヴ？　どうかした？　その本、何か間違ったことでも書いてあった？」
眉間に深い皺を刻む姿は怒気を孕んでいて、不安感がこみ上げる。
だから慌てて尋ねると、少し驚いた様子のクライヴがすぐに首を振った。
「何でもない。それよりクロエ」
「はい、何でございましょう」
「ヤナを呼んでこい。話があるから今すぐ来いと伝えろ」
「……御意」
怜悧なアイスブルーに見据えられ、やはり渋々応じるクロエが扉の向こうに消えていく。
それを黙って見送ると、不意に頭に手の平がのせられた。
優しく頭を撫でられ、リディアは落ち着かなげに視線をずらす。
こんな風に頭を撫でられたのは初めてだった。
「別にお前がそんなに頑張って戦う必要はない」
耳朶に触れる声は手の平同様優しい。
きっと今まで人と衝突する機会さえなかったリディアを案じているのだろう。
確かにクライヴの言う通りだろう。彼ならリディアに何が起ころうと守るはずだ。
それだけの権力が彼にはあるし、何より。

（今の私はプリンセス・オルテンシア。守らないわけにはいかないものね）

いつかここに来るはずの正式な皇妃。彼女の居場所を守るために。

そう考え、リディアはクライヴの優しい言葉に溺れそうになる自分を叱咤してきっぱりと首を振った。

「駄目だわ」

「駄目？」

「だって大人しくしてたら、あの本に書いてあったことが繰り返されてしまうかもしれないもの。だから今やらなくちゃ」

どれだけ後ろ盾の大きな皇妃でも、後宮では何かと上手く立ち回れないこともある。

男達の目につかない所で何をされるか分からない恐怖がここにはあるのだとリディアは知った。だから今しっかりと他の側室達にアピールしなければならないのだ。

プリンセス・オルテンシアには決して手を出してはいけない。

そんなことをしたら返り討ちになる――そのぐらいに思ってもらえれば本望だ。

「せっかくプリンセス・オルテンシアになるんだもの。ミレーニア様が安心してサンセットで生活できるように、足場ぐらいは固めておいて差し上げたいの」

そうすればプリンセス・オルテンシアもサンセットに嫁ぎやすくなるだろう。

クライヴとてその方が安心出来るはずだ。

「……そうか」

だから胸を張って言い切ったというのに、クライヴはどこか微妙そうな顔をしただけだった。

悲しげで苦しげで、そのくせどこか嬉しそうな不思議な表情。

より繊細さを増したその顔を見て、無性に何か言わなければならないという衝動が走ったが、その前に開かれた扉にリディアは咄嗟に口を噤んだ。

何を言おうとしていたのか、それはもう思い出せなかった。

◇　12話

「連れてまいりました」
「御呼びでしょうか、陛下」

現れたヤナとクロエを見て、リディアはさっとクライヴから距離を取った。
理由などないし元々くっついていたわけでもないのに、それでも何故か傍にいてはいけないような気がして、怪訝そうにするクライヴから逃げるように背を向けた。
何か、とても言わなければならないことがあったような気がするのだが。

（クライヴはきっと、何か悩んでることがあるんだわ。でもそれを私に話してはくれない）

友達なのに。
そう考えると少し悲しかったが、言えない理由があるのかもしれないと自分を慰めた。

（言いたくなったら言うわよね。それまではそっとしておきましょう）

言うべき言葉は既に忘れてしまったが、またその時思い出せばいい。
吹っ切れるように結論づけ、パールホワイトのドレスの裾をそっと押さえて戻ってきた二人に笑いかける。

「おかえりなさい。ヤナ、クロエ」

「只今戻りました」
「姫様？　どうかなさいましたか？」

流石にクロエには笑顔を繕ってもバレてしまうらしい。
案ずるような声で問われるが、自分でもどうしてこんな態度を取るのか分からないので「何でもないわ」と首を振った。そうしてクライヴに譲るように脇へと避ける。クライヴはヤナに用事があったはずなのだ。

「……？」

眉を顰め視線でこちらに問いかけるクライヴに今度は苦笑で返す。
すると彼は何を思ったのか、リディアと似たような苦笑を浮かべた。
背を向けヤナを見るクライヴをぼんやり見つめる。ぴんと背筋を伸ばした立ち姿は威風堂々たるものだったが、やはりどこか影があるように思えてならなかった。
やはり気になる。
リディアは先程の結論を捨てて問いかけようとも思ったが、慌てて喉元まで出かかった言葉を呑み込んだ。

（駄目ね。言葉にしようと思うと、どうにも上手くいかないわ）

元々自分達はお互いの姿を見て会話するということに慣れていない。
そしてリディアは屋敷に閉じ込められていたのだ。相手の表情を、声色を感じて感情の機微を察知して話を運ぶのはあまり得意ではない。

（ダチが悩んでるのに話も聞いてあげられないなんて）

考えれば考えるだけマイナス思考に陥る。
その間にもクライヴはヤナを責めるように声を尖らせて先程の本の文句を言っていた。

「リディアにおかしなものを見せるな。教育に悪い」
「御言葉ですが、陛下の御渡しした本だけでは教育が足りないと判断致しました」
「どこがだ。立ち居振る舞いならあれで十分だろうが」
「ですがあれでは後宮で生きてはいかれません。陛下がミレーニア様を一生御守りするのならばともかく」

窘めるようにミレーニア様と強調するヤナにクライヴが押し黙る。
リディアをメリアルド王女ミレーニアとして扱うと決めたのはクライヴだ。
暗にそう告げる彼女の言葉はとても正しい。
しかしミレーニアの名前を聞いた途端表情を曇らせたクライヴを見ていると、彼が虐められているように思えてならない。後宮に来た日からいつも不遜で偉そうな彼がこんな顔をしていると、ひどく落ち着かない。
視線を落としざわりと心が騒ぐ音に耳を澄ませ、はたと思いつく。

（もしかしてクライヴったら、プリンセス・オルテンシアと喧嘩でもしたんじゃないかしら）

それはまさか、自分のせいで？
考え、慌てて首を振る。

（いいえ、それはないわ。だってクライヴは予め許可を取ってあるって言っていたもの……その言葉が本当なら理由は別にあるはず）

あくまでクライヴが言った言葉本当ならば、だが。
心がざわつく。しかしそれにも首を振ってリディアは目尻に力を入れた。

（クライヴはあの手紙に書いたことを嘘じゃないって言ったわ。だったらちゃんと信じてあげなくちゃ）

それに彼のことだ。わざわざ自分が不利になることはしないだろう。
プリンセス・オルテンシアに許可も取らずにリディアを偽りの皇妃にして、本物に逃げられるなど本末転倒なのだから。

（そうよ、私は信じるわ。だからクライヴが話すまで待とう）

ぽんと胸を優しく叩き、一度大きく深呼吸する。
そうして今度こそ本当の笑顔を浮かべて二人の間に入った。

「その話はもういいじゃない」
「ですがミレーニア様」
「だがな、リディア」
「二人とも私のことを心配してくれているんでしょう？　その二人が喧嘩なんてしちゃ駄目」

無表情のヤナと憮然としたクライヴを交互に見て、よく似ているわねと笑う。

「ありがとう。二人の気持ちはとても嬉しいわ」

そうやってくすくす笑っていると、毒気を抜かれたのか二人は揃

って溜息をついて肩の力を抜いた。
――本当によく似ている。
同じことを思ったのだろう。クロエがぷっと吹き出した。
だからだろう。そっぽを向いたクライヴは照れ隠しのように咳払いを一つしてからリディアに問いかけた。

「……茶会の準備はどうなっている」
「お茶やお菓子の準備はクロエがしてくれているわ。皆様の招待はヤナが動いてくれているし」
「ヤナか。それならとりあえずは安心か」
「陛下。なぜそこで私を見るのです」
「さぁ、何でだろうな」

笑われた仕返しか、クライヴは先程までの憂い顔を捨ててにやりと笑う。
ようやく平常運転となったクライヴの態度に肩を震わせて笑うと「姫様！　笑う時は扇で顔を隠してください！」などとクロエの叱責が飛ぶ。慌てて扇で口元を隠すが、笑ってしまったこと自体が悪いのかクロエに睨まれてしまった。勿論姫らしくないからなどという理由ではないだろうが。

「そういえば姫様。手配が整いまして御座います」

リディアにかかる無言の圧力をさらりと無視して言い放ったのはヤナだった。
手配、というのは茶会の招待だろう。

「あらもう終わったの？　ありがとう。それで一体誰を招待したの？」
「後宮には多くの側室がいらっしゃいます。そのすべてを呼ぶとな

ると今は準備が足りませんので、古参の方々を二人お呼び致しました。皇妃が行う初めてのお茶会です。特別に、と前置きして御呼びした方が御二人の面子も保たれましょう」
「そうね、私も最初から全ての姫君を相手にするのは骨が折れるわ。よい采配ね」

扇で口元を覆ったままふわりと笑うリディアに「勿体無い御言葉」とヤナが頭を下げる。その顔も無表情だが、一週間過ごしてみて彼女が別に不機嫌なわけでも何も感じていないわけでもないとリディアは気付いていた。ただ表に出すのが苦手なだけなのだ。
今だってほら、纏う空気は柔らかい。
だが不思議なことに。

「古参……。確かシルヴィアとゼナだったか」
「はい。御二人とも陛下が皇妃を迎えられたのが突然だったこともあり、挨拶もできずにいましたのでよい機会ですと仰っておりました」
「ふん。リディアが声を掛けなければ無視を決め込むつもりだった癖に図々しい」

クライヴの問いにヤナはしゃっきりと完璧なまでの無感情な顔で淡々と答える。それは立場をわきまえてというよりは、何か別の意図があるのではないかと思わされるほど堅苦しい。
一体二人に何があったのか興味はあったが、それにもあえて踏み込まずリディアは音を立てて扇を閉じた。

「構わないわ。無視されるということは、要するにこちらから打って出られるということでしょう？　――クロエ、お茶とお菓子の準備を急ぎなさい。皆様に喜んで頂くために、極上の品を手早く用意して差し上げるのよ」

「承知致しました」
「私もクロエを手伝いましょう」

凛とした声で指示するリディアにクロエが喜色さえ浮かべて頭を下げる。
ヤナもリディアに従う形できびきびと扉から出て行った。
それを見送りもせずにクライヴが呆れたように溜息を漏らす。

「やけに好戦的だな。お前がそんな性格だったとは知らなかった」
「私だってゲーム以外で攻めに転じるなんてことはないわ。争いも喧嘩も好きじゃないもの。でも今の私には後宮のお姫様達と戦う理由があるから」

それはとても大切な理由。
クライヴを助けると決めた時と同じ、重要で折れない理由だ。

「クライヴは誰にも渡さないわ。だから私は戦うの」

そしてどうかプリンセス・オルテンシアと幸せに。
純粋な願いと共に言い放つ。
するとクライヴは一瞬息を詰め、苦しいせいかやや赤く染まった頬を緩めて「そうか」と囁いた。
先程とは打って変わった心からの笑みに、リディアは彼の心が少しでも軽くなったようだとほっとした。

はたしてリディアが望むまま、クロエとヤナは二日と経たずに茶会の準備を終えた。
極上の品々を前にテラスから見える甘い花の香りに、リディアはうんっと伸びをしてから遠くを見据えた。シルヴィアとゼノがやってくるであろう方角を。

「さぁ、いらっしゃい」

今日は快晴。戦うにはいい日和だ。

◇　13話

晴れやかな空模様が白いテーブルクロスによく映える昼下がり。
シルヴィアとゼナは前日招待を受ける旨を正式に伝えに来た侍女をそれぞれ横に伴い、リディア達の前に現れた。

「御機嫌麗しく、ミレーニア様」
「今日は御招きいただきましてありがとうございます」
「こちらこそお会いできて嬉しいわ。今日はどうぞ楽しんでいってくださいませね」

ニコニコ笑顔で会釈する二人にリディアも微笑み、クロエとヤナに案内を任せる。そうして先導する二人をゆったりと追いながら歩調を緩め、さりげなく二人の姫君に並んだ。
いつもならクロエとヤナの隣に並ぶ所だが、そうしてはならないことは勉強済みだ。
主は主、侍女は侍女。その線引きもできなければ貴族令嬢とは言えない。

「でもよろしかったのかしら。わたくし達、何か手土産でもと思っていたのですけれど」
「えぇ。せっかく皇妃様にお会いできるんですもの。御挨拶の印として何かプレゼントして差し上げたかったわ」
「お気遣いありがとう。けれど今回はあくまで内々の席ですもの、どうぞ気になさらずおくつろぎになって」

頬に手を当て小首を傾げる二人にコロコロと笑って返す。
無邪気で敵意も害意もない笑顔。それらもすべて入念に叩き込まれている。

ただ。

（早くも顔が引き攣りそう……愛想笑いするのがこんなに大変だったなんて知らなかったわ）

あまり人と接する機会がなかったこともあり、リディアは人付き合いが他の貴族令嬢と比べると不得手だ。それなのに付け焼刃の知識と練習でお姫様を演じるのだから、顔も引き攣ろうというものだ。

胸中で溜息をつく。それから二人の姿をそっと覗き見た。

（この人達が後宮の古株なのね）

日傘が作り出す影の中笑顔で小さく会釈する二人は、まるで対照的な出で立ちをしていた。

滑らかな光を放つ金髪とペリドットの瞳のシルヴィアはふわふわとした巻き毛を揺らし、愛らしい横顔に小さく笑みを浮かべている。パール・ブルーのドレスの淡い色調も彼女の可愛らしさをより引き立てているようだ。

リディアがお姫様と聞いてぱっと想像する人物像の、まさにそのものであるような立ち姿は男なら誰でも守ってやりたくなるほど柔らかだった。

対してゼナはシルヴィアとは逆でどこか鋭さを感じる美女だった。燃えるような赤毛にそれよりも鮮やかなルビーの瞳、ヴァーミリオンのドレスはそこにいるだけで相手に存在を強く刻み付けるだけの鮮烈さだ。彼女の切れ長の双眸で睨み据えられようものなら、男はすぐさま雷に打たれたように行動停止するに違いない。

「皆様、シルヴィア様やゼナ様のように御綺麗な方達ばかりなんでしょうね」

世辞ではなく本気で零す。
憂いを隠すためやんわりと扇を口元に当てると、二人は揃って笑い返した。
笑いながら静かにリディアを見つめる。
そこだけ笑っていない瞳はこちらの力量を計るようにさりげなく全身を見渡した。

「どのような方かと思っておりましたが、随分可愛らしくて御若い方でいらっしゃいますこと」

先に沈黙を破ったのはゼナだった。
口の端がにゅっと吊り上がり、赤い口紅が艶やかに光る。
それを“失礼”とでも言いたげに扇で隠しながら目を細める姿は、暗に幼いと言っていた。

「えぇ、本当に。プリンセス・オルテンシアの名に相応しい可憐な方だわ。陛下が御選びになったのも分かります」

釣られてシルヴィアが可憐な笑みを湛えてリディアを褒めにかかる。
しかし褒められるのは嬉しいが、それをシルヴィアやゼナのような美人に言われると嫌味にしか聞こえない。言葉の端々に刺が見え隠れしていたら尚更だ。
言葉をそのまま受け取れば、皇妃となるリディア――ミレーニアを讃え、これから後宮内で上手く付き合おうと考えているかただのお人好しかのどちらかだろう。
だがクライヴの企みにも気付かぬ鈍感なリディアでさえ分かるのだ。
二人は今、胸中で“勝った”とほくそ笑んでいるのだと。

（さぞや気分がいいでしょうね。私のような女が皇妃なら、自分達にも勝ち目が見えるから）

ゼナは十八、シルヴィアは十九だと聞いている。
この中で一番年上なのはリディアなのだ。
だというのにこの中で一番大人っぽくないのもまた、リディアなのだ。
情けない話だがリディアは自分が美貌も教養も足りないことを知っている。
それが滲み出ているのならば、確かに相手が勝てると思うのも仕方がない話だ。

（でもここで引けるわけがないわ。私の後にはプリンセス・オルテンシアがいるんだもの）

無論プリンセス・オルテンシアなら美貌も教養もあるだろうから問題はないだろうが、元々後宮で女達が集う機会はとても少ない。せいぜい侍女を通して手紙や贈り物をやり取りする程度だと聞いている。万が一リディアが嘗められっぱなしのまま入れ替わったら、そのままプリンセス・オルテンシアまで嘗められてしまう。

（彼女達が顔を合わせた時、顔立ちが全然違ってたら色々面倒だろうけど、そこはクライヴが何とかしてくれるわよね）

リディアとプリンセス・オルテンシア。
時期的に引き篭ってばかりいられないのはリディアなのだから、こればかりは仕方がない。
そうでもしないとクライヴに新たな側室が追加されかねない。

（頑張らなきゃ）

向けられた嫌味に対し胸中で緊張の溜息を漏らしてから、リディアはそっと頬を吊り上げる。
この程度の嫌味は想定の範囲内だ。そして対応策もちゃんと準備してある。
前日差し向けられた二人の侍女が持ってきた御礼の手紙。
その封筒と封筒が忌色である墨色なのを目に留めた時から、あっさり和解して茶会が楽しめるなどという楽観的な思考は捨てたのだから。

「御褒めいただいて嬉しいわ。もし悪く思われたらどうしようかと思っておりましたの。先々代帝の十三回忌がある影響で今年中には婚儀は挙げられませんが、後宮には留まるつもりですので御二人とは是非仲良くなりたかったんですもの」

大人に見せることが難しいのはレッスン初日で十分理解している。
だからリディアは逆の方向に――あくまで若い娘のように無邪気にくすくす笑った。
その無邪気さが持つ毒がぞくぞくするほど素敵です、とはクロエの言だ。

「まぁ、願ってもいないお話ですわ。でも……」
「よろしいのかしら？　後宮に留まるだなんて」

一瞬の間を空けて二人がぽんと手を打って喜色を浮かべ、すぐに睫毛を伏せる。
仲良くしたいけれど婚儀前の姫が後宮に留まるのは非常識なのではないか。
案じる振りをして常識的な対応、この場合は親元に帰ることを勧める二人に小さく首を振ってみせた。

「私もそのように聞いておりますわ。ですから御断り差し上げたのですが……陛下が」

その先は言わなくても察しろと言わんばかりに苦笑を浮かべてみせたリディアに、シルヴィアとゼナが一瞬顔を強ばらせる。しかしそれも風に舞うが如くふわりと掻き消えた。いや、意地で消してみせたというべきか。

「それにしても驚きましたわ。ねぇゼナ様」

「そうですわね、シルヴィア様。わたくしも少々驚いておりましてよ」

やんわりと話題が変えられる。

本当はもう少し突っ込まれると思っていたリディアは肩透かしを食らいつつ、言葉の意味を計りかねて眉を顰めた。

目に眩しいテーブルクロスが間近に見える。

それを見ながら素直に問いかけた。

「どうかしまして？」

すると向こうも何故か肩透かしを食らったようにきょとんとした後で、視線をリディアの髪に向けた。柔らかく結われた鳥羽玉の髪を二人はしげしげと眺めていた。

「この黒髪、地毛なのでしょうか」

（髪がどうかしたのかしら？）

不思議に思ったが、純粋な好奇心を覗かせるシルヴィアに頷いて

みせる。

「えぇ、勿論。染めたことなどなくてよ」

「それでしたら余計に珍しい事だわ。黒髪だなんて、わたくし達見たことがありませんもの」

ゼナの言葉にリディアは最初馬鹿にされているのかと思ったが、どうやら違うらしいと気付く。

感嘆の息は心から吐かれたもので、そこに敵意は見えない。純粋に驚いているのだ。

ただ、何故驚かれるのかが分からない。

(驚くなら目の方じゃないのかしら。プリンセス・オルテンシアの名前の由来になっているぐらいだし)

しかしシルヴィアのゼナもリディアの目など眼中にない様子だ。ますます怪訝に思っていると、ミルクティーの甘い香りが鼻孔をくすぐる。

頭が溶けそうなその甘美な香りに混ざってゼナが独りごちた。

「これではまるでフィアレーンの再来ですわね」

「……え?」

今、何て?

意外な言葉に目を瞬かせる。

しかしどういうことか問いかけようとするリディアを制するようにクロエが耳打ちした。

「姫様、お茶が冷めてしまいます。どうぞお早く」

「え、えぇ。そうね」

頷くとクロエとヤナが二人を座らせて茶をカップに注いでいく。
すると二人は今の話などなかったかのように「このお茶はどこのかしら」と茶の話に花を咲かせ始めたので、結局リディアは自分の疑問を解消できないまま席に着くこととなった。

◇　１４話

お互い敵意が見え隠れするとはいえ、そこは貴族令嬢。
それぞれの意地にかけても本性を出すことはなく、リディア達は表面上穏やかに茶会を楽しむことができた。クロエが用意した茶も菓子も思いの外好評だったこともあるだろう。シルヴィアもゼナも満足した様子に見える。
リディアも自身が気にかかっていることには蓋をして、努めてしとやかに猫をかぶり続けた甲斐があったというものだ。

（プリンセス・オルテンシアとして姿は見せたことだし、とりあえず目的は達成かしら）

会話の節々にクライヴとの仲の良さはちらつかせておいた。
これが多少の牽制になるといいと思いながら小さく笑うと、城下で鐘の音が鳴った。

「あら？　この音は確か大聖堂の……」

屋敷や後宮の室内から聞いたことはあるが、これほど大きな音を聞いたのは初めてかもしれない。
日に二回鳴るこの高らかな鐘はサンセット大聖堂のものだと以前クロエから聞いたことがある。いつもは窓を閉めていたからはっきり聞こえなかったが、実はこんなに大きな音だったのかとリディアは感嘆した。
しかしただ感嘆するだけのリディアに対し、シルヴィアとゼナはいそいそと立ち上がった。

「そろそろ御祈りの時間ですし、わたくし達はこれで失礼いたしま

すわね」

優雅な所作の中に微かな焦りを感じる。

それほど今の鐘は大事なものだったのだろうかとリディアは目をぱちぱちと瞬いた。

街中で見た人々の姿を思い出す。

大聖堂から溢れる人の波、真摯な姿。

しかしそれが目の前の二人にも当てはまるのが想像つかない。

「御祈り？　シルヴィア様とゼナ様はサンセット神教と御縁でも？」

何の考えもなしに問う。その無意識で無邪気な問いに、シルヴィアもゼナもさっと怪訝そうに眉を顰めた。何を言っているのだと顔いっぱいに書いてあるなと思っていたら、本当にその通りの言葉が放たれる。

「何を仰ってらっしゃるの？」

「もしかして、ミレーニア様は御祈りをなさらないのですか？」

「……そういうわけではないけれど」

不快感を織り交ぜて問い返され、咄嗟に嘘をつく。

事実リディアは生まれてこの方祈るということをしたことがない。

ならば素直にそう言えばいいのだろうが、何故かこの場でその言葉を口にするのは憚られた。だから代わりにもう一つ問う。大聖堂前で祈る人々に向けてクロエに訊いたのとほぼ同じ問いを。

「御二人は、一体何を祈ってらっしゃるの？」

座ったまま見上げた先で、ゼナが柳眉をこれ以上ないほど顰めた。

「……呆れた。何を祈るかだなんて、貴方がそれを仰るのね。ミレーニア様」
「わ、私何かおかしなことを訊いてしまったかしら」
「それにも気付いていらっしゃらないのね……。深窓の令嬢とは聞いていたけれど、ここまでの方は初めてだわ」

世間知らずだと言外に指摘されぐっと口を噤む。
そんなリディアを冷たく見下ろし、勝利に酔うでもなく嘲るでもなくシルヴィアが目を細める。そよと扇から放たれる風に彼女の金の髪が揺れた。

「御存じないようですから他言は致しません。わたくし達も不穏な話は避けたい所ですし。――ですがくれぐれも御忘れなさいませんよう」

バチンと大きな音を立てて扇が閉じられる。華奢な背がこちらに向けられた。

「今のお話、サンセット神教の信者に聞かれたら異端審問にかけられましてよ」
「……え？」

（どうして今の話が異端審問と繋がるの？　私はただ何を祈っているのか訊いただけなのに……）

「サンセット皇室は大聖堂とも繋がりが深いと聞きます。それなのに皇妃様ともあろう方がお祈りさえ満足にしないようでは」

呆然とするリディアにシルヴィアが畳み掛ける。
それに合わせるようにゼナが頷き、大きく露出した背中が向けら

れる。

「えぇ、万一サンセット神教に知れたらその関係に亀裂が入るかもしれませんわ。そんなことになれば陛下もいい迷惑でしょう。いいえ、もしかしたらすでに迷惑を被っていらっしゃるのかもしれませんが」

二人が揃って背を向け、後宮へと歩みを早める。

どうしてあんなことを言われるのか、何故冷たい目で射抜かれるのかリディアにはさっぱり分からない。だが、一つだけ分かるのは。

――失敗した。

リディアは内心歯噛みする。

二人はリディアを敵視するどころか、完璧に軽蔑し眼中から追い出したのだ。

「でも、どうして」

祈りを捧げないということが軽蔑の対象になるのだろう。

何を祈るか訊ねるだけで呆れられるのだろう。

考えても考えても答えが見つからず、リディアは頭を抱えて溜息をついた。

悩む主をクロエが心配そうに見下ろし、声を掛けようかどうしようか迷っているのが分かる。だがそれも数瞬のことで、彼女はすぐさま動きを留めて「あ」と吐息のような声を漏らした。

「何だ、随分寂しい茶会だな」

その声と共に雲一つない快晴から一つ影が生まれ、リディアを包む。

振り返る。と同時に視界に入ったプラチナブロンドに一瞬目を奪

われた。

（お日様みたい）

どちらかといえば月に似た色なのにそう思い、それからすぐに「えぇ！？」と声を上げて立ち上がろうとして失敗した。

「な、何でクライヴがここに？　お仕事は？」
「お前に会いたくなったから抜けてきた」

後ろからやや強引な強さで抱きしめられる。
それを無理矢理引き剥がそうとすれば甘やかな笑顔であっさり拒否され、腕に更なる力が籠められた。

（ち、ちち近いんだけど……！）

「ちょっと、離して！」
「どうしてだ」
「どうしてって……恥ずかしいじゃない！」
「俺は恥ずかしくない」
「クライヴの意見は聞いてないってば！」

今までソファに座って肩を抱かれるぐらいのことは経験したが、こうやって堂々と抱きしめられた経験などない。焦らない方がおかしかった。
一瞬にして沸騰した頭でぐるぐる「平常心平常心平常心」と叫び続けるが、そんなもの何の効果もない。むしろ平常心になれない自分に気付いて余計に混乱する始末だ。
人に聞かれないよう息のみで怒鳴られても楽しげに笑って受け流すクライヴはリディアの肩に顎を乗せ、満足気に目を閉じる。そう

してリディアを現実の世界に引き戻すための言葉を、歌うように口にした。

「それより向こうを見てみろ。なかなか傑作だぞ」

「何よ傑作って――……」

意地の悪い声で示されるままに前を見る。

そして目に入ってきたものをまじまじと見つめ、呆けた声を上げる。

「あ、れ？」

先程こちらに背を向けて消えようとしていた二つの対照的な立ち姿。

それが今やリディアとクライヴの方を向いている。

眼中から追い出したはずのリディアへ敵意を、後宮の主たるクライヴへ恋慕を寄せて。

◇　15話

くっついている姿を見てか、それともクライヴを見てか。
茫然自失といった状態の二人の側室を綺麗に無視し、クライヴはリディアに頬をすり寄せた。

「無理矢理にでも抜けてきてよかった。これでお前を一人にせずにすむ」

安堵するような甘えた声に抗議の声を上げたのは当のリディアだ。

「陛下……私にはクロエもヤナもおります。一人ではありません」
「だが二人はお前と一緒に茶を飲めない。それでは寂しいじゃないか。それにお前も茶会を楽しみにしていたんだろう？」

確かにある意味ではそうなのだが、素直に頷くのはそれはそれで嘘になる。
僅かに逡巡する。
頷いたのは今自分がプリンセス・オルテンシアであることを自覚したからだった。

「それはそうなのですけれど、陛下もお疲れでしょう？　それなのにお付き合いしていただくなんて……」

普段の自分なら有り得ぬほどの謙虚さでやんわりと背中に触れる体温を拒否する。
束縛するようなクライヴの腕にそっと触れると、くすりと笑う気配がした。

「可愛いことを言う」

からかうような声も言葉も、目の前に立つ二人の姫君への牽制だということぐらいリディアも気付いている。しかし耳に触れる吐息の熱さを感じ続けるのはいい加減限界だった。

「いい加減離してほしいんだけど」

「照れているのか？」

「効果は十分出たんだし、もう離してくれたっていいじゃない」

「何だ、やっぱり照れているんだな」

「あのねぇクライヴ……」

ゼナとシルヴィアに聞かれぬよう小声で説得を試みるがクライヴは何処吹く風と笑う始末だ。そんな彼に溜め息混じりに説教しようと口を開くが、今まで誰かとこんな風に触れ合った経験などないリディアの頬は真っ赤に染まっており、威厳も何もない。

（昔とは全然違うのね）

小さい頃、手紙の返事を催促しに来たクライヴに一度だけ抱きしめられたことがある。

あの時のクライヴは華奢で、女の子のようだったのに。

背中に触れる体の大きさもリディアを閉じ込める腕の硬さも、昔とはまるで違う。

見た目は以前と似た繊細さがあるのに、触れなければ分からないものなのだなとリディアはそっと息をついた。自覚すればするだけ頬の熱もいや増すのが悔しいが、どの道逃げる術がない。すると。

「可愛いな」

掠れた低い声が耳朶を打つ。
そして、何がと問う前にただでさえ熱かった頬に更に高い熱が触れた。
「――……っ！？！？」
ちゅ、とわざとじゃないかと思うほどの大きさで聞こえる音と柔らかな熱に息を呑む。
何度も響く音と感触にさっと視線を滑らせる。
喰むようにキスを与えるクライヴのアイスブルーと視線がかち合う。
それを腕を掴む手に力を籠めて思いきり睨みつけ、羞恥心が命じるままクライヴの顔を押しのけようと手を伸ばすが結局行動には移せなかった。
前方聞こえる小さな咳払い。
ささやかなその反抗がリディアの理性を取り戻させてくれたおかげで。
「御機嫌麗しゅう。陛下」
ドレスの裾をつまんで深く頭を下げるのはシルヴィアだった。
「皇妃様からは内々の茶席だと聞いておりましたが、まさか陛下もいらっしゃるなんて知りませんでしたわ」
「何、単に皇妃に会いたくなって来ただけだ。元々邪魔をするつもりはなかったさ。それより――」
並んで頭を下げ、ちくりとリディアを刺すような言葉を放ったゼナに嘘臭いまでの笑みを向けてクライヴが一旦言葉を区切る。
良くない兆候だ。

ふとそう思ったが、結局止められないままクライヴはにやりと笑んだ。

「こうして顔を合わせるのは初めてだな。ゼナにシルヴィアだったか」

「――っ！」

あくまでリディアを抱きしめたまま微動だにせず放たれた言葉に、ゼナとシルヴィアが顔をさっと赤らめる。対してリディアは「え？」と声を上げそうになるのを必死に押しとめた。

プリンセス・オルテンシアとして後宮に留まるのは彼が他の側室の所に行かなくてもいい口実になるからだ。

だが、まさか古参の二人の所に未だに通っていなかったのは驚きだった。

驚きを悟らせないよう顔を伏せる。

それをいいことにクライヴが「で」と話を続けた。

「座ったままの皇妃を置いてどこに行くつもりだった」

「……それは」

「鐘の音がしましたでしょう。わたくし達、御祈りをしに戻るところだったのです」

「あぁ成程、それは結構。だが変な話だな。後宮にはサンセット神教の敬虔な信者などいなかったはずだが」

しとやかな声がぴたりと止まる。

そこで初めて、二人が祈りを捧げるというのが口実だったことを知った。

知って、そんな簡単な断り文句にさえ気付かなかった自分に嫌気が差した。

やはり今日の茶会は失敗だ。

自分ではまだ皇妃として振舞うには不安が大きすぎると気付けただけでも収穫はあったのかもしれないが。
誰にも見られないように唇を噛み締める。
それを見計らったように囁きが落ちた。

「そんな顔をするな、リディア」

名前を呼ばれ、反射的に顔を上げる。
何故かは分からないが、プリンセス・オルテンシアやミレーニアと呼ばれるよりもずっと自分の立場を理解したせいかもしれない。

「そう意地悪を言うものではありませんわ、陛下」

側室達に聞かせるような声で、花が咲くように無邪気に少しはにかんで笑ってみせる。それを見たクライヴは一瞬呆けた顔を浮かべたが、すぐさま吹っ切れたように嫣然と笑んだ。

「そうだな。彼女達が帰れば二人きりになる口実ができる」
「あら、今日の陛下は随分と甘えん坊さんなのですね」

くすくす笑う。
それに何を思ったのかクライヴが身を離し、影のように控えていた侍女二人を見据えた。

「ヤナ、クロエ」
「「はい」」
「お前達は茶と菓子を部屋に運べ。俺達は先に部屋に戻る」

二人の侍女に命を下しつつリディアに手を差し出す。
日に焼けることを知らないその手の平に素直に手を重ねると、ぐ

いと引っ張られた。
部屋に帰ることは知っていたが。
「陛下！？　降ろしてくださいませ！」
「断る」
（抱きかかえて帰るなんて聞いてない！）
一体どこで覚えたのかと疑問をぶつけたくなるほどの滑らかさでふわりと抱きかかえられ、クライヴはあっさり側室達に背を向ける。そのままずんずん進んでいく彼の肩を掴んで抗議するが、今まで一度たりとも抗議を受け入れてもらえたことはない。今回も無駄骨だろうということは分かっていた。
「では俺達はこれで失礼する。貴方がたは祈りでも何でも捧げていてくれ」
側室達に別れを告げ、早足に後宮に入っていく。
だが悔しげに歯噛みする二人の姫君よりも、今はこの状況を打破するのが先決だ。
「陛下！」
そう思い再度声を上げると、ぽつりと拗ねた響きが落ちてきた。
「――お前が悪い」
「え？」
「俺は“お前”を呼んだのに、ミレーニアになどなろうとするから」
どういう意味だろうか。

顔を顰めるクライヴの横顔をじっと見る。
だがいくら見つめても彼は口をぎゅっと噤んだまま、部屋に入るまで何も言ってはくれなかった。

◇　16話

クロエをも閉め出し、厳重に何度もドアノブを回して誰も入ってこないことを確認したクライヴは、大股にソファへと座り込んだ。
……リディアを抱えたまま。
本来なら柔らかなクッション――それも少女趣味なピンク色の――が触れるはずの体。
なのに今やそれは一切が硬い体に触れていた。
硬くて、熱くて、自分とは全然違う体に。
だがそんなものに照れて誤魔化されては駄目だ。

「リディア」
「何よ皇太子」
「姫様。その御方は皇帝陛下であらせられますと何度も御教えしたはずですが」
「知らない。こんな皇帝なんて私絶対認めないんだから」

ドア越しにクロエが突っ込む。
それを切り捨てるように否定すると、主の勘気を察してかドアの向こうから彼女の気配が消えた。

「……何を怒っているんだ。俺が何かしたか？」
「この状況でそれを言う！？」

こんな傍から見たら、特に側室に見られようものなら嫉妬と非難を豪速球にして投げつけられそうな体勢で、どうして彼は平然としていられるのか。

（確かに私はプリンセス・オルテンシアになるって言ったけど……）

それとこれとは少し違う気がする。
リディアはほとほと呆れ果て、もういっそのこと黙りこんで人形にでもなってやろうかと考える。
だがそうすると余計クライヴが増長する気がしたので、渋々口を開いた。

「もう誰も見てないわ」

だから離して。そんな言葉を籠めて言うと首を傾げられた。

「何故そう言い切れる」
「だってクライヴ、私のことリディアって呼んだもの」
「成程。それにしても冷静だな」
「クライヴに言われたくない」

柔らかなプラチナブロンドがリディアの頬に触れる。
それだけの至近距離にいてもなお、クライヴは動じた様子を見せない。

（……普通、好きでもない人に触れるのって嫌なんじゃないのかしら）

例え相手が見ていなくても、どこかで罪悪感を感じるものじゃないのか。
いくら演じ手とはいえ偽物は偽物。リディアはプリンセス・オルテンシアではないのに。

（大体私はダチなのよ？　そこの所分かってるのかしら）

いくらなんでもそこを忘れられたら困るし、悲しい。
苛立ちと痛みを視線に乗せてクライヴを見上げる。
睨めつける視線に、しかし彼は先程までの機嫌の悪さはどこへやら、笑みを浮かべる。

「やっぱり俺は、お前がお前らしい方がいい」

それは何だ？　お姫様らしく振舞わない方がいいってことか？

「それじゃ駄目だからお姫様になる練習したんじゃない」

ぎゅうっと抱きしめられ、頬まですり寄せられそうになったので慌てて肩を押して体を離そうと試みる。体格差や腕力のせいで押し切られてしまうが。

「そこまで嫌がらなくてもいいだろう。俺にこうされたら他の側室は卒倒するぞ、多分」

確かにそうかもしれない。
こんな少女趣味な部屋で仮にも皇帝の膝の上に座らされ、抱きしめられ。
普通の姫君なら鼻血を吹いて卒倒しそうなシチュエーションだ。
なのに何故だろう。嬉しくない。
代わりに本気で腹が立つわけでもないのは、きっとその腕の中に疚しさだとか下心が見えないからだ。少なくとも先程外でくっつかれた時よりは警戒心が湧いてこない。

「だってくっつきすぎなんだもの。それより、多分って何」
「したことがないから分からんだけだ」

きっぱり答え、再び腕に力を込めるクライヴに溜息で返す。

（要するに私はぬいぐるみなのね）

誰も見ていない場所で思いきり甘えることができる物。
眠るために、心を落ち着かせるために必要な。
確かにそれなら友達らしい立ち位置だ。
そう思うことにして自分を納得させていると、耳朶をふわりと低い声が打つ。

「何故シルヴィアとゼナをそのまま行かせようとした」

先程の話だろう。リディアはこれにも溜息で返す。

「好きで行かせたわけじゃないわ。引き止めてくれたクライヴに感謝しているぐらいよ。でも、止めようがなかったの」

本当ならばその場に留まらせ、完全勝利で収めたかった。
途中までは上手く行っていたのだ。途中までは。
茶会での状況を思い返すと憂鬱が心を覆い隠していく。
リディアは睫毛を伏せかけ、しかし衝動的にクライヴを視界の中心へと捉えた。

「ねぇクライヴ。私、おかしいのかしら」
「どうした、藪から棒に」
「だって彼女達は私が何を祈るのか尋ねたら呆れていたわ。サンセット神教に知られたら異端審問にかけられるとも。クライヴもいい迷惑だって、失望、されて」
「迷惑？　お前に迷惑を掛けられたことなど一度もないぞ」

アイスブルーの瞳に自分の憔悴した顔が見える。
だからだろうか。彼は少しだけ真剣な顔で答えてくれた。
困惑する自分とちゃんと向き合おうとしてくれる姿が嬉しくて、リディアは泣きたい気持ちになりながら首を振る。腹が立つばかりの男ならいくらでも迷惑を掛けてやるが、こうして自分を案じてくれる人の枷にはなりたくなかった。

「サンセット皇室と神教は繋がりが深いんでしょう？　それなのに皇妃がこれじゃ先が思いやられるって言いたかったんだと思うわ。……ごめんなさい。初手から失敗しちゃった」
「その程度。仮にリディアがサンセット神教を批判したとしても、それで崩れるような関係じゃない。だから気にするな」

大きな手の平がふわふわと掠めるようにリディアの髪を撫でる。
甘やかすような仕草にどちらがぬいぐるみなのだろうかと口元が緩みそうになる、それは駄目だともう一度首を振った。

「駄目よ。私ならいいけど、これじゃミレーニア様が――」
「ただの嫌味だ。気にするな」

え、と声が溢れる。
まじまじとクライヴを見ると、彼はひどく硬い表情をしていた。
硬いというよりも、何もないと言った方がいいのか。
静謐ささえも感じないその顔に、茶会の場でも感じていた違和感がぶり返してきた。

「クライヴ、ミレーニア様と何かあったの？」

違和感が口を衝いて出た。
その瞬間浮かべられた薄笑いは、悲しいぐらい純度の高い偽りだ。

「どうしてそう思う？」
だからリディアは、リディアだけは真摯さを混ぜて答える。
「だって私がミレーニア様の名前を出すと辛そうだから」
「……」
「私には言いづらい話かもしれない。でも」
もしかしたらこれはとてもデリケートな問題かもしれない。
万が一二人が仲違いをしているのなら、今彼の心は色々ダメージを負っていることだろう。
だからリディアには言いにくいのかもしれない。しかし何かあったら、あったという事実だけでも教えてほしかった。触れるのが怖くなるようなものは、総じて弱点に変化する。彼が今弱点を抱えているのなら、誰にもそれを突かれないようにフォローしてあげたかった。
というのは建前だ。
「力になれないとしても、何かしたいわ」
本当はただ二人に何かあっては大変と、お節介なまでに心配しているだけだ。
肩を抱く腕に手を触れさせ、黙って答えを待つ。
「……何でもない。何事もないんだ。少々ごたついてはいるが」
「本当？」
「あぁ。何かあったら大事だからな」
静かな声が落ちる。見れば、声同様の静けさでクライヴが笑って

いた。
滲み込むような優しい顔はまだ少しの苦さを含んでいて、やはり何かあったのだとリディアに感じさせる。大体少しごたついているってなんだ。気にはなるが、リディアが心配するような弱点となりうる何かは起きていないのだと分かったので渋々問い詰めるのを止めた。それにこれ以上問い詰めた所で何も返ってこないことは分かっていた。

「そう、そうね。こんな大事な時期に何かあったら大変よね」

問い詰めたい気持ちを我慢し、少し無理をして頷く。
ぎこちない声にクライヴが低く軽やかな笑い声を上げた。

「何だ、気になるのか」
「……当たり前じゃない」
「そうだろうな。まったく、お前は本当に人の心配ばかりして」

細められた冷たい色の瞳がリディアにひたと向けられる。
慈しみを含んだその視線がくすぐったくなり、リディアは彼の言葉に反論せず顔を逸らした。

「リディア」

きつく抱きしめられる。切羽詰った声に肩が震えた。
こんな風に余裕のない彼の声を聞いたのは初めてかもしれない。
リディアに助けを求めた時だって、こうではなかった。
髪飾りからこぼれ落ちた黒髪にクライヴが顔を埋めた。

「そう遠くないうちに全て話す。だからそれまでお前はお前のままでいてくれ」

それは一体、どういう意味なのだろうか。

◇　17話

手触りのいいプラチナブロンドを指で梳くと、心地良さそうに目が細められる。それがまるで猫みたいで、リディアはくすくす笑ってクライヴを抱きしめた。どうしてかは分からない。だが今は、この皇太子とも皇帝とも言えない幼い子どもみたいな彼を慰めたかった。

だって彼は言ったのだ。そう遠くないうちに全て話すと。

何か大事なことを隠されているとその言葉から感じられるが、決して悪意があって隠しているわけではないと分かるから、今は追求せずにこのままでいたかった。

「私はプリンセス・オルテンシアになるわ。そのためにお姫様らしくする」

宣言するとクライヴが震える。その脆い姿を抱きしめて続けた。

「でも、いくら演技してお姫様らしくしたって私は私。リディア・アヴェリンでしかないわ。偽物にはなれても、誰かの本物にはなれないから」

たおやかに微笑んでいても上品に振舞っていても、根っこは変わらないのだ。

強引に人を振り回してもクライヴがリディアを思いやるのを忘れないように、リディアがクライヴを気遣うのを忘れないように。

「例え別の誰かを演じていても、私があなたの味方ってことに変わりはないわ」

きっとミレーニアと何かあったのであろうクライヴの沈み込んだ気持ちが、この言葉で浮上するとは思えない。だが伝えたかった。他の誰がどうでも、自分だけは彼の友達であり味方だと。

彼は自分の唯一の対等な友達。そんな彼を見捨てることなど有り得ないのだから。

自信に満ちた笑みを向ける。

クライヴはそんなリディアを見て一瞬呆気に取られていたが、小さく苦笑すると身を離した。

もう大丈夫だということだろう。リディアはほっと息をついた。

だからこの話はきっぱりと終わらせ、ぐっと拳を握りしめた。

「ともかく次は負けられないわ。次こそ完全勝利を収めなきゃ」

「またやるのか」

「当たり前じゃない。今回はクライヴがいてくれたおかげで反撃できたけれど、いつもあなたがいるわけじゃないわ。それに、どの道勉強しなくちゃいけないことは沢山あるんだし」

苦笑とも呆れ混じりともつかない声に口の端を吊り上げて笑ってみせる。

それが悪そうな顔に見えたのか、今度は分かりやすく苦笑された。

「それなら本がいるな。持ってこさせよう。……だがヤナからは借りるなよ」

「あら、どうして？」

「どうしてもだ。それで何が欲しい」

ヤナから借りた本は十分有益だったのだが、クライヴの御気に召さないらしい。

今度は後宮の話ではないのだから問題はないが、それでも駄目だろうか。

首を傾げしばらく見つめ合う。そうして根負けしたリディアが口を開いた。

「サンセット神教の本が欲しいわ。というよりも、フィアレーンの話を全般的に」

フィアレーン、という言葉にクライヴの双眸が剣呑に光る。

「何故そんなものを欲しがる」

「シルヴィア様とゼナ様が私を見て言ったの。フィアレーンの再来だって。その言葉の意味が分からなくて、結局そこから躓いちゃったから。それにサンセット皇室とも繋がりがあるみたいだし、知っておいて損はないはずよ」

それにクライヴの様子を見る限り、あながち的はずれな勉強になるとも思えない。

弱さを一度露出した彼はまだ立ち直れていないのか、ひどく分かりやすいのだ。

こういうのは手紙のやりとりでは分からない利点であり弱点でもあるなと実感しつつ「お願い」と強請るリディアに、彼は渋面を向ける。

「俺はリディアが隣に居て笑っていてくれれば、それだけで十分なんだがな」

それならばリディアにもできそうだ。けれどそれでは済まされないだろう。

「そうね、私もその方が楽でいいと思う。でも、それはプリンセス・オルテンシアがやればいいわ。私はそのための道を作りたい」

「……そうか」

だから何でそんな残念そうな顔をするのだろうか。心なしか恨めしそうだし。

口を噤み、何やら考え込むクライヴの目をじっと見つめる。

すると赤い紫陽花に似たリディアにプリンセス・オルテンシアでも思い出したのか、彼は吹っ切れたような強い眼差しでリディアを見据えた。鮮やかなまでの笑みを、刻みつけるように浮かべる。

「本当に人がいいな、お前は」

「そうかもしれないわね。まぁ、後宮で立ち回るにせよ何にせよ、あんまり沢山の人に会うと入れ替わった時に困るから程々にするけどね」

いくら似ていても顔立ちが似ているとは思えない。

それなのに入れ替わってしまったら、誰もが異常に気付くだろう。

もしそんなことになれば一大事だ。だからリディアはなるべく外部の人間とは関わらないように、内部でのみひっそり動いておきたかった。

シルヴィアやゼナが騒いだとしても、そこはクライヴに押さえられる範疇だと信じてのことでもある。

だからリディアは彼女達とやりあうのに何の遠慮もしなくていい。

（次こそ皇妃としての威厳を見せて差し上げるわ）

サンセット神教だかフィアレーンだか知らないが、その程度のものに二度と脅かされたりしないとリディアは固く誓った。

そして必ず、プリンセス・オルテンシアに勝利を。

それがひいてはクライヴの幸せに繋がるのだから。

◇　18話

茶会から三日。

リディアの元には毎日のようにクライヴから本が届き、読破に忙しくなるあまり姫としての教育がほとんど受けられないまま、部屋から一歩も出ることもできないまま、ただただ時間が経った。分厚く豪奢な装丁の本はどれも貴重なものばかりで、神学研究に勤しむ学者ならば喉から手が出る程値打ちがあるのだとヤナから教わった。だが、そんなことリディアには全くもって関係ない話だ。

本の山に埋もれ、一ページ、また一ページと繰りながら視線を滑らせていく。

柔らかな睫毛が窓から入り込む日差しにくっきりとした影を作り出す。

それが溜息と共に一つに重なったのと同時に、リディアは耐えかねたように声を上げた。

「納得行かないわ」

荒々しく本を閉じて立ち上がる。その騒がしさを咎めるようにヤナがリディアを一瞥したが、それを無視してベッドに腰掛けた。スプリングが音を立て、大きく揺れる。ふわりと舞った黒髪を尻目につとクロエに目を向けると、彼女は背を向けて花瓶の水を取り替えている。荒々しい態度にも関心一つ示さず。それが逆に怪しく、リディアに疑念を抱かせる。

「クロエ」

色々と納得できない感情を持て余したまま声を掛ける。

「何でしょうか、姫様」

それに対して返ってきた反応は至って普通だ。

ただ、いつもよりやや緩慢な動きが気になるぐらいで。

――やはりおかしい。

その不自然さは、クライヴに感じる不自然さと共通するのだろうか。

「これからする質問に答えなさい」

「何でしょうか」

口をへの字に引き結び鋭く言い放つ。

そんな主に向けて一瞬面倒くさいなという顔を浮かべたのはまぁ、見なかったことにしよう。お互いのために。

両足を揃え、背筋を伸ばす。天蓋から落ちる影の中で、リディアは静謐なまでの視線を上げた。

「フィアレーンとは一体何？」

問いに、クロエがふっと笑う。

「大陸中の人々の信仰を集める女神と御使いたる聖女の名前ですが、まさかもう御忘れですか？」

「違うわ。私が訊きたいのはそういうことじゃない。クロエだってそれは分かっているんでしょう？」

「……質問の意味が分かりかねます」

「じゃあはっきり言うわ。何故シルヴィア様とゼナ様は私を見てフィアレーンの再来と仰ったの？　何故私が祈りの意味を問うてはいけないの？」

その程度であればリディアも本から知識を得ていた。
――セイルーンと呼ばれるこの世界には、五つの国家が存在する。北はギリアム、南はサンセット、東はファイディ、西はニーチェ、そして中央にメリアルド。
一つの大陸に集まったそれらの国々がセイルーンの全てで、他の大陸はまだ発見されていない。
その狭い世界で根強く続く女神信仰は、人々の生活や思考に大きな影響を与えている。各国によって多少の違いはあるものの、日に数度の祈りの時間を欠かす者はいないし聖職者の地位も高い。ここに祈りの意味さえ知らない人間もいるが、それはとても稀らしい。
ただ、似たり寄ったりの各国の神教の中でも大きな違いがあるのがサンセット神教だ。ここは女神フィアレーンと同じく、聖女の認知度や親愛の度合いが大きいのだ。しかしその理由をリディアは知らなかった。何故サンセットだけが聖女を崇めるのか、本のどこにも書いていなかったせいで。
納得行かないのはそこだ。

「クライヴがくれた本にはフィアレーンの詳しい話が全然載っていないの。これでは何も分からないわ。お祈りの仕方やサンセット神教の歴史は勿論大事だけど、私が知りたいのはそこじゃないんだもの」
必要なのはフィアレーンに纏わる神話。女神と聖女の話だ。
絶大な信仰を集める女神だ。彼女が出てくる物語なら山とありそうなものなのに。
（クライヴがそういう話をあえて避けてる……なんてことはないわよね）
ここ三日、クライヴとはろくに話もできていない。

だから確認はできないが、彼がそんな事をするとは思えなかった。きっと偶然だろう。
ただこうも思うのだ。これだけ偶然が続くだろうかと。
友達を疑うのはよくないことだ。それでも、気にはなる。

「答えなさい、クロエ」

絶対的な主としての声で命じる。
花瓶をそっとテーブルに置いた彼女は落ち着き払った様子でリディアの前に立ち、薄く笑った。

「それだけ姫様が御美しかったからではないでしょうか。私はそう受け取りましたが」
「嘘よ」

謙遜ではない。
あの時確かにシルヴィアとゼナはリディアの容姿を下に見ていた。
そんな彼女達が、はたして自分を女神や聖女に重ねて見るだろうか？

（もしそうだとしたら、女神や聖女の容姿も底が知れているわ）

胸中で吐いた言葉の危険性に息を詰める。
気付けば紅茶を淹れようとしていたヤナの手が止まっている。
それを一瞥し彼女にも声を掛けた。

「ヤナはどう思う？」
「私もクロエと同じ意見です」
「……そう」

見事な無表情で返されてしまい、嘘だと口にする気力も失せた。
確かに二人がそこまで言うならそうなのかもしれないとさえ思う。
しかし――。

（最初はちょっと調べて有利に立てたらと思っていたのだけれど、こうも隠されると余計気になってしまうわ）

後宮に侍る姫君を蹴散らすのであれば、他にも勉強しなくてはならないことは多くある。それでもあえてこの件を調べるのは何故だろう。自分はこんなに粘着質だったかと首を傾げたくなる。そうして実際に首を傾げながらリディアは目を閉じた。
頭に浮かぶのはシルヴィアとゼナの呆れ顔。
嘲笑ではなく心底呆れ憤っているあの顔がどうしても離れてくれない。

（やっぱり気になる……）

ベッドシーツを撫でる手の平が、滑らかでひんやりとした感触を伝える。
熱い手が冷やされる。その冷たさに、ふと一人の名前が思い浮かんだ。
そうだ、あと一人いるではないか。
ヤナでもクロエでもクライヴでもなく、自分に話をしてくれそうな人が。
衣擦れの音と共に立ち上がり、うなじに触れる後れ毛を指先で元に戻す。すぅっと肌に触れる空気の面積が増え、その分頭がすっきりする。

「ヤナ、クロエ」
「「はい」」

淑やかで落ち着いた二人分の答えを合図に口を開く。
「プリンセス・オルテンシアとして貴方達に命じます。ユリウス・コンクラード卿に面会を申し入れる旨伝えてきなさい」
鮮やかなまでの笑みにクロエが眉を顰める。
クライヴが以前話していたことが気がかりなのだろう。
しかし、だからと言っていつまでも避けられるものではないとリディアはクロエの無言の抗議を笑顔で受け流した。そんな二人の攻防に気付かぬ振りをしてヤナがすいと一歩踏み出す。
「申し訳ありませんがリディア様。その申し出を受けることはできかねます」
「ヤナ？　何故なの」
これは意外だった。まさかクライヴに止められてでもいるのだろうか。
目を丸くして尋ねると、彼女はエプロンのポケットから封筒を取り出した。
「先程ユリウス様から御連絡を頂きました。あちらもリディア様に面会を申し込んでおります。ですのでこちらから改めて申し入れる必要はないかと」
「あら、随分いいタイミングだったのね。丁度良いわ」
願ったり叶ったりだ。
ぽんと手を叩いてはしゃいだ声を上げると、クロエに胡乱気な視線を向けられてしまった。

「姫様……一体何をなさる御積りですか？」
「決まっているわ」
にっこりと、そのくせ二人を詰るように笑う。
「本を読んでも分からないのなら、教育係に訊いてみるまでよ」
そう、分からなければ分かるまで問い続けるだけだ。

◇　19話

後宮に住まう者が他者と面会するには、二つの方法がある。
一つは城と後宮の丁度中間にある東屋での対談。
勿論人目があるとはいえ、これには危険が伴う。
だからこの場所は殆ど使われることがない。あるとすれば家族との面会ぐらいらしい。
そしてもう一つは城内に席を設ける方法だ。
こちらはより安全性が高まるが、いかんせん許可制のためなかなか実行しづらいという難点がある。相手が女性であればともかく、男であれば二人きりで会うことなどそう許可されることではないだろう。

「そもそも後宮に一度入れば、誰かと面会などする機会はありませんが」
「そうね。城で勤める人となんて話す機会がなさそうだもの。家族も手紙で済ませそうだし。そういえばヤナ、うちからの手紙は」
「来ておりません」
「そう……。まぁ私が勝手に家を出たんだし、手紙が来るなんて考える方がおかしいのかもしれないわね」

コルセットの装着を手伝いつつ、そう説明したヤナはふぅと息を吐いた。
当のリディアはと言えばウエストが苦しすぎてそれどころではない。
体を折るのも辛いほどきついのだ。溜息一つ満足につけない。
（背筋が伸びるのはいいことだけど……。でも何だか腰が痛いような）

クローゼットの中にあった白のドレスに袖を通し、髪を結って薄く化粧をする。
三日ぶりにした姫君らしい格好はまだ慣れない。
公爵家にいた頃はコルセットすら付けなかったのだ。当然といえば当然だが、どうせここに来てする羽目になるのなら前々から練習をしておけばよかったとリディアはちらと後悔した。

「大丈夫ですよ姫様。今にきっと旦那様達から沢山御手紙が届くようになります」

体中に溜め込んだ息を慎重に吐き出すリディアを励ますようにクロエがにこりと笑う。
気遣っているのだろう。無理をして笑う姿に苦笑で返し、毅然と前を向く。

「そうね。でも来ない方がいいのかもしれないわ」
「何故そう思われるのです？」
「だって万一誰かの目に留まったら不審に思われるわ。封蝋ぐらいは誤魔化すでしょうけど」

会えるなら、話せるならそうしたい。
けれどもそれは叶わないだろうと、他ならぬリディア自身が気付いていた。
きりきりと痛む胃を押さえるように手を置く。静かな面持ちで睫毛が伏せられた。

（マリア姉様、ロザリア姉様。……皆、今頃心配しているかしら）

今まで屋敷から出なかった娘が突然後宮で暮らし始めたのだ。心

配もされよう。
後ろめたさと家を恋しがる気持ちが綯交ぜになる。
すると不思議なほどにやる気が出るのだ。せっかくこうまでして選んだ道なのだからと。

（だから行かなくちゃ）

閉じかけていた瞼をこじ開け、花の匂い香る窓辺へと歩み寄る。
日も大分傾いてきた。
このままここでじっとしていたら今日中の面会は叶わないだろう。
振り向き、扉を見据える。柔らかな生地が風に舞い、きらきらとした光を放つ。

「行きましょう。クロエ、留守をお願い」
「かしこまりました。どうか御気をつけて」
「外で護衛騎士が待機しております。気をつける必要は御座いません」

留守を預かる大事よりも主を置いていくことが気になるのか、そわそわした様子のクロエにヤナが淡々と答える。その護衛騎士こそ気をつけなければならない対象に含まれていると言ったら彼女はどんな顔をするだろうか。
一瞬にして緊張感を宿したクロエの目が、やはりこのまま留守番をしていいのか迷っている。
だからリディアは大丈夫と言うように口元を緩め、後宮の姫君達を刺激しないよう静かな足取りで外へと向かった。
カツン、ヒールが地面に触れる音が聞こえる度、別の誰かになったようだ。
それが静かに柔らかに響けば響くほど、自分はこんなに淑やかだっただろうかと首を傾げたくなる。

前を行くヤナの背中を照らす光が増す。
出口が近いのだと思った瞬間、リディアは首を傾げるのをやめて立ち止まった。

「初めまして、プリンセス」
「――あ」

兎がいた、と思った。
花が咲き誇るその前に立ち、恭しく頭を下げる男。彼はまるで兎のようで。

「……はじめ、まして。貴方が」
「はい、今日より貴女の護衛を致しますレナード・マクスウェルです。どうぞお見知りおきを」

呆けた声に爽やかさを内包した精悍な顔が綻ぶ。格好良い人だな、と掛け値なしに思えるようないい笑顔だ。護衛対象であるリディアへの親愛を隠しもしない、優しく丁寧な態度に「はい」と返す声はやはり呆けていた。あまりにぼんやりしすぎて、気を引き締めねば自分をリディア・アヴェリンだと名乗ってしまいそうだ。
自分よりも頭一つ分高い位置にある目を見つめる。血を一滴落としたようなルビーの双眸が細められた。微かな笑いの気配に、スノーホワイトの髪が揺れる。

（兎みたい）

彼が纏う漆黒の鎧も鍛えられた体も、リディアが本で見たことのあるふわふわとした兎とは全く異なる。けれどもそう思うのは、彼の持つ色があまりに儚く綺麗だったからだ。美しいだとか綺麗だとか、そんな表現はクライヴにこそ似つかわしいのに、彼とは正反対

の男らしい容貌のレナードにそう思うのは不思議な感じがした。

「姫様」

しゃんとしなさい。そんな意味を籠めた声色にはっと我に返り、リディアはドレスの裾をつまんで小さく礼を取る。

危ない所だった。

（騎士に見惚れていただなんて知られたら、また馬鹿にされてしまうわ）

ここは後宮の入り口、毎夜皇帝を迎え入れる特別な場所なのだ。それなのに皇妃ともあろう者が他の男に目を奪われるなど言語道断。

浅く息を吸い込む。それをゆっくりと、息切れしないように丁寧に吐き出す。

「宰相殿のいる執務室までの短い距離ですけれど、よろしくお願いしますね。マクスウェル様」

「そのような堅苦しい呼び方ではなく、私のことはどうぞレナードと御呼びください」

「ありがとうございます。ではレナード様、参りましょうか」

「はい。ではお手をどうぞ、プリンセス」

「え……？　あ、ありがとうございます」

自然な動きで差し出された手を見下ろし、次の瞬間慌てて重ねる。

今の状況を鑑みれば当然とも言えるレナードの行為はしかしリディアには不慣れなものでしかなく、熱が高い硬い手の平に自分のそれを触れさせた瞬間、ぐらぐらと思考が茹だった。そんなリディアを見つめレナードは小さく笑ったが、そこに嘲笑の色は見えない。

耳をくすぐる柔らかな低音に胸を撫で下ろしつつ城へと向かう。
ドレスの裾が青く茂った草を揺らす。当たり前のように重ねられた手が頼もしい。
が、リディアはそこではたと気がついた。

（あれ？　この人ってこんないい人だったかしら）

クライヴの話から察するに、大事な幼馴染への忠誠心やアクがとてもとても強いレナードとユリウスはリディアを快く思っていないはずなのだが、一体これはなんだろう。当然のように敬われ、守られているこの状況は。
頭の上に数々の疑問符が浮かぶ。
それを察したのか、それともリディアが彼を見過ぎたのか。

「……」

無言のままリディアに笑んだレナードの爽やかさの香る笑顔に知らず頬が熱くなる。
今まで父親やクライヴ以外の男性と接する機会もなかったのだ。そも免疫がない。

（……でもクライヴが相手でも割と平気なのはどうしてかしら。ダチだから？）

「御二人はもう随分と昔から仲が良いそうですね」
「え！？　あ、えぇ。そうね。実際に御会いしたのは今回で三度目ですけれど」
不意打ち気味に飛び込んだ声に、まさか心を読まれたのかとリディアは肩を震わせる。二人、というのがリディアとクライヴのこと

かさえ怪しい所だが、他に心当たりもないのでこくこくと頷いておく。
眼前に城壁が飛び込んでくる。
それよりも更に進むと、警備の兵が顔パスでリディア達を通す。
外よりも遥かに忙しなさの漂う城内を歩んでいるとぽつり声が落ちる。

「そういえば確か文通をなさっておいでとか」
「えぇ。返事を書けと散々催促されるうちに、それが習慣となってしまいました」
「催促とは、陛下が？」
「そうですわ。一度なんてわざわざ当家にまで催促しに来ましたもの。あの時は驚きましたわ」

好奇心が棘となってリディアを突き刺す。
皇帝が強引に後宮へと招いた正妃を一目見ようと扉から窓から目を向けてくる者達ににこりと笑いかけると、黄色い歓声と共にバタバタと遠くへ駆けていく足音が廊下を滑る。きっとリディアの姿を見れなかった者達へ、ビッグニュースと称して自慢でもしに行くのだろう。好感触に自然と笑みが浮かんだ。
そんなリディアの横顔に喫驚するレナードの声が触れた。

「何だか私達の知る陛下とは別人のようだ」
「そうでしょうか？　私はその陛下しか知らないものですから何とも」
「私達にも殆ど話してくれなかったぐらいです。余程隠したかったのかもしれません。我々には見せない顔と、貴女を。しかし陛下を責められませんね」
「それはそうですわ。勿論相手は皇帝陛下ですし――」
「いいえ、そうではなく」

「……？　レナード様？」

レナードの足が止まる。
多くの文官が行き来する扉の先にユリウスがいるのだろうか。
しかし目的地を前にレナードは先に進むよう促すでもなく、リディアの手を軽く握りしめて口元へと持っていった。

「私が陛下でも、きっと同じ事をしていたでしょうから」

人通りが途絶えた、たった一瞬。
その僅かな時間にさっと掠めるようなキスを指に落とし、レナードは何事もなかったかのようにリディアの手を解放した。そうして訳が分からず目を白黒させるリディアに意味ありげに微笑みかけ、くるりと扉に向かい合う。

「ユリウス」

ドアを数度ノックし、中にいる人物の名を呼ぶ。
その手が、唇が数瞬前にしていたことをまざまざと思い出す。
刹那、限界点を突破する熱に支配され、目眩にへたりこみそうになった。

（い、いいいい今のなに！？　なんだったの！？）

「何だ」
「プリンセス・オルテンシアを御連れした」

その間にも続けられるやりとりを冷静に聞く余裕は勿論ない。
だが。

「――……入れ」

扉の奥から聞こえてくる声の、親愛さの欠片もない冷ややかな声に冷水を浴びせられたような気持ちになる。プリンセス・オルテンシアの名を出した途端硬くなった声に、リディアはようやく本来の目的とクライヴの話を今一度思い出した。今は羞恥心に悶えている場合ではない。

ドレスの裾をぎゅっと握りしめる。

「失礼致します」

レナードが開いた扉から西日が差し込む。

けれども眩しさに目を細めるという醜態を冒さぬようしっかりと目を開け、リディアは室内にいる人物の前に立つ。

彼の人の姿は逆光でよく見えないが、鋭い眼光が自分を不躾に見ているのは分かったので気にせず礼を取った。

今までで一番と言える丁寧さと姿勢の良さで下げた頭から、カランと音を立てて髪飾りが揺れた。

「初めましてコンクラード卿。御招き頂いてとても嬉しく思います」

本当はちっとも、これっぽっちも嬉しくなどないが、あえて口にする。

これもまた、今までで一番と言える社交辞令だった。

◇　20話

二十年に渡る人生の中で、リディアはあまり人との出会いを体験していない。
だから基本的に初対面の人間には親切にするし、疑うことをしない。
誰が善き人であり誰が悪しき人であるのか判別する力がないからだ。
しかし、今回は違った。
リディアの全身を舐めるように見るなり興味を失ったように目を逸らした男。
彼のその醒めた態度を見た瞬間、リディアは心の中で密かに驚いた。

（私、きっとこの人と合わないわ）

性格が、思考が、そして恐らくは何もかもが。
そんな気持ちを一目見るなり抱けるものなのだと、それが驚愕を誘った。
同時に体が震えそうになる。
これだけストレートな悪意を向けられたのは初めてで、どうしていいか分からなかった。

「初戦から惨敗とは、予想以上に大したことのないお嬢様だ」

怯んだのを見破ってか、男――ユリウスが嘲るように笑う。
太陽が雲に隠され執務室内の光度が下がる。途端に見えた、青みがかった銀髪が鮮やかにリディアの思考を埋める。純粋に綺麗だと思った。青みがかかった紫色のすっきりとした目も、硬質な印象を

与える髪も、自然に伸びた立ち姿も。怜悧さを湛える顔の造りも悪くない。そう褒めるのもやぶさかでない程整った容貌だった。――ただ一つ、相手の冷然たる態度さえなければ。

きっちりと閉じられた扉から声が漏れない自信があるのだろう。

ユリウスは後ろで控えるヤナやレナードを無視してリディアを公爵家の令嬢と呼んだ。

その上で放たれた嘲弄を受け止め、引きつる頬を吊り上げる。

「あら、それはそれは……予想を裏切れてある意味本望ですわ」

まったくもってよろしくない予想の裏切り方ではあるが。

（せめてこの場にクロエがいれば）

彼女なら上手い対処の方法をリディアに示してくれるだろう。

しかしそうやって侍女に頼ればますますユリウスに馬鹿にされる気がして、リディアは落ち込みそうになる気持ちを叱咤した。

椅子を勧めるでもなく立ったままの会話を続けるユリウスの傍に立つ。

髪に塗り込めた香油の匂いに気付いたのか、鋭い光を煌めかせた青紫の双眸が嫌悪混じりに閉じられた。

……そこまで酷い匂いではないはずなのだが。

「どうやら貶しても伝わらないようで。陛下も随分と風変わりな御友人をお持ちですね」

「風変わり？」

閉じられ、拒絶を示す瞼を見つめながら問う。

おいユリウス。レナードの窘める声が耳朶を打つ。

その低い声にユリウスが放つ言葉の真意を汲み取り、リディアは

あえて「何ですの？」と再度問うた。
ユリウスの唇から溜息が漏れる。
その音を静かに受け止め目を閉じたリディアに耳に、長ったらしい批判が舞い込む。
「見た目は平均並。大した教養もなく立ち居振る舞いは当家の侍女以下。この程度の女性を友人と定めていらっしゃるとは意外だ。公爵家なら他にも令嬢がいるでしょうに何故あえて貴方なのか。私には理解が出来ない」
それは友人としてだろうか、それとも偽りの皇妃としてだろうか。
（いいえ、どちらでもかまわないわ。コンクラード卿の言葉は、私がずっと持っていた疑問そのものなんだもの）
何故自分だったのか。
何故自分が当時皇太子だったクライヴの文通相手になったのか。
今でも疑問に思う。彼は同日、姉達にも会っていたはずなのにと。
教養のある長女と美しく立ち振る舞いも優雅な次女。
公爵家を飾る二輪の花をユリウスは知っているのだろう。だからこんなことを言う。
（だけど理解ができないのは、私だって同じよ）
目を開ける。ユリウスは既にその視界にリディアを捉えている。
辛辣な言葉にリディアが泣き崩れても構わないと、毅然とした顔が告げていた。
「宰相殿」
「ユリウス、言いすぎだ」

「どこがだ。この程度まだ手ぬるいというのに、返事さえなさらない御令嬢だぞ。まったく、こんな娘が公爵令嬢とは――」

冗談を言うでも試すでもない、真実リディアを見下した態度にヤナとレナードが口を挟む。

庇うように前に出た優しい二人に舌打ちで反論したユリウスに頷きそうになる。

だが最後に言いかけた言葉に我慢できなくなり、リディアは硬い声を上げた。

「お黙りなさいませ」

自分が姉達に負けていると言われるのは構わない。

クライヴが自分を友人だと呼ぶ理由が理解出来ないのも、認めよう。

（けれど私のせいでお父様まで馬鹿にされるのは許せない）

予想外の反撃にヤナとレナードが面食らっているのが手に取るように分かる。

それを尻目にふわふわしたドレスを揺らして無邪気に笑う。

「えぇ、確かに私ったら随分と世間知らずのようで」

まさか肯定で返されると思わなかったのだろう。ユリウスがおや？　と眉を上げた。

「どうやら自覚はおありのようだ」

「勿論ですわ。けれど仕方がありません」

冷ややかな眼差しに宿った人間らしい色にドレス同様ふわりとした笑みを返し、リディアは手の甲で口元を隠した。

「まさかこれだけ器の小さな方がこの世に存在するなんてと驚く余り、まともに御返事もできませんでしたの。不快に思われたのなら、どうもごめんあそばせ」

無邪気な言葉にユリウスが眼光を鋭くする。

「……どういう意味か訊いても？」

「まぁ、あなたも存外鈍いんですのね。――ダチが女を連れ込んだぐらいで目くじら立てるなど底が知れた御方だと申しておりますのよ」

わざとらしいまでに丁寧な言葉に、ヤナがリディア同様手で口元を覆う。

けれどもそれは笑いの衝動から来ているのだと、震える肩から察した。

彼女が笑う所など初めて見る。できればまじまじと見ていたかったが、そこをぐっと堪えて前を見れば頬を微かに紅潮させたユリウスと目が合った。

憤怒に染まった顔。

それを見た瞬間心に湧いた優越感に、あぁやっぱり自分は彼とは合わないと理解した。

「確かに私はマリア姉様やロザリア姉様に比べれば遥かに劣っているでしょう。そんなことは妹である私が一番よく理解しております。ロザリア姉様は私の双子の姉ですが、だからこそ違いを痛感してますのよ。……ですがそれで陛下と私の友情にまでケチをつけられたくありませんし、父であるアヴェリン公爵を貶められたくもありま

せん。お分かりいただけて？　コンクラード卿」

笑顔が音を立てる。饒舌に放つ言葉がユリウスの脳に牙を立てる。

「私は陛下に御約束致しました。必ず彼の願いを叶え、プリンセス・オルテンシアを演じると。そして叶うなら彼女が正妃となった時確かな足場を得られるよう振舞うのだと。そんな彼の願いと私の誓いは、決してあなたに馬鹿にされるような代物ではありません」

ただ一人、リディアにしか助けを求められなかったクライヴのために。

リディアは自分のこの考えが誰かに誹られるいわれのあるものだとはどうしても思えなかった。

堂とした声を鼻で笑い、ユリウスが冷ややかにリディアを見下ろす。

「貴方のように立ち居振る舞いすら満足にできないお嬢様がか」

「えぇ、そうです」

「シルヴィア殿とゼナ殿にも負けた貴方が」

「その必要がありますから」

「無謀だとは思われないのか」

そんなもの。

端的な言葉の中で吐き出された言葉に唇を吊り上げる。

「その無謀を覆すために教育係がいるのでしょう？」

「……迷惑極まる話ですがね」

「あら、あなた幼馴染の頼み一つ聞けないんですのね。友達甲斐のない殿方だこと」

くすくすと殊更癇に障る高い声で笑ってみせる。
ふつふつと湧き上がる怒りのままに冷静に振舞うリディアに、ヤナがそっと介入した。

「リディア様、それは少し言い過ぎかと」
「いいのよヤナ。この程度ならまだ手ぬるいのに、返事もまともにできない宰相殿が悪いのよ」

笑いの残滓が張り付いた声に、先のユリウスと似たような言葉で返す。
瞬間彼の拳が震えるが、公爵家令嬢であり偽りとはいえ皇妃を殴るわけにもいかず、その手は上げられることはなかった。
く、と漏れる声が怨嗟を孕む。
悔しげな態度を見下すように笑って迎えると、ヤナがしみじみと言った。

「クロエのあの性格はリディア様から受け継いだのですね」
「心外だわ。逆よ、クロエから私に引き継がれたの」

クロエが聞いたら憤死しかねない言葉で笑いあい、リディアはもう一度ユリウスを見据えた。
深い青紫の双眸。
怒りに染まっていても理知的な光を失わないその色は、まるで紫陽花の花びらのようだ。
しかしこれは失言だったかもしれない。

「そんなに私を厭うなら、いっそあなたがプリンセス・オルテンシアになればいいではありませんの」
「――……っ！！」

色違いの花にはなりそうだが。
そう思って放った言葉にユリウスが力任せに机を叩き、殺気混じりにリディアを睨めつけた。
「人を女扱いとは……どうやら貴方には教育が必要なようだ」
「だから先程からそう言ってましてよ。それと別に私はあなたを女性だとは思っていませんわ」
「教育は明日、今日と同じ時間から行おう。せいぜい遅れないよう」
無視だ。人がせっかく気を遣って反論したというのに綺麗に無視している。
リディアはむっとしながら、それでも頷いた。どの道教育は必要なのだ。
嘲りと共にちらついていた慇懃無礼な態度が払拭し、中からただの無礼な男の姿が見える。
（レナード様とは大違いだわ）
だが大分ユリウスから向けられる敵意に慣れてきたリディアは、ただ無礼なだけの方がまだいいと前向きに考えることにした。
そしてその前向きさを持って宣言する。
「必ずあなたが唸るような姫君になってみせるわ。その時は先程までの数々の侮辱、きっちり謝っていただきますから」
他の誰を差し置いても、ユリウスにはこの言葉を言わなければならない気がした。
プリンセス・オルテンシアではない。
リディア・アヴェリンとして、彼に吠え面をかかせてやるのだと決意する。

腸が煮えくり返る様な怒りがこれほど熱いなど、初めて知った。
宣戦布告にユリウスがじわりと笑みを浮かべる。
だがその笑みは今まで見たどの顔よりも冷たい、凍りつくような笑顔だった。

「――よろしい、私が徹底的に教育し直して差し上げましょう」

かくして、他者の思惑を無視したユリウスとリディアの戦いが幕を開けた。
そのせいだろうか。
あれほど答えを欲していた質問も、今は掘り起こせないほどリディアの思考の中に沈殿していった。

◇　宰相の執務室にて

サンセット城の一室。宰相ユリウス・コンクラードの執務室には、むさ苦しいことに男ばかりが二人も仕事をサボりに来ていた。

「何をやってるんだお前は」

その内の一人、サンセット皇帝クライヴはユリウスよりもいい椅子にふんぞり返って座り、足をぶらぶらと揺らしながら溜息を漏らした。紺青色の略服の裾がひらひら揺れる。それを尻目に、ユリウスは目の前にある書類をチェックしながらにべもなく返した。

「その御言葉、綺麗に熨斗をつけて御返し致しますが」

「いらん。返すな」

「いいえ、押し付けてでも」

いつしか執務机の上に山積みになった書類の押し付け合いに発展した二人を、もう一人のサボり魔こと騎士レナードが呆れた顔で見ている。彼はさほどここにいられる時間がないと理解しているのか、入り口の傍にある椅子に腰掛けて遠巻きに二人を見ている。カーマインの瞳が何やってんだと言っているようで、ユリウスは咳払いを一つした後でふいと顔を逸らした。

何をやっているんだというのは、恐らく昨日の一件だろう。

公爵家令嬢リディア・アヴェリンとの舌戦……になるのかは分からないが、終始喧嘩腰だった顔合わせの話はクライヴも聞き及んでいるはずだ。いつかはこの話になると分かっていた。だからユリウスも言わせてもらう。

「……何であんな娘がいいんですか。他にもっとマシなのがいるで

しょう」
「リディア以上にマシなのがどこにいる」
「どこにでも。あんな気性が激しくて口の悪い娘よりも、陛下はもう少し大人しい女性がタイプだと思っていましたが」
少なくともあれだけきつい女よりも従順な性格の方が、色々と扱いやすいだろう。
そう思いつつ放った言葉にしかしクライヴははてと首を傾げるばかりだった。
「リディアの気性が激しくて口が悪い？　お前どこを見てそう判断したんだ？　彼女は純粋で優しい性格だぞ」
どこがだ。
思わず主の前だというのに舌打ちしそうになり、ユリウスは慌てて口を手の平で押さえた。
「陛下の前で猫を被っているだけじゃないんですか」
「そんなわけあるか。何年付き合いがあると思っている」
その付き合いとて、ほとんどが文通で繋がっている縁だ。
実際にリディアを前にしているわけではない。
ならばいくらでも嘘のつきようがあるではないかと考え、心の中にどっしりと重石を乗せられた気分になる。不快感からではない。恐らくクライヴの言う通りなのだと、自分でも気付いているせいだ。
肘をつき、誰とも目を合わせないように窓を睨みつける。
そんなユリウスを見てレナードがぷっと吹き出した。
「陛下、気になさらないであげてください。ユリウスは自分が女扱いされて腹を立てているだけですから」

途端、背もたれがぐらりと揺らぎ椅子から落ちそうになる。

「――……っ！！　黙れレナード！」

慌てて止めにかかるが、二人が黙るわけもない。

クライヴは心底意味が分からないとばかりに怪訝そうに眉根を寄せる。

「女扱い？　こいつが？　どこが」

「リディア嬢にはユリウスの目が紫陽花の色に見えたんじゃないでしょうか。そんなに自分を厭うならあなたがプリンセス・オルテンシアになればいいのにと仰ってましたよ」

だが怪訝そうな顔も続くレナードの言葉を聞いた瞬間、ぶっと吹き出す音と共に掻き消える。机に突っ伏す、華奢な背中が憎たらしい。全身を大きく震わせてゲラゲラ笑う姿に、思わず相手が皇帝だというのを忘れてユリウスは怒声を放っていた。

「陛下！　笑いすぎです！」

仕舞いにはヒーヒー言い出して腹を抱える姿を揺さぶってやりたい衝動に駆られていると、ようやく身を起こしたクライヴが目尻に浮かぶ涙を拭いながらうんうんと頷いた。ユリウスを真っ直ぐに見据え、もう一度ぷっと吹き出す。

「あぁ、だが成程。言われてみればそんな色をしているな。どうだユリウス、お前今からでも後宮に入るか？」

「戯れも程々になさってください！」

誰が後宮になど！

（そもそも私のどこが女に見えるというんだ！　くそ、リディア嬢がおかしなことを言わなければこんなことには）

口悪く胸中で文句を延々垂れ流す。

そんな状況でもチェックの終わった書類が積み上げ、クライヴに紅茶の入ったカップを渡している辺り律儀と言えなくもないが、当然のようにレナードには何も出さなかった。ちらと強請るような視線を受け流すと、レナードはやれやれと首を竦めてクライヴに向き直った。

「それにしてもユリウス相手に一歩も引かないとは。本当に勇ましいお嬢さんですね、彼女は」

「今の話以外に何か言っていたのか？　ヤナは何も話してくれなかったんだが」

にやりと弛んだ口元に嫌な予感がしたが、もうこの際どうにでもなれとユリウスは無視を決め込んだ。

「ダチが女を連れ込んだぐらいでガタガタ抜かすなと。大体そんな風なことを仰ってました」

「……」

「もっとも、全面的にユリウスが悪いのでフォローはしませんでしたが」

クライヴが一瞬黙りこむ。かと思いきや、迷いなく頷いた。

「そうだな。ユリウスが悪い」

「な……っ！　陛下、何も聞かずに勝手に判断なさらないでくださ

い！」

どうにでもなれと思ってはいたが、あまりにあっさり納得しすぎではないか。

そう思い我慢できずに立ち上がったユリウスを、すかさずクライヴが黙らせる。

「黙れ、どうせお前がリディアを怒らせたんだろうが。そうでなければ彼女が自分から攻撃を仕掛けたりはせん。後宮にいる側室達相手でもない限りはな」

一切の否定ができずに黙りこむ。

それより、後宮の側室相手なら別というのはどういうことだ。

（また何か仕掛ける気じゃないだろうな）

頼むからもうしばらく大人しくしておけと言わんばかりに頭を抱えていると、クライヴが「しかしなぁ」とキィと背もたれを揺らして呟いた。

「何を言ったかは知らんが、よくそこまでリディアを激怒させられたな。強引に後宮に呼び寄せた時でもそこまでひどくなかったぞ」

「……確かに、触れてはいけない所に触れたとは思っていますよ」

ぽつり漏らすと、クライヴとレナードが目を剥いた。

「何だ、後悔しているのか？　珍しい」

「いいえ。彼女自身に対する評価は已然変わりませんし、今後も安易に変えたりはしないでしょう。ただ、彼女を貶めるのはともかく他を貶めるようなことを言ったのはやりすぎだったと思うだけです」

若干の嘘を混ぜて答え、再び窓の外を睨む。
教養や立ち居振る舞いについては事実だが、見た目が平均並みというは嘘だった。
確かにもっと美しい女を探そうと思えば、いくらでも出てこよう。
以前前帝の誕生式典に参加した、リディアの姉であるマリアやロザリアがいい例だ。
ただ、それでも彼女達とリディアの間に雲泥の差があるとも思えなかった。
平均並だと口にしたのは単なる八つ当たりだ。厄介事を持ち込んだクライヴへの。
だが、あれは予想外だった。

（まさかあんなに――）

己を睨み据える苛烈な眼差し。それを思い出し、胸中ですら漏らすべきでない言葉を呟きそうになった所でクライヴの声が耳朶を打つ。

「成程。そうか、だからリディアは腹を立てたんだな」

ぱちりと目を見開き、慌ててクライヴに問いかける。

「？　どういう意味でしょうか」

今考えていたことを悟らせないように淡々と問うた自分に、クライヴは苦笑で返す。

「リディアは別にお前が自分を貶したから腹を立てたわけじゃないってことだ。自分のことよりも人のことばかり考えているからな、

彼女は」

きっとリディアを想っているのだと容易に想像できる優しい苦笑だった。

今までにも散々見てきた表情に、ユリウスはやはり散々放った問いを今一度ぶつけた。

「陛下」

「何だ」

「彼女にはまだ何も話していらっしゃらないのですか？」

何も知らず、愚かなまでに道化を演じるリディア。

彼女はいつまであのままでいるのだろうか。

「……まだその時期ではない。前にも話したはずだ」

「それはそうですが、本当にいいのでしょうか。何も知らされずにいる方がより危険だと思うのですが」

「意外だな。お前が彼女を案ずるとは」

「一歩間違えれば戦争に発展するような話で慎重にならない方が問題かと」

「まぁそうだろうな」

苦虫を噛み潰したような顔にさらりと返すと、盛大な溜息が執務室を満たした。

しんと静まり返ったこの部屋の外からは一切の音が聞こえてこない。皇帝と騎士がサボっているにも関わらず。

（レナードめ、人払いをしたな）

これでは書類を取りに来る者もいない。仕事がいつまでも終わら

せられないではないか。
前髪をかき上げ、小さく首を振る。
ユリウスのその姿に何を思ったのか、クライヴが不意に真面目な顔になる。
「だが今しばらくは奴らを泳がせておくのが得策だ」
皇帝としての顔にユリウスも宰相として応えた。
「彼女を公爵家から引き剥がしたこと自体、正しい判断なのか分かり兼ねます。まだ余裕はあったでしょうに」
「もって一年だったんだ、仕方なかろう。それにいずれは対処しなければならない問題だった」
確かにそれはそうかもしれないなとユリウスも胸中で呟いた。
リディア・アヴェリンは大きな爆弾だ。
それも決して不発で生涯を終えられない、確実にいつか爆発する厄介な爆弾。
だが、だからこそ彼女には全てを伝えておかなければならないのではないかとも思っていた。
とはいえ主の決定に逆らえるはずもないので、ユリウスは悔し紛れに笑ってみせる。
「では陛下も覚悟なさっていた方がよいかと。リディア嬢は相当きついことでも平気で言いますよ」
「……分かっている」
ニヤリと不敵に笑うユリウスにクライヴが息を詰まらせる。
黙りこむ姿に追い打ちをかけるように、ユリウスはひらりと書類を一枚突きつけた。

「それともう一つ覚悟なさって頂きたい件が」
「何だ、まだあるのか」
えぇ、と書類を指でつまんで受け取るクライヴに頷く。
「ナタリア・ギエン嬢が後宮入りする話が浮上しています」
「ギエン？　あぁ、あの爺か」
「はい、彼の孫娘に当たるそうです。歳は十七。彼は随分と自信が御有りのようで、リディア嬢を押しのけて自分の孫が皇妃になるものと過信しております」
「皇妃を据えた話をした後で送り込むとは。あのジジイ、実は阿呆じゃないのか」
誰も聞いていないのをいいことにレナードが好き放題言うのを、二人は止めずに黙って受け止める。
ギエン家。ここ数代元老院の末席に甘んじていた家の名前を思い出し、クライヴから返された書類を元あった位置に戻す。
通すべきか差し戻すべきかはまだ決めていないが……。
「成り代われると思っているのかもしれませんね。あるいは、何か重要な情報を掴んでいるか」
ユリウスの言葉にクライブの指がぴくりと動いた。
「重要な、ね……」
呟き、アイスブルーの双眸を細めて何やら考えこむ。
自分よりも遥かに女性に近い造りの儚い横顔はしかし、次の瞬間には見慣れた幼馴染のものに変貌していた。強引で不遜で向かう所

敵なしと言わんばかりの皇帝らしい顔に。

「まぁいい。ならば部屋ぐらいは与えてやらねばならんな」

部屋ぐらいは、か。

ユリウスは若干、本当に僅かながら後宮に住まう女達に哀れみを覚えながら問う。

「今一度確認しますが、本当に誰の部屋も訪ねたことがないんですか？」

問いにクライヴが「ん？」と片眉を上げる。

「リディアの部屋は毎晩訪ねているぞ」

「他は」

「ない」

「今まで一度も？」

「ないな」

「誰か一人ぐらい興味を持った女性は」

「俺がリディア以外の女に興味を持つと思うか？」

あれだけ人数がいるのだから一人ぐらいはいてもおかしくはないはずだ。

英雄色を好むという言葉もある。歴代の皇帝も数人は通いの側室がいたというのに、クライヴは一人も訪ねていないときた。それどころか、リディアのあの様子ではまず間違いなく手は出していないだろう。……もっともこれは当然と言えるのだが。

何が誇れるというのか、意味もなく堂々とした声にユリウスは肩を落とした。

「……もういいです。よく分かりました。本当に何であんな娘がいいのか」

リディアが悪いとは言わないが、他にもっとこう。

「ユリウス、陛下が選ばれた女性にその言い草はないんじゃないか」

仕舞いには頭を抱えだした自分をレナードが窘める。

だがそれをクライヴが止めた。

「いい、レナード。構わん」

「しかし――」

「良さになど気付かれん方がいい。他の男に狙われでもしたら厄介だ」

「「……」」

これにはレナードも閉口したようだ。無論自分も。

幼馴染の年季の入った一途さに途端に馬鹿らしさを覚え、ユリウスは無言で仕事を再開する。

それにしても。

（リディア嬢は陛下と一緒にいる時、一体どんな風なんだろうか）

少なくとも自分と相対した時とは別人だというのは想像できるのだが、それでもクライヴをここまで魅了するだけの姿は予想がつかない。

これから分かるんだろうか。

そう思うものの、その時は自分がリディアに請われるまま謝罪をする時だと思うと、是が非でも知りたくなくなる。

時計を見やる。昼を過ぎて大分経つ事を示す短針に彼女との再会

が近いことを思い出し、ユリウスは憂鬱さと闘争心を呼び起こして
その時を静かに待った。

◇　21話

春爛漫。今が盛りとばかりに咲き誇る花を前に、リディアはうんっと伸びをして甘い匂いを胸いっぱいに吸い込んでいた。
純白のドレスが風に踊り、漆黒の髪と相まって心地良さげに揺れている。
それを優しく見守るレナードに笑いかけ、凝った背中を思いきり伸ばす。

「気持ちいい……――っ、い、た！」

だが背を伸ばした途端走った激痛に、リディアは令嬢らしからぬ悲鳴を上げて腰を曲げる羽目になった。

「姫様！」

後宮からクロエが飛び出してくる。悲鳴を聞いたのかやや顔が青い。

「どうなさいました！　まさかお体の具合でも！？」

ペタペタとあちこちを触りながら怪我がないか確かめられ、リディアはレナードの手前ということもあり顔を赤らめて首を振る。ドレスでも脱がされたら大変だと、やんわり自分に触れる手を引き剥がした。

「大丈夫よ。悪いことは悪いけど」
「ですがもし万一の事があっては」
「本当に大丈夫！」

強情に言い張るリディアの声が花畑に木霊する。
すると弦を張った弓のようにしなやかに曲がったレナードのカーマインの瞳が更に細められた。それが笑いの衝動を堪えている証拠なのだと知ったのはつい最近の事だ。

「レナード様……」

それを恨みがましい声で指摘すると彼は予想通りの震えた声で顔を逸らした。

「失礼。先ほどまでは元気そうだと思っていたので、つい」

ぴんと伸びた背筋、誰もいない通路を粛々と進む姿と今の姿を比較したのだろう。
レナードは目元に笑いの残滓を貼りつけたまま言い訳がましく言った。
当然それには頷き、リディアは扇子を広げる。

「当たり前ですわ。あんな陰険――コホン、教育係殿の前で情けない姿なんて見せられません」

指先一つとっても細やかな神経を使った動きで開かれた紫陽花がリディアの顔を瑞々しく飾る。
どの角度でどの動きでどの流れで。
全てを計算した上での所作は、認めたくないがユリウスの教育の賜物だった。

「姫様……」

クロエが頬に手を当ててうっとりと呟く。
微かに紅潮した頬が、普段大人びた横顔を艶やかに見せていた。
その艶やかな横顔がリディアを捉えたまま、誰にともなく呟きを放つ。

「できればもう少し蔑んだ目を向けて差し上げると宰相様もイチコロですのに……」

何て色気のない。

「……クロエ、レナード様が絶句していらっしゃるわ。そういう発言は私の部屋でなさい」

眉を僅かに顰めてクロエを窘める。
そうしてついと視線を滑らせると、一瞬固まっていたレナードがはっと我に返ったように目を見開いた。
次の瞬間には爆笑するのだろうことが分かる、慣れた気配も。
彼には分かっているのだろう。蔑みの目を向けようものならユリウスはますますもって闘争心を漲らせるに違いないと。こちらが上位に立ってみせた所で彼のあの口の悪さと態度の悪さが直るとは思えないと。

（やっぱり私、あの人とは合わないわ）

そっと溜息を漏らす。
途端に頭の中にぴしゃりとしたユリウスの声が聞こえてきた。

『おや、溜息ですか？　構いませんがもう少し憂いと色気を混ぜて頂かないと同情なんてして差し上げませんよ』
『姿勢が悪い！　もっと背筋を伸ばしなさい、みっともない』

『そこ、扇子の開き方が甘い。指運びがとろすぎるんですよ貴方は。まぁ今まで家に閉じこもっていたのですから動作が鈍くても仕方ありませんが』
『笑顔が引き攣っていますよ。そんな無様な顔で一体どんな姫君に勝つ御積りで？』
『はぁ……、こんな問題も分からないんですか？　貴方一体アヴェリン公爵家でどんな勉強をしてきたんですか』

（あぁもう！　思い出したら駄目駄目！）

リディアは大きく頭を振り、自分を叱咤するユリウスの声を振り払う。
もはや夢にまで彼の声が出てきてリディアを馬鹿にする始末なのだ。起きている時ぐらい聞かずにおきたかった。
ユリウスの“再教育”とやらを受けてはや七日。
皇妃としての立ち居振る舞いや一般常識を叩き込むユリウスは確かに大層な知識の持ち主であり、子爵家の息子というだけあってマナーも完璧だった。だが、何分あの性格だ。しょっちゅうリディアをけしかけては喧嘩になるので、教え方がいくら上手かろうと勉強が進まないことこの上ない。

（喧嘩を買ってしまう私にも問題はあるんだけど……）

無論リディアとて我慢だ忍耐だと言い聞かせる努力はしている。
自分は学ぶ立場にあって、向こうは教える立場にあるのだ。少しぐらい大人しくしておきたい。
だというのに彼はいつもリディアを見下ろして不敵な笑みを浮かべては一言余計な言葉を付け足すものだから、つい喧嘩を買ってしまう。
ただ、それでも一つだけ彼を凄いと思える事がある。

（どれだけ喧嘩しても、絶対に最初提示した所までは教え終えるのよね。あの人って）

今日はここからここまで教えると、ユリウスは必ず最初に宣言する。

そしてそれが破られたことは一度だってないのだ。

言い合いばかりで進まない進まないと思っている勉強も、気付けば嫌味という名の味付けがされた問題と、これもまたたっぷりと嫌味を塗り籠めた回答のやり取りになっているのだ。そこが不思議であり、凄いと素直に思える点だった。口にして褒めたりはしないが。

そんなわけで立場的にも心情的にも投げ出さず、七日。

背筋を伸ばして酷使しすぎた腰がそろそろ音を上げていたのだった。

扇子を持っていない方の手でそっと腰をさする。

それを目ざとく見つけたクロエが、一瞬押し黙ったかと思うと。

「ちょっと行って参ります」

にっこりと笑ってから、くるりとリディアに背を向けた。

「待って待って待って！　どこに行くつもり！？」

「大丈夫です姫様、少しばかり宰相様を蹴り飛ばすだけですので」

「絶対駄目ーーー！」

不穏な空気に腰が痛いのも忘れてクロエを追う。

そのまま後ろ姿にタックルを食らわし、ようやくリディアは安堵の息をついた。

あまりの衝撃にクロエが蛙の鳴くような声を上げた気がしたが、それはさらっと無視する。

「駄目よクロエ、彼の所に行っては駄目」
「ですが姫様がこんなに身をボロボロにするのを黙って見ているわけには……」
「コンクラード卿は私がきっちり倒すから。だからクロエはただ応援してくれればいいの」

一瞬強く吹いた風が花びらを散らしていく。
その中で言うにはあまりな言葉を満面の笑みと共に放つと、クロエは不承不承頷いた。

「分かりました。今日の所は許して差し上げます」
「よかったわ。これでコンクラード卿も命拾いしたわね」

心底感じたままの気持ちを言葉にして背筋を正すと、レナードが一瞬ぽかんとした後。

「本当によく似ている」

そんな事を言ったので、クロエと二人揃って「何がです？」と返す。
案の定返ってきたのは沈黙だ。
しかし振り落ちたその沈黙を一秒足らずで切って捨て、クロエがリディアに向き直った。

「そういえば姫様、もうすぐ陛下の御渡りがありますよ」
「え？　こんな時間から？　どうしたのかしら」

空を見上げる。
薄紅に染まった夕方の空は時間としては遅い方だが、皇帝が後宮

を訪ねるには少し早い。
小首を傾げると「さぁ……」と返された。
「どうしてもと仰るので許可しましたが、如何致しましょうか？姫様が御疲れでしたらクロエが代わりに御話を聞いておきますが」
「いいえ、重要なことなら私が行かないわけにはいかないわ。どの道クライヴはクロエだけじゃ許さないでしょうし」
それに自分は仮にも皇妃だ。皇帝が渡るのを拒否する事はできなかった。
必要以上に口を挟まずに佇んでいたレナードが手を伸ばし、さりげなくリディアを促す。
「どうぞ」
「ありがとうございます、レナード様」
「これも騎士の務めですから」
後宮の後ろから鮮烈な夕日が顔を覗かせる。
その眩しいまでの光に照らされたレナードの温かな手を取って花畑から抜け出す。
この十日間毎日繰り返された動作。それをリディアは心地よく思っていた。
笑い上戸ではあるが物静かで温かなレナード。
（コンクラード卿とは大違いだわ）
心の中で呟き、そっと笑う。
後宮の入り口が近い。
そこに立てばプリンセス・オルテンシアになるしかないリディアは、決意とは裏腹に少しだけ惜しいなと思う気持ちが何か分からな

いまま、偽りの皇妃となるべく毅然とした顔を作りレナードに別れを告げた。

◇　22話

黄昏を引き連れて、クライヴがドアをノックする。
その音に窓から外を眺めていたリディアは立ち上がってクロエとヤナに茶の用意をするよう指示し「どうぞ」と声を掛けた。ドアが開かれ、ゆったりとした歩みでクライヴが室内に入る。アイスブルーの瞳がリディアを捉え、ほっとしたように細められた。

「ただいま。今日も元気そうだな」
「腰が痛いけどね」

ふかふかのソファに腰掛けるクライヴの隣に座ると、くすくす笑う彼がリディアの髪を指で梳いた。指の間からこぼれ落ちていく黒髪がにじり寄る闇と同化していく。
無言で茶の用意をしていたヤナがさりげなく明かりをつけた。

「ユリウスの奴も、あれはあれで楽しそうにしている」
「そうでしょうね。私を苛めるのが大好きなんだもの、あの人」
「そうか？　俺はてっきりリディアの事を気に入ったんだと思ったが」
「まさか。天地がひっくり返ったってありえないわ」

小首を傾げるクライヴに、とんでもないことを言うとリディアは憤慨した。
万一天地がひっくり返って気に入られたとしても、それは方向性の違う気に入られ方だ。

（苛め甲斐がある、とかね。本当に意地の悪い人なんだから）

珍しくつんとした態度を取られ、クライヴが呆気にとられる。
だが何が可笑しいのかすぐに低く笑うと、今度は別の話を振った。
「レナードはどうだ」
一瞬息が詰まる。
しかしリディア自身それに気付かないまま、ふわりと笑った。
「レナード様にはとても親切にしてもらってるわ。クライヴが脅かすから怖い人なのかと思っていたけど、全然そんなことなかったし」
どうぞ、とヤナが二人分の茶を置いていく。
柔らかく立ち昇る香気の温かさとほっとする感覚はレナードに似ているとリディアは思った。
ただ、そんなことまでクライヴに話すのは恥ずかしいので黙っておく。
冷たい色の双眸が、そんなリディアをじっと見据えている。
静謐なそれが訝しんでいるようで、思わずリディアは「クライヴ？」と呼びかけていた。
「いや」
視線が離れていく。ふいと逸らされた無表情が遠くを見ていた。
「なんでもない」
硬い声に今度はリディアが訝しむ。
クライヴの横顔をじっと見る。
すると、深く息を吐き出したクライヴが「そういえば」とようやくリディアの方を向いた。

そうして頭の上に疑問符を浮かべるリディアに告げた。
「今日から側室が一人入る」
予想外な言葉に一瞬反応が遅れた。
ぽんと手を合わせる。歓迎ではなく純粋な驚きで。
「……まぁ、そうなの？　でもどうして？」
「押し切られて渋々な。それに色々と役立つこともある」
「役立つこと？」
「あぁ」
一体何なのだろう。
興味が湧いたが、オウム返しのリディアにクライヴは補足説明をしなかった。
（きっと言えないことなんだわ）
責めているわけではなく、当然のこととしてリディアはそう受け止めた。
殿方には女に言えないことがあるのだと、昔母が溜息混じりに言っていたことがある。
ましてや彼は政治の中心にいる皇帝だ。言えなくて当然なのかもしれない。
リディアは後宮がただ甘い愛を囁くだけの場所ではないことを、早くからヤナとクロエによって叩きこまれていた。姫君が美しく着飾り主を待つ理由が、ただの甘やかな恋情だけでないことも。だからリディアはそれ以上問い詰めはせず、別の問いを発した。
「その方のお名前は？」

「ナタリア・ギエン。元老院の末席、ギエン家の孫娘だ」

明かりが生み出す影が濃くなっていく。

長い影をゆらゆら揺らして、クライヴはリディアの髪を梳いた。

「くれぐれも気を付けろよ。ギエンはナタリアが皇妃になれると自信を持っているらしいんだ」

「自信？　もしかしてとても綺麗な人なのかしら」

「さて、どうだろうな。だが美貌ぐらいで皇妃になれると考えているんなら、ギエンも相当甘いと見える」

面倒くさそうにぼやくクライヴに小首を傾げる。

確かに美貌だけでは皇妃になれないだろう。

では、一体何が必要なのだろうか。

「ねぇクライヴ」

「なんだ？」

「クライヴはプリンセス・オルテンシアのどこを好きになったの？」

隣国の、会うことなど滅多になさそうなお姫様の何処を好きになったのか。

それが皇妃になれる理由だというならリディアは聞いてみたかった。

無論自分が本物の皇妃になりたいわけではないが、参考にできそうだ。

プリンセス・オルテンシアと同じ紅紫の瞳でじっと見つめられクライヴが狼狽えたように身じろぎする。衣擦れの音が影の内に控える侍女二人にも聞こえるほど大きく響いた。

だが、狼狽えたのは羞恥だけが理由ではないらしい。

「……どこ？」

迷い子のように呆けた声が耳朶を打つ。

その声が何よりの答えと、リディアは呆れ混じりの息をついた。

「クライヴ、あなたもしかして分からないの？」

文通相手を巻き込んでまで正妃にと願った相手の、どこが好きかも分からないとは。

半眼でクライヴを睨めつける。

「考えたことがなかったからな。どこ……、か」

すると彼は狼狽えた様子のまま、それでも何とか答えを探そうと苦心しているようだった。

答えを待つリディアを見つめ、しばし黙考する。

そうして不意に「あぁ」と呟いた。「そうだった」

「一目で惹かれたかと思えば、気付いた時には落ちていた。だからどこが好きなのかとか考える機会もなかったんだな」

それではあまり答えになっていない。

リディアはそう思ったが、納得した様子のクライヴがあまりに無邪気に笑っていたので何も言えなかった。

いとおしげな眼差しが注がれる。リディアの赤い紫陽花のような瞳に。

（きっとプリンセス・オルテンシアを想っているのね）

遠く会えない人の代わりになれる目が自然と細まる。

姉のように妹のように優しくクライヴの視線を包み込んで笑んだリディアに、彼はとても幸福そうに静かに微笑した。
甘く大人びた顔に目を丸くする。
すると同じくきょとんとした様子のクライヴが立ち上がった。
プリンセス・オルテンシアの代わりとして見ていた後ろめたさからか、バツが悪そうな顔で告げる。

「さて、面倒だがそろそろ戻らんとな」
「まだお仕事？」
「あぁ。戻らないとユリウスがうるさい」
「あら、コンクラード卿はもっともっと働いて私みたいに腰を痛めればいいんだわ」

同じく立ち上がって腰に手を当てるリディアに、そう言ってやるなとクライヴが声を上げて笑う。

「それじゃあ、また夜に」

夜とは、リディアが眠った後の深夜だろう。
それが分かったから「えぇ、おやすみなさい」と返すと、ぽんとリディアの頭に手を置き二度三度撫でたクライヴが名残惜しそうに、しかし足だけはきっぱりとドアに向けた。
見送りにヤナがドアを開け、彼を先導する。
その姿が消えるまで視線で見送ってから、リディアは夜空に浮かぶ一番星を見上げた。

新しく後宮に入ったナタリア・ギエンから接触があったのはその翌日だった。

「ナタリア・ギエン様の侍女がいらしておりますが、如何なさいますか？」

朝食を食べ終えたばかりのリディアにヤナがそっと耳打ちする。

「あら、随分早いのね」

その言葉にくすくすと笑い、リディアはクライヴが気を付けろと言っていたのを思い出して「そうね」と考えを巡らせた。何を気をつければいいのかは分からないが、ここは慎重に動くべきだろう。

そう結論付け、侍女の相手は侍女にとリディアはクロエを呼びつけた。

直接話してもいいが、貴族の子女は侍女相手に対等に話をしないものだとユリウスに口を酸っぱくして言われたのだから仕方がない。言われてみれば、皇妃が側室からの言付けを直接聞くのは確かにおかしいなと思い直したのもあるが。

この程度のことも知らなかったのだ。ゼナとシルヴィアに嘲弄されたのも納得がいく。

（今後はもう少し慎重に行かなければね。また負けたらコンクラード卿に何を言われるか分かったものじゃないもの）

仮にも公爵の娘なのだ。知らなかったでは済まされない事も多い。

リディアは気を引き締めながら、やって来たクロエに笑いかけた。

「侍女の相手はクロエにお願いするわ。くれぐれも失礼のないようにね」

はい、とたおやかに笑うクロエが侍女の元へと消えて行く。

どことなく嬉しそうな背中を見送りつつ、さて今度はどんな話を

持ち込まれるのやらとリディアは心の中で呟いた。

（挨拶で済めばいいのだけれど）

クロエはまだ暫く戻らないだろう。

そう判断し、リディアはソファに腰掛けて今日の分の予習を始めることにした。

◇　23話

「そういうわけで、ナタリア様に個人的にお話がしたいと言われたのだけど――」
「そこ、後れ毛がある。直しなさい」
「勿論私だけでどうにかすべきなのは分かっているわ。でももしアドバイスがあればと――」
「もっと真っ直ぐ歩けないのですか貴方は。それからつま先はもっと伸ばす。あぁまったく、みっともない御令嬢だ」
「……人の話を最後まで聞かないコンクラード卿の方が余程みっともなくってよ」

国中が黄金色に染まる刻限、ユリウスの執務室隣でみっちりしごかれていたリディアはバシンと音を立てて閉じ、憎々しげに彼を差した。差しつつつま先を伸ばすのは忘れない。勿論自分は人の話をちゃんと聞いているというアピールだ。
ドレスの裾から慎ましやかに見えるつま先が真紅の絨毯に影を落とす。尖ったそれが真っ直ぐ前に伸ばされ、リディアに凛とした立ち姿を与えるのを確認してからユリウスは椅子に腰掛けた。机に肩肘をつき、面倒くさそうに答える。

「皇妃の御機嫌伺いがしたいだけでしょう。至って普通の申し出だと思いますが」
「別におかしいとは言っていないわ。クライヴが気を付けろと言うから気をつけているだけですもの」

新しい側室ナタリア・ギエンが何故リディアに面会を申し出たのか、その理由など百も承知だ。
シルヴィアやゼナ、彼女達に味方する多くの側室はリディアに面

会を申し出ない。あくまで無視し、皇妃としての存在を黙殺する気でいるのだ。だが本来なら保身の意味も籠めて皇妃や皇帝の寵の厚い側室には顔ぐらい出すのだとヤナは言っていた。
立場が上なら上下関係を確立させるため、下なら頂点を立つ者を見極めるため。
多くの思惑が混ざり合い、御機嫌伺いの形となって表れる。

（だからプリンセス・オルテンシアとしてナタリア様の申し出は当然受けるべきだわ。……ただ）

クライヴが言っていたことが少し気にかかる。
ただでさえ一度失敗しているのだ。二度目はない。慎重にならざるを得ない。
そう思い素直に答えると、ユリウスが目を眇めてリディアを捉えた。

「貴方にとって陛下の言葉は絶対のようだ」

揶揄する声に、何を今更と笑ってみせる。

「当然だわ、だって信じているもの。……信じ過ぎたら駄目だってつい先日学んだばかりですけれど」

楚々と刻んだ笑みを扇子の奥に隠す。信じすぎてはいないと暗に言い放つリディアにユリウスは若干意外そうな顔をし、椅子の背もたれに体を預け、手に持ったペンをくるりと回した。先端についた白い鳥の羽が風を切る。

「ギエン家は今でこそ元老院の末席に甘んじているが、元は外交官を務めた家系だ。当然今でも他国の情勢に詳しいと言えるでしょう。

影を至る所に張り巡らせているはずですからね」
「影？」
「密偵ですよ。一家に一人はいるでしょう。まぁ、貴族限定でしょうが」
「……その言い方何だかとても複雑だわ。私の家にもいたかもしれないけど、見たことはないわね」
「影を使役できるのは当主のみ。あとは家人にも存在を悟らせないようですから、引きこもりの公爵令嬢が見ていないのは当然でしょうね」

そうやって、時折さらりと喧嘩を売るのはどうかと思う。
リディアは拳をきつく握りしめながら引き攣る寸前のきわどい笑みを返す。

「つまりナタリア様を初め、ギエン家の方々は独自の情報網をお持ちということかしら」

とてつもなく分かりづらいが、それが今回気をつけるべきことなのだろう。
勝手に解釈しつつ問うと、ユリウスはそれには答えず立ち上がり、ペンを上下に振りながら滾々とまくし立てるように話す。

「一、フィアレーン関連の話題は極力避けること。また墓穴を掘る。二、メリアルド国内の情勢について触れないこと。貴方の知識の無さが即バレますから特に注意なさい。三、ギエンの自信の源を聞きだすこと。陛下も気になさっておいででした。暇なのですからそのぐらい役に立ってみせなさい。――それから四、くれぐれも短気を起こさないこと。私相手ならばともかく、貴族の令嬢相手に喧嘩など申し込むのははしたないのでやめなさい。……と、本来なら紙一面に書き出す所ですが、多くて貴方が覚えられないと事ですからこ

の辺でいいでしょう」

……親切にかこつけて喧嘩を売りたいのか、真面目にアドバイスしているのかどちらだ。

ユリウスの銀髪が黄金色に焼かれる。冷淡な横顔を埋める柔らかそうな髪に目を止めながらリディアは心底悩み、後者として受け止めることにした。もしここで言い返そうものなら注意その四を守れないと思われてしまう。

（親切、そう親切よ。コンクラード卿は私にちゃんとアドバイスしてくれたんだもの。彼個人の意見では私なんて蹴落とされた方が嬉しいはずなのに、珍しく四つも意見をくれたのよ。喜ばなきゃ駄目よ、リディア）

胸中でかなり無理矢理に思い込み、歌うように並べ立てられたアドバイスを一つ一つ胸に入れていく。そこでふと顔を上げ、リディアはユリウスをじっと見て首を傾げた。何となく既視感を感じたのだ。

（何だったかしら。前にもこんなことがあったような気がするのだけど）

視線をユリウスに留めたまま、しばし黙考する。

そうして怜悧な目尻が怪訝そうに顰められた時、リディアは「あっ」と声を上げた。

「コンクラード卿って、何だか姉様みたいね」

マリアもロザリアも、揃ってリディアの世話を焼くのが大層好きだ。

だからリディアが一度何か始めようものならああしなさいこうしなさい、あぁでもそんなことしたら駄目よ姉様リディアが倒れてしまうわなどと当のリディアなどそっちのけで話し続けてしまう始末だ。

あのお節介ながらもいくつも注意事項を並べ立てる姿を思い出し、リディアは遠くアヴェリン公爵家の方角へと目を向けた。

その横から低く唸るような声が耳朶を打つ。

「……また私を女扱いか、リディア嬢？」

凍えるような声色が獰猛な色を帯びる。

不吉な気配にぞっとし、そろそろとユリウスを見ると彼は以前プリンセス・オルテンシアになればいいのにと言われた時のように、怒気を顕に、けれどもあくまでにこやかにリディアの答えを待っていた。

（こ、わ。怖いわ、コンクラード卿！）

そういえば彼を女性扱いする言葉は禁句だった。

リディアはようやく思い出し、こほんと咳払いを一つ。

「あら御免なさい、つい。でもあなたを女性扱いしたわけじゃないわ」

男らしいと賞賛もできないけれどね。

動揺して思わずこぼした言葉に、ユリウスの眦がぴくりとつり上がった。

「理由を訊いても？」

「簡単ですわ。私、ここに来るまで殿方なんてクライヴと父様しか

知らなかったんですもの。男らしさの基準なんて分かりませんわ。物語で王子様を見たことはあるけれど、物語は物語でしょう？　あぁ、ですがレナード様みたいな方は男らしいと言うのかしら」

あるいは紳士的と言うべきか。

いつも静かに手を差し伸べて自分を護ってくれるあの優しい騎士を思い出し、リディアはうっとりと目を細める。ユリウスはそんなリディアを凝視し、一瞬何やら考えこむように視線を落としたが、結局は「まぁいいでしょう」とその日の授業をお開きにし、ナタリアとの面会内容を後で教えるようにと言い含めて部屋を出ていった。

◇　24話

とにかく大人しく、それが肝要。

リディアはユリウスが述べた注意事項を一つ一つ呟いて飲み下し、ナタリアの訪れを待っていた。クライヴは今日も政務で忙しい。今回は助っ人を期待するわけにはいかないのだ。

ヤナとクロエがやや気遣うような目を向けてくる。

手を振ってそれを大丈夫と払うと、彼女達は黙々と茶の準備を始めた。

心配事は尽きない。そもそもナタリアの自信の理由などどうやって探ればいいのか皆目検討もつかない。だがその都度リディアは喧嘩を売りながらも自分を案じてくれた――とリディアは思い込む事にしていた――ユリウスの言葉を思い返し、心を沈めていた。

口も性格も相性も悪いが、今まで自分の立ち振る舞いを注視し粗を探し矯正した相手だ。彼の言葉程的確なものもないだろう。どれだけ意地が悪くとも彼が教えたことに今まで一つとて嘘はなかったのだから。

ドア付近で立ち止まる足音にクロエが応対する。

「姫様。……あの、ナタリア様が御越しです」

「御通しして差し上げなさい」

クロエの言葉はどことなく困った風だったが、気にせずドアを開けさせる。

「どうぞ」

囁き声と共にクロエが丁重にドアを開けると、ぱっと目を引く豊かな蜂蜜色の髪が現れた。

「初めまして、ミレーニア様」

侍女も引き連れず、一人か。

クロエが困っていた理由を知りリディアも少し驚いたが、ドレスの裾をつまんで優雅な仕草で頭を下げるナタリアに微笑みかける。

驚きよりも怒りよりも悲しみよりも、仮面となるのは笑顔だ。

「初めまして、ナタリア様。わざわざ御越し頂いてありがとう」

顔を上げたナタリアはリディアを見てほぅと呆けたような息をついた。シルヴィアやゼナとは違うあどけなさの残る少女らしい可憐さに目を留めると、サファイヤ色の瞳がはっと見開かれた。

「いいえ、こちらこそ御時間を頂けて光栄ですわ」

取り繕うような笑みは淑やかだったが、どちらかと言えばリディアと同じ幼さを感じてほっとした。あまりに大人すぎる姫君が現れたらどうしようと考えていたせいかもしれない。

だが彼女はまだ十六なのだ。それで自分と同じ程度だというのは、あまりに自分が幼すぎると自覚しているようなものだ。……一応自覚してはいるのだが。

「ここはとてもいい匂いがしますのね」

「花が咲いているからではないかしら？　後宮を囲むように色とりどりの花を咲かせておりますもの」

「えぇ、わたくしも後宮に入る前に目にしましたわ。ですがこの部屋が一番心地よいと思いましたの。皇妃様の御部屋なんですから当然でしょうけれど。わたくし達の部屋は風向きの関係か、あまり花の匂いはしないんです」

「まぁ、そうなの？　あれだけ一面咲いていたら後宮中甘い香りがすると思っていたのだけれど」

それは知らなかった。

だがリディアのいる部屋が一番いい部屋であるというのは頷ける。皇妃の部屋が他の側室の部屋に劣る事があってはならないだろう。違いがないのが一番だろうが、ここでも上下関係をはっきりさせるために、設計の段階でここだけ違いが出るようにしたのかもしれない。

（色々と面倒なのね、こうしてただ住んでるだけなのに）

運ばれる茶に口をつけ、昨日クライヴから贈られた菓子を勧める。メリアルドから取り寄せられた上質な砂糖で作った焼き菓子だ。

ナタリアが勧められるまま一口食べる。

「とても美味しいですわ」

「それはよかった。陛下もきっと喜ばれましょう」

そのまま綻んだ警戒心のない顔に密やかに笑う。まるで妹ができた気分だ。

リディアはユリウスの注意を自然と守りながら、心穏やかにナタリアと話せている事に満足した。

（てっきり喧嘩になると思っていたけど、これなら大丈夫よね）

送り込まれた側室は思ったよりも穏やかな性格なようだ。この分なら静かに話ができるだろう。

ギエン家の狙いはまだ分からないが、まずは世間話でもしてみないことには始まらない。あくまで遠まわしにじっくりと、が貴族の

常套手段だと頭では理解しているつもりだった。
すると陛下という言葉に反応してナタリアがぱちりと目を見開いた。
まじまじと焼き菓子とリディアを交互に見つめる。
「どうかなさいました？」
もしかして何か問題でもあっただろうか。
狼狽を勘づかれないようにややおっとりとした声で問うと、ナタリアはこんなことを訊いてもいいのかとためらった後で「あの」と口を開いた。窓から差し込む光に蜂蜜色の髪がとろりと音を立てるように肩に流れるのが際立つ。
少女から大人になりかけの滑らかな肩の曲線に、成程確かに皇妃候補にしたがるだけの事はあると冷静に考えた。
美貌だけでは駄目でも、庇護欲を掻き立てられれば誰だって好意を抱いてしまうに違いない。だがその冷静さの間隙を突いて放たれた言葉に、リディアははたと思考を止めた。
「ミレーニア様は陛下に御会いしたことが御座いますの？」
「……え？」
何を今更。
そう言いたくなるのをぐっと堪えてから、そうだったと気付く。
（クライヴは誰の所にも通わないで済むように私を皇妃にしたのよね。でも、ナタリア様のこの言い様だと……まさか後宮に入る時さえ顔を合わせなかったのかしら）
流石にそれはひどくないだろうか。
リディアはここにないクライヴに文句を言いたくなりながらも、

静かに目蓋を伏せる。
さて、何と答えよう。

◇　25話

澄んだサファイヤの双眸は期待と不安を籠めてリディアを見つめる。

その不安にリディアは自分がプリンセス・オルテンシアであることを忘れて同情心を抱きつつ、優しく答えた。

「陛下に？　そうですわね、実際に話をするという意味での会うでしたら三日に一度程度でしょうか」

「？　他に意味がありますの？」

「陛下は御多忙ですから、いつもここに来る時は私が眠った後なのです」

「まぁ！　では陛下の御渡りがあるのにミレーニア様は眠っていらっしゃるの？」

当たり前だ、さすがにあんなに遅くまで待っていたら身がもたない。

指先で焼き菓子を弄びそんな事を考えたが、この件に関して言えば非常識なのはリディアだと自覚していた。

皇帝が渡る時に何をするのか、朧気ながらヤナから教わっているし知ってもいた。

最初聞いた時は顔から火が出るかと思ったが、子をなすために必要なのだからと思うと案外冷静に事態を受け入れられた。

だからこそ今は異常なのだ。

クライヴはリディアに指一本触れない。当然と言えば当然だが。それ故に呑気に眠っていられるのだが、他の側室はそんな事夢にも思っていないに違いない。熱心に愛されていると嫌味を囁いているのが聞こえたとクロエが嬉しそうに報告した所から察するに、誰にも気付かれていない。

どうしようかと思案し、リディアはふくふくと見るものに幸福をおすそ分けするような笑みを浮かべさっと扇子の奥へと隠した。

「そうですわね。確かに妃として至りませんわ。けれど起きていたらそれはそれで陛下の御不興を買うと思うのです」

「それは何故？」

「遅くまで起きているな、眠っていろと陛下なら仰るはずだからです」

陛下ならというよりも、クライヴならと言うべきだがそこは黙っておく。

薄い絹が張った扇子の奥に隠された、計算された幸福に気付かずナタリアが感嘆の息を吐く。

「陛下は随分御優しいんですね。けれど少し甘えすぎではいらっしゃいませんこと？」

「えぇ。それが許されるうちは甘えておきたいと思っておりますわ」

「その言い方だと、まるで許されなくなる日が来ると思ってらっしゃるようだわ」

「私には人の心の移り変わりまではどうにもできませんもの。来ないで欲しいと願ってはいるけれど」

そうではないのだ、とリディアは言いそうになりぐっと堪える。

（私はそう遠くないうちにいなくなるのよ、ナタリア様。本物のプリンセス・オルテンシアがいらしたら私の役目は終わるの）

無論その後本物のプリンセス・オルテンシアを迎えてますますクライヴは皇妃を甘やかすだろう。彼女の事を想う時のクライヴの顔の優しいことと言ったら、あれだけで砂糖菓子がいくつも作れそう

な程甘いのだ。
来ないで欲しいだなんて嘘だ。
クライヴがずっとあんな笑顔でいられるなら、その日が早く来てくれればいいのにとリディアは指折り数えて待っている。それが為に頑張れるのだから。

（クライヴが羨ましいわ）

ああやって誰かを大事に恋しく想えるのが素直に羨ましい。
まだ感じたことのない想いは、いつかリディアの下にも降ってくるのだろうか。目を細めると、頭に兎のような赤い瞳が浮かぶ。
鮮やかなその色に目を瞠ると、うっとりと頬を染めるナタリアと目が合った。
幸い、リディアの不自然さには気付いていないようで、熱に浮かされたような声がふわりと舞い上がる。

「祖父が言う通りの仲睦まじさですのね。ギリアム王室では考えられないわ」
「ギリアム？」

ギリアムとは、大陸最北の国の事だろうか。

「ナタリア様はギリアム王室を御存知なの？」
「えぇ、半年前に祖父の命でサンセットに戻りましたけれど、今でも故郷はどこかと問われればギリアムと答えますわ。ずっと住んでいたんですもの」

そこまで言い、ナタリアは熱情が瞬時に醒めたような、夢が目の前で消えていったような芯のある光を瞳に引き戻した。

「でもそうね、だから祖父はわたくしをここに寄越したのだわ」

驚きを含んだ視線がリディアに縫いとめられる。

独りごちる高い声は、真実誰にも聞かせるつもりがないのかひどく要領を得なかった。

「？　ごめんなさい、意味が分からないわ。一体何故ナタリア様はここに呼ばれたの？」

ユリウスが言っていた自信の源。

ナタリアの言葉に今日の本題を思い出し、背筋を伸ばして問うてみる。

華奢な指が胸元に当てられる。露出した肌をなぞるように滑る指先に溜息を零してナタリアはやはり独りごちるように告げた。

「わたくしは元々ギリアムに骨を埋めるつもりでいました。孫なんて沢山いるから、何もギリアムに住むわたくしを御召しになるなんて夢にも思っておりませんでした。でも祖父はわたくしを御召しになり、後宮入りを命じたのです。わたくしにはもう婚約者が居りましたのに」

「え……？　婚約者？　それなのに後宮へ？」

「祖父の命令ですから」

ナタリアの祖父に一体どれだけの力があるのかは分からない。アヴェリン公爵に命令などされたこともなければ、姉達の誰かが命じられて遠くに嫁いだのを見た経験もないリディアには彼女の言葉の意味の一片さえ理解できなかった。

ただ、理不尽さに対する怒りだけがこみ上げる。

睫毛を伏せるナタリアの影のある表情は、婚約者に対する思慕を表しているように見える。

（それなのにギエン家は引き剥がしたのね、ナタリア様と婚約者を。よりによってクライヴの側室にするためなんかに）

クライヴにはプリンセス・オルテンシアがいる。他の誰かが入る余地などないのに、彼が通う事などないのに側室でいなければならないナタリアを想うと、今すぐにでもギエンに直談判してやりたくなった。

恋する二人の応援をしている真っ最中のリディアには到底許せない事だった。

同時にやるせなくなる。貴族ならそれも当たり前のことなのだと、これもヤナから教わったからだ。

歴代皇帝の傍に侍った姫君。

その殆どが親や親戚の命によって後宮入りした者達なのだから。

「初めわたくしは何故祖父が突然陛下の御傍に侍るようにと仰ったのか分かりませんでした。皇妃様がいらっしゃるのですもの、わたくしの必要性などありまして？」

自嘲気味に笑うナタリアに何も言えず沈黙で返す。

これがシルヴィアやゼナなら優越感たっぷりに笑って叩き伏せるぐらいのことはするのだが、ナタリア相手にそんな暴挙に出る気にはなれなかった。

カチャリ、カップが置かれる音がする。

「けれどミレーニア様に御会いして、やっと分かった気がしました」

伏せていた睫毛がゆっくりと上向く。納得したような満足したような全てを悟ったナタリアの表情は、幼い可憐さよりも覚悟を決めた者特有の強さが際立ち息を呑むほど美しかった。

「何が、分かったのです？」

分からない。彼女が突然こんなに強い目をするようになった理由なんて。

扇子では隠し切れない目元を引き締めてたおやかに笑んでみせる。その笑みに鮮やかに笑い返し、ナタリアは衣擦れの音と共に席を立った。

見下ろす眼差しは挑戦的でも威圧的でもなく、ただひたすらに真っ直ぐだった。ちらと横顔が笑う。

「わたくしがいるべき場所はここで合っているということですわ」

ますます持って分からない。

（どうしてナタリア様は突然後宮にいようと思い立ったのかしら。これじゃまるで皇妃になると宣言されてるみたいじゃない）

だが皇妃になるから覚悟しておけという宣戦布告の代わりに、ドレスの裾をつまんで一礼した彼女は案じるような眼差しをリディアに向けた。

「ミレーニア様、くれぐれも身辺には御気をつけあそばせね。わたくし、貴女様とは良い御友達でありたいんですもの。怪我でもなされては大変。……けれど貴女様のその御美しい髪は、あまりに多くの者の目を引きますから心配だわ」

髪？　髪が一体何だというのだ。

窓から夕暮れの光が差し込んでくる。随分長話をしてしまったと慌てて退出の許可を出すと、ナタリアはにこりと笑って最後に一礼

してから音も立てずに出ていった。

◇　26話

静まり返った廊下を歩く足音が夜の傾く音だ。
リディアはそんな事を思いながら重たい目蓋を軽く擦り立ち上がった。
雲間から差し込む月明かりがさぁっと室内を照らす。少女趣味の部屋もこの時ばかりは落ち着いて見えた。
クロエの囁きの後にドアが開けられる。一人入り込んだ後宮の主に、リディアは笑い掛けた。

「おかえりなさい、クライヴ」
「リディア？　こんな時間まで起きてたのか」
「うん、私もたまには陛下の御渡りの時間に起きてようと思って」

本当はナタリアに言われたからだが、あえて言わずにおく。
それに理由はそれだけじゃなかった。

（今日訊かなくちゃ。あの時は訊けなかったけど、今日は）

月が大きく傾いている。普段は眠っている時間に起きているせいか、身体が少しだるかった。
目を閉じればすぐにでも夢の世界に旅立てる程の眠気をクライヴは見抜いているのだろう。彼は大股に歩き、そっとリディアの前髪に指を差し入れて頭を撫でた。小さい頃とは随分と違う大きな手に触れられて、眠気がいや増す。

「そんな事考えなくていいから、眠くなったら寝ろ。体を壊す」

言いながらどことなく嬉しそうなのは一体どうしてだろう。

リディアは不思議に思いながらも小さく笑った。
肩から背中に髪が流れる。うなじをひやりとした感触がつたうのを感じていると、クライヴが怪訝そうな顔をした。
「どうした。何を笑ってる」
「ううん。本当に私が思った通りだと思って」
ナタリアに言った通りだ。
クライヴは自分が起きているとこんな風に案じてくれる。窘めるような口調で頭を撫でて。
甘えている。リディアにも無論自覚はあったが、それはそれでいいと本気で思っていた。
（だってもうこんな風に過ごすことは一生ないわ。文通だって、続けられるか分からないんだもの）
むしろ皇帝と文通などしていたのが驚きなぐらいだ。……知らなかったとはいえありえない。
だからこれが自分に残された僅かな時間なのだ。
色々と間違った形ではあるが、親友と言葉を交わせる時間はもうあまり残されていない。
本物のプリンセス・オルテンシアが嫁いできたら自分がここにいる理由などないのだから。
それを寂しいとも嬉しいとも感じつつ、リディアは顔を上げた。
「ナタリア様ってとても可愛らしい方ね。まるで妹ができたようだったわ」
突然の話に、クライヴは思い出したという風にリディアの頭を撫でていた手を頬へと滑らせた。

「何かひどい事は言われなかったか？」
「全然？　クライヴに会ったことがあるかって訊かれたけど。クライヴ、貴方ナタリア様が後宮入りする日にも顔を見せなかったのね」
「見せる必要性を感じなかった」
「それでもここは貴方の為の後宮なのよ。せめて入る時ぐらい会ってあげなきゃ、他の側室に馬鹿にされちゃうじゃない」

後宮では面子が物を言う。ヤナの教えだ。リディアも今ではそう思っていた。
他の者達には会っているのに一人だけ皇帝と直に会ったこともないのでは口さがない者達がうるさいだろう。噂の渦中に立たされて、ナタリアが辛い思いをしなければいいのだがとリディアは案じていた。
眉根を寄せて窘めると、クライヴは一寸驚いた顔を浮かべる。意外だと声が物語っていた。

「随分気に入ったようだな」

そうかもしれない。
プリンセス・オルテンシアの敵となりそうな割には、確かに気に入っている。

「ギエン家の方に言われて来ただけなのに辛い思いをするのは可哀想だもの。……でも」
「でも？」

（でももう、ああやって親しく御話するのは無理なのかもしれない）

「ううん。ただ、もう可哀想だとか言ってられないのかもしれない

って思って」
「皇妃になりたいとでも言い出したか？」
「え？　ううん、それも違うよ。良いお友達になりたいって言われたし」

嘘ではない。あんなに好意的な言葉を向けられるとは思わず驚いたぐらいだ。
大きく首を振る。クライヴはすっと目を細め、リディアの真意を推し量ろうとするように静かに視線を向けた。

「では何だ」

問いに、僅かに逡巡する。
訊きたかった事はここから繋がっていくのだが、いざ言うとなると勇気がいった。
確証を得るのが怖いのと、もう一つの本題に答えが得られるか分からず。
頬に触れる手に自分のそれを重ねて、クライヴを見据える。アイスブルーの輝きが月明かりに凛と映えていた。

「……ナタリア様はここが自分がいるべき場所だって言ってた。私に会ってギエン家の人がナタリア様を後宮に入れた理由が分かったからって」

もしかしたらそれは暗に皇妃の座を狙うと言っていたのかもしれない。

（でもナタリア様は自分がいるべき場所がここだと言ったわ。皇妃の話なんて出さなかった）

不可解さに口を閉じる。
リディアの視界の中で、クライヴはより眼光を鋭くする。

「リディアに会って？　ナタリアがそう言ったのか」
「うん、そうだけど。……どうしたの？　クライヴ。今の何か変だった？」

剣呑な光はリディアが見たどの表情とも違う。皇帝だ、と恐れに似た感情がこみ上げた。周囲を圧倒し屈服させる眼差しの強さは、リディアにそう思わせるだけの力を持っていた。が、それも一瞬の事だった。

◇　27話

「いや、なんでもない」

目を見開いたリディアに何を思ったのか、クライヴはすぐに目元を和らげる。

繊細な顔立ちに向け、勢い込むように問う。

一瞬だけ見た眼差しが、事態の不穏さをより強めたように思えてならなかった。

「ねぇクライヴ。もしかしたらの話だけど、ナタリア様は気付いてらっしゃるんじゃないかしら。私がプリンセス・オルテンシアじゃないって」

ナタリアに会って感じた疑問の一つ。

クライヴは放たれた問いに「どうしてそう思う」と静かに返す。

心底不思議そうな声色に、うーんと口元に人差し指を当てて考えこむ。

「そうね、偽物だって分かったから皇妃になるチャンスが見えたとか。それならギエン家の自信も分かるわ」

「ミレーニアはメリアルド王城から出ていないはずだが」

「サンセットの人達では分からないかもしれない。でもナタリア様は半年前サンセットに戻っていらしたばかりだわ。ギリアムからの移動中メリアルドの首都に立ち寄った可能性が高いのよ」

北のギリアムから南のサンセットに行くのに一番近いのは、中央のメリアルドを通る道だ。これぐらいは歴史にもマナーにも疎いリディアでも分かる。ファイディやニーチェを迂回するのは遠いだろ

う。慌ててナタリアを呼び寄せた体のギエン家がそんな余裕を与えるとは思えなかった。
思考を纏めながらうんうん唸って言葉を紡ぐ。
するとクライヴに強く肩を掴まれはっと息を呑んだ。

「ちょっと待てリディア。今何て言った？」
「だからナタリア様がメリアルドの首都に――」
「そうじゃない。彼女が半年前にサンセットに戻ったと言ったのか」

切羽詰まった声に、呆れたと息を漏らす。

「あなたそんな情報も知らずに後宮に召し上げる許可を下したの？
えぇ、そうよ。ナタリア様はそれまでずっとギリアムで生活してらしたそうよ」

一体どこまで関心がないのやら。
肩を竦めると「くそっ」とクライヴが悪態をつく。

「報告にはそんな事一言もなかったぞ……！　あの狸、根回ししやがったな！」

報告？　一言もなかった？

（ナタリア様がサンセットで生まれてずっと生活していたように書類を捏造したってことかしら。でも、一体どうして）

そんな必要、あるのだろうか。
サンセットで生きようとギリアムで生きようと彼女はギエン家の人間だ。その血筋があれば後宮に上がるには十分ではないのか。

（プリンセス・オルテンシアの件だってあるんだから、他国の姫が嫁げないなんて訳もないし……。ますます分からないわ）

リディアは思案に耽っていた顔を上げ、苛立ちに顔を歪めるクライヴに訊いてみた。

「何故ナタリア様のお祖父様はそんな事を隠したのかしら」

「そんなの決まって――！」

意外なほどの鋭い声はしかし、すぐに掻き消える。

壁があったら殴りつけていそうな程に、リディアが恐怖を覚えるような怒気の塊がしゅるしゅると音を立てて萎んだ。

「……いや、そうだな。確かに不可思議だ」

代わりに出たのは、打って変わって静かな声。

リディアはその怒気と静けさの間にある壁に、思わず顔を顰めていた。

嘘だわ。囁く声に何か言いかける口を両の手の平で塞いでやる。

そのままクライヴを睨めつけ、リディアはもう一つ知りたかった問いを発した。

「他にも知りたい事はあるわ。――ねぇクライヴ。私のこの黒い髪には、一体どんな意味があるの？」

シルヴィアもゼナもナタリアも、ここで出会う姫君は皆リディアの髪を見て驚く。

だが当のリディアだけがその意味を知らないのは、あまりに不本意だった。

塞いでいた口を自由にするべく手を離す。

吐息が指先に触れた頃にはクライヴは答えを出していた。
「どんな意味もない。黒髪はあまりいないがそれだけだ。お前の髪を綺麗だとは思うが、特別な理由なんてなにも」
吐き出された言葉の滑らかさは、きっと多くの者を納得させるだろう。――リディアを除いて。
「クライヴ、貴方嘘ついてるわね」
「嘘なんてついてない」
「いいえ、それも嘘だわ」
はっきり言い切る。断言する言葉がもたらす自信に裏付けなどなかった。
ただ、笑みのように弧を描く口元が嘘くさいと。その程度のものだった。
（だって、全然安心できない）
「何故言い切れる。今まで俺と顔を合わせた回数とて多くないのに」
「分かるわ。だってダチだもの」
いつだってリディアはクライヴの手を取ってきた。言葉を信じてきた。
それはリディアの望みでもあったが、望みだけで信頼しきるほど頭の弱い女になったつもりもない。クライヴが信頼に足る態度を示し続けてきたからここまで来たのだ。長い長い時間の中、何枚もの文が言葉を運んでここに辿り着いた。
決して安くも軽くもない。リディアにとっては何よりも重いもの。
ダチという言葉はリディアにとって全幅の信頼を寄せるに値する

関係だった。その彼が浮かべる歪んだ笑みを見ているのが辛くて顔を逸らすと、ぽつりと低い声が這うように響いた。

「ダチ、か」

「――クライヴ？」

「そんな肩書きだけで相手の気持ちが分かれば苦労などしないんだがな。いや、分からないならいっそない方がいいのか」

耳朶を打つ言葉の苦々しさと、自分の信頼の形をまるごと壊すような言葉に震えた声で呼びかける。

アイスブルーの瞳が細められる。今度こそ分かりやすく歪んだ笑みに、リディアは一歩後じさった。

「ところでリディア」

（――怖い。何、これ。どうしたの？　クライヴ。どうしてそんな目で私を見るの？）

胸中でも震えた声で繰り返す。

一体何が彼をこんなにしたのか理解出来ないまま、リディアはあえぐように息を吐き出した。

「な、に」

捕食者の目で見据えられ、身体が震えそうになる。だがそれだけは必死で耐えて問い返すと、衣擦れの音と共に伸ばされた腕がリディアの腰をさらった。

ぴったりと身体が触れ合う。彼の鼓動の穏やかさに、泣きたいぐらい怖いと思った。

「最近レナードと随分親しいようだな」

怒鳴られても殴られてもいない。痛くも痒くもないのに、どうしてこんなに怖いのか。

青ざめたのは図星だからではなく、何故そのような事を訊かれるのか理解できなかったせいだった。しかしクライヴは青ざめたリディアの顔を見てすいと片眉を上げ、ついで口の端を吊り上げたかと思うと有無を言わさず身体を抱き上げベッドまで連れていった。

何をするのと怒鳴る間も与えられない。

ベッドのスプリングが静寂の中で申し訳なさそうに軋む。ふわふわのレースが降る天蓋の下にはひどく不似合なクライヴの昏い顔が、リディアの強張った顔を見て僅かに痛みを浮かべた。だが身体を上から押さえこむ腕の力はいつまで経っても失せない。

押さえつけられた手首が痛い。ぎり、と骨の軋む音に意識が遠のきそうになる中、クライヴの声だけがはっきりと聞こえた。

「お前の夫は誰だ、リディア」

「どうしてそんなこと……」

「答えろ」

（どうしてそんなこと訊くの？）

訳が分からなかった。一体何が彼をこうさせたのかも、この問いの意味も。

大体リディアの問いにはまだ答えてもらっていないのだ。普通先に答えてからだろう。

そんな文句がないわけじゃない。むしろありすぎるぐらいだった。

しかしリディアは親友という皮を脱ぎ捨てて自分を押さえこむクライヴに対する困惑で文句を言うどころではない。更に言うなら痛みが激しくて頭も働かない。

答えを紡げたのは、矜持に似た思い故だった。

「あなたよ。少なくとも本物のプリンセス・オルテンシアが来るまで私の夫はあなただわ」

プリンセス・オルテンシアの由来とも言える紅紫の眼差しで射抜く。籠めた怒りはどんな鈍いものでも理解できる程に煮えたぎっていた。

押さえつけられた事よりも命令口調で話された事よりも、彼は一番してほしくない事をした。それだけがリディアに答えを導き出させた。

（クライヴにとってダチじゃなくても、私にとってはダチだわ）

故に自分はここにいる。

後宮での存在理由であり願いでもある思いは、全て彼が親友だからだ。

クライヴが忘れようともリディアを疎もうともそれだけは変わらない。

だからリディアはクライヴを夫と呼んだ。

真っ直ぐな声に射抜かれて彼が我に返ったように顔を歪める。一瞬で元に戻ったそれは、月明かりが見せた幻のようにはかなかった。

◇　28話

気付けば夜が過ぎ、日が昇り、また傾こうとしていた。
ベッドに投げ出された肢体。それを押さえつける強い腕。
泣き出しそうにも見えるアイスブルーの瞳は見る者に何を伝えたかったのだろうか。
ソファに座りぼんやりと外を見て考え続けるリディアの肩にほっそりとした手が触れた。

「姫様！」
「え……っ？」

耳を打つ涙混じりの声にはっと息を呑む。
顔を上げるとそこにはクロエとヤナがおり、彼女達は冷えたリディアの肩にショールを掛けてほぅと息をついた。強張った二人に恐る恐る笑いかける。こちらの顔も随分と強ばっていた。

「あぁ、クロエにヤナ。どうかしたのかしら？」
「どうかしてしまわれたのは姫様です！　一体何があったんです？　こんなに御顔も青くなさって」
「ずっと窓の近くにいらしたのです。体も冷えております。どうぞ温かいものでも飲んで御体を温めてください」

あぁ、そんなに長い間ここにいたのか。
太陽が移動する様をずっと見ていたような、草花の揺れるのを見つめていたようなそんな気はするが、リディアは自分が一体どれだけの時間ソファに座っていたのかを知らなかった。
ずっと頭にあったのは、昨夜沈黙の後踵を返して部屋を出てしまったクライヴの横顔だ。

（クライヴはもう私のこと、ダチだって思ってくれないのかしら……）

友達という肩書きなどない方がいいと、どうして彼は言ったのか。
その意味を考え続けていたが、朝から日暮れまで考えても答えは出なかった。
苦く笑ってヤナが差し出したティーカップを受け取る。
柔らかな香気を吸い込むと少し気持ちが落ち着いた。
緩んだリディアの口元を見つめ、クロエがぼそりと呟く。

「あのくされ皇帝が何かしでかしたのでしょうか」

殺気立った言葉をヤナが窘める。

「クロエ。陛下に向かってくされは止めなさい」
「いいのです！　私にとって姫様を落ち込ませる者は全てどグサレ野郎なのですから。ヤナ様だってあまりいい顔はなさってらっしゃらなかったじゃないですか」
「陛下と皇妃様の仲が御悪いだなんて側室様方に知られたくありませんからね」

皇妃。淡々としたヤナの言葉にティーカップを持つ手が震えた。
自分の夫は誰なのかと問うたクライヴの昏い表情が脳裏に現れる。
深淵にどこまでも堕ちていきそうな顔は、同時にもがいているようにも見えた。

（クライヴは何が苦しいんだろう）

その痛みがプリンセス・オルテンシアにあるのかリディアにある

のかは分からないが、少なくともどちらかにあるのは間違いないだろうと予想できた。なら、もし原因が自分にあるなら彼を苦しませるものとは何だろう。
困っているなら助けたかった。悲しんでいるなら救いたかった。

（それなのに、一体どこで間違えちゃったんだろう）

もういつもみたいに笑いかけてもらえないのだろうか。
最後に見た横顔みたいに苦しげで泣きそうな顔しか見れなくなるんだろうか。
ちくりと心を突き刺す痛みに顔を顰める。だが次の瞬間リディアは毅然と顔を上げた。

「なんでもないわ。ちょっと喧嘩しただけ」

本当は喧嘩などしていないのに、喧嘩にすらなっていないのにリディアはそう返す。
これ以上放っておくとクロエがクライヴに直談判しそうで怖かったのもあるが、それよりも。

「もう夕方だし、コンクラード卿の所に行かないとね」

自分はまだプリンセス・オルテンシアをやめろとは言われていない。
だったら今は自分にできることをきちんとこなしたかった。
茶に温められた体を久しぶりに動かすと軋むように節々が痛んだ。
うんっと伸びをすると心地よい痛みに支配され、リディアは深く息をついた。
血液が体中を巡っていくのが分かる。ドレスを翻し前に踏み出す足にも力が入る。

「クロエ、レナード様を呼んできてくれる？　護衛を頼みたいわ」
「……承知致しました。ですが今日は御休みになられた方が」
「大丈夫よ。何かあったらコンクラード卿に八つ当たりするから」

実際は向こうから喧嘩を仕掛けてくるのでリディアが八つ当たりなどしたことは一度もないが。

くすりと笑ってみせると、空元気でもようやく明るく振る舞えるようになったのに安心したのだろう。クロエが薄く笑って部屋の外に出ていく。ドアが閉じられるのを確認し、ヤナが憂うように瞼を伏せた。

「レナード殿が護衛でよろしいのですか？」

ヤナは知っているのだろうか。昨夜のクライヴの言葉を。
リディアはドキリとしつつも、これにはきっぱりと頷いた。

「元々クライヴが指名したんだもの。変わる時は彼自身が命じた時よ」
「それはそうですが」
「それに私にはやましい気持ちなんてないんだもの」

皇妃であるプリンセス・オルテンシアの代わりとして恥じるようなことは何もしていない。
クライヴが何を案じているのかは知らないが、リディアとレナードはあくまで皇妃と騎士に過ぎなかった。
ユリウスから散々浴びせられる嫌味との対比で心を温められることはあっても、それだけのことだ。

（そう、それだけよ）

胸中で呟く。と、窓の外からクロエとレナードが歩いてくるのが見えたのでリディアもドアに足を向ける。

「行ってらっしゃいませ」

「えぇ。後をお願い」

長く螺旋のように続く通路を進んでいく。

次第に早足になりながら後宮の外に出ると、黄昏に黒い鎧が見えた。

スノーホワイトの髪が風に揺れる。

「おまたせ致しました」

「いえ……」

いつも通り穏やかなカーマインの瞳が細められる。

黄昏にも血液にも似た色に感じた安堵を押し殺し、扇子を握り締める。

「参りましょう。あまり遅いとコンクラード卿にまた嫌味を言われてしまいますわ」

数段の段差の下に立つレナードが手を差し伸べる。

それを無感情に受け取り「ありがとう」と笑みを向けると彼の眉がぴくりと動いた。

「何かありましたか？」

不意に問われ、息が詰まりそうになる。

（この人になら分かるかもしれない。クライヴがどうして私にあんなことを言ったのか）

訊いてみたい、と心から思った。

だが何故かレナードに訊くのは違うと理性が告げているような気がしてリディアは首を振った。

扇子を広げてくすくすと笑う。

「おかしなことを訊くのですね。私は私、プリンセス・オルテンシアですわ。いつもと変わりなんてありません」

そう、今はもう名乗る名前もすることもない。

温かなレナードの手に、もう何も感じなかった。

それに自分が完全にプリンセス・オルテンシアの顔になったのだと自覚し、リディアは黄昏が闇に変わる前にユリウスの元を目指した。

◇　29話

「喧嘩を売ってるんですか」

逢魔が時。

照明を増やすべきか否かを悩み始める黄昏と闇がたっぷりとユリウスの執務室に満ちる中、リディアは厳しい声に溜息で応じた。

「そんなもの売る気はありませんわ。時間の無駄ですもの」

そう、そんなものは時間の無駄でしかない。

できることならユリウスと顔を合わせるのも無駄と言い切りたかったが、彼から与えられる知識を役に立たないと思ったことは一度もないのでそこまでは言わない。人間性に難がありすぎるものの、確かに彼は優秀な教育係だった。

髪留めから一房落ちた黒髪をさりげなく直す。

その横から足を組んで椅子に座るユリウスの叱責に似た声が飛んできた。

「その割には随分やる気が感じられませんが」

「いつも通りにしてましてよ」

「ほぉ？　いつも通りというならここで悪態の一つもつきそうなものを」

失礼な話だ。リディアは片眉を上げ、扇子で口元を隠して咳払いした。

「……私、悪態なんてついたことないのだけれど。コンクラード卿の耳には誰か知らない方の声でも入ってきているんじゃありません

？」

幽霊かはたまた頭がおかしくなったのか、そんな失礼極まりない言葉をユリウスは鼻で笑って受け流す。

黄昏に赤く染まった銀髪をくしゃりと掴む手の荒々しさが彼の不機嫌をよく表していた。

「私が今まで教えたことをことごとく無視してだらしない姿で立っている貴方の言葉など、痛くも痒くもありませんね」

「相変わらず口が御悪いこと」

「貴方に言われたくありませんな、リディア嬢」

言いながらユリウスの青紫の双眸が向けられる。

観察するだけのような、睨んでいるような、断罪しているような眼差しにリディアは身動ぎした。そうして落ち着かない視線に晒されながらぽつりと呟く。執務室の扉の向こうではレナードが待機している。その彼に聞こえないぐらいの小さな声だった。

「その呼び名はやめて頂けませんか」

「？　何か不都合でも」

「不都合だらけよ。私は今プリンセス・オルテンシア。本名を誰かに聞かれるわけにはいかないわ」

リディア・アヴェリンとして城に来たものの、必要とされるのは別の人間だ。だから自分がアヴェリン公爵家の娘であることを知られるわけにはいかないと告げると、ユリウスの目がすっと細められた。

「座りなさい」

椅子を指し示され渋々座る。
一日中座っていたせいで軋む体を何とか真っ直ぐ支えると、彼が机に両肘を乗せて問うた。
「陛下と何か」
まず間違いなくこの女が何かやらかしたと顔に書いてある。
失礼ながらも反論できないユリウスの顔から目を逸らし、リディアは睫毛を伏せた。狭くなった視界で自分の手がぎゅっと握り合わされる。クライヴに掴まれた手首の痛みが甦るようだった。
訳の分からないごちゃごちゃした感情に涙が出そうになる。
それを押し隠し、リディアはレナードにも言えなかった言葉をあっさり口にしていた。
「陛下は、クライヴは何を考えているんでしょうね」
毅然としたプリンセス・オルテンシアから気弱になったリディア・アヴェリンへ。
その名を呼ばれる不本意に変わりはないが、内面が緩慢に元の自分に戻っていく。
怜悧な双眸がものも言わずに向けられる。
どこまでも冷たい銀の髪も青紫の瞳も無機物に見える程透明で静かだ。嫌悪さえもない。
それが唯一彼が驚いている証拠だ。
リディアは自分自身でも驚きながら目を閉じた。そのまま懺悔するように囁く。
「こんなことを言うと貴方に嫌味をたっぷり言われそうだけれど、私にはもう彼が何を考えているのかよく分からないの。ダチなのに、変よね。彼が何を隠してるのか、どうしてなのか、全然見当がつか

ないわ」

何故彼があの晩苦しげにしていたのか、昏い怒りを抱いたのか。
自分の黒髪とフィアレーンに何の関係があるのか、ナタリアは何故後宮にいる意味を見出したのか。
分からない。何もかもが全くもってリディアには分からなかった。
けれど答えを知っているであろうクライヴは口を閉ざし、あの状態だ。

（どうしたらいいのかしら）

プリンセス・オルテンシアとして振る舞うのは今まで通りだ。自分が決めたのだから。
でも、本当にそれだけでいいのだろうか。
自分は何か大切なことを見落としているのではないか。
誰もが知っているのに、自分だけが知らない何かを。

「なぜ私にそんな話を」

不意に口を開いたユリウスに尋ねられ、リディアは苦く笑った。

「さぁ、どうしてかしら」

（そんなの私にだって分からないわ）

ヤナにもレナードにも、クロエにすら言えなかった。
それなのにあっさりユリウスに言えたのは不可解でしかない。

（――……あぁ、でも）

きつい口調、喧嘩腰の態度。
クライヴ以外には屈さない不遜で態度の大きな教育係の姿に一つだけ腑に落ちる物を感じて、リディアは顔を上げた。
「けれど貴方ならきっと哂うだろうと思ったからかもしれないわ。馬鹿にされるぐらいの方が、慰めよりも楽になる気がして」
言うとユリウスが気味悪げな顔をした。
「慰めよりも馬鹿にされるのがお好みとは変わったお嬢様だ」
本当に失礼な男だ。
心の中で舌を思いきり出しつつ思ったが、不思議とそんなひどい言葉の方が楽に思えた。
「そうね」
（だって、私もう嫌だったんだわ）
「でもねコンクラード卿、私は別に慰めなど必要としていないのよ」
「慰めがいらない？　意外な答えだな」
「そうかしら。だって私が欲しいのは答えなんですもの。なのに自分に隠し事をする人達の慰めなんてもらって何の意味があるのかしら」
あぁそうだ、だから自分は言えなかったのだ。
クライヴもヤナも何か隠している。
ゼナやシルヴィアはリディアが何もかも知っていると思って何も言わないだろうし、ナタリアもそうだろう。第一プリンセス・オルテンシアとして彼女達に教えを請うわけにはいかない。

レナードやクロエもいつも優しくリディアを守ってくれるが、肝心のことは何も教えてはくれない。レナードはクライヴの騎士で、クロエは父であるアヴェリン公爵に雇われた侍女だ。リディアが給金を払っているわけではない。利益に繋がる相手でない分、自分に何かを隠しても文句など言えないだろう。

もっともそれを言うならユリウスも同じだ。だが……。

（この人は何もしなくても私を攻撃するぐらいだもの。弱みを見せればより強い攻撃を仕掛けてくるでしょうし）

何も知らないにしても知っているにしても、リディアをちくちく攻撃しながら回避するに違いない。

クライヴのように真綿で包みこむように話を逸らさずに。

何も答えが得られない点で両者に違いなどないが、好戦的な態度の方がこちらも気が楽だった。

それならばいくらやり返してやったっていいし、優しさに流されずに済む。

「リディア嬢」

呼ぶなと言った名前をあえて呼び、ユリウスが立ち上がる。

そのままリディアの前に立つ。長い影がリディアの体をすっぽりと覆い隠した。

「貴方は陛下の仰る通り馬鹿ではないようだ。……が」

腕が伸びる。体を強ばらせるとそっとリディアの髪を指が梳いた。

感触というよりは色を確かめるような、そんな仕草だった。

なに、と掠れた声で訊く。疑問符を頭の上に浮かべるとユリウスが薄く笑った。

「貴方の思考はパーシモンが実るより遅い」
嘲りを含まない笑みはまだ温度が随分と低かったがあまりに珍しい顔だったので目を剥く。そのリディアの耳朶を低い声が打った。
「今日は少し内容を変更しましょう」
「？　珍しい事もあるものね」
唐突な言葉に眉を顰める。
話題が飛んだのも驚きだが授業内容を変更というのにもっと驚いた。
ユリウスは今まで一度だってそんなことを言い出したりしなかったというのに。
「えぇ、私も色々と思うところがあるのでね」
髪から指が離れていく。一歩引いた長身を見上げて問いかけた。
「それで何を教えてくださるの？」
夜が深まっていく。遠くで鳥が一声鳴いた。
執務机の前に立ったユリウスが引き出しから本を取り出す。
古びて黄ばんだその本の表紙を叩き、彼が答えた。
「――聖女フィアレーンの伝説ですよ」

◇　29話（後書き）

パーシモン＝柿です

◇　30話

唐突に欲しかったものを与えられる感触に、リディアは一寸目を丸くした。

「サンセット神教に女神フィアレーンと聖女フィアレーンがいる話は御存知か」

古びた本の表紙を指でなぞりながら問われて慌てて頷く。

「えぇ、それなら聞いたわ。この世界を創造した女神フィアレーンと、女神の御使いの聖女でしょう？」

「では具合的に聖女が何をしたかは？」

ついと向けられた青紫の視線には素直に首を振った。

「知らないわ。私が読んだ本には具合的なことは何も書いてなかったんですもの」

クライヴやヤナから貰った資料に書かれていたのはこの世界の成り立ちと、聖女の存在だけだ。他の何もない。だからこそリディアは知りたかったのだ。もっともっと詳しいことを。

皇帝に仕える公爵家の娘が国教の詳しい話すら知らないのは恥でしかないが、それで怖気付いてもいられなかった。

知らないなら、今知らなければ。きっと今しか機会はないのだから。

（家庭教師も姉様達もクライヴも誰も教えてくれなかった。常識だと言われてもいいような知識なのに。……きっと何か理由があるは

ずなんだわ）

理由は当然分からない。だが事実を聞けばその何かが掴める気がした。

一歩近付く。逆光で見えにくい本の表紙にはサンセット神教の文字が書かれている。

やや埃をかぶったそれを指で撫ぜ、ユリウスが口を開いた。教師然とした滑らかな声で。

「女神フィアレーンは平時、人々を見守りその愛でセイルーンを包んでいるとされている。ですが一度戦となれば、御使いに戦の調停をさせ再びの平穏を与えるという話がある。その御使いが聖女フィアレーンだ」

「女神の化身みたいなものかしら」

「いえ、神の化身ではなく完全な別人でしょうな。聖女を遣わすことで女神は自らが人の世に干渉しすぎないようにしているというのがサンセット神教の見解だそうで。実際に、一度だけ現れたことがあるらしいがその聖女はここサンセットで永眠したと言われている。化身ならば死にはしまい」

人の世は人が何とかせよということなのだろうか。

人々が祈りを捧げ救いを求める大聖堂。

リディア自身は見たことがないものの、きっと荘厳な光で溢れているのだろうと想像はしていた。

だがその清浄な光の奥で戦の調停だのという話があるとは思ってもみなかった。

「そうだったのね……」

「はい」

独りごちるリディアにユリウスが頷き、遠く窓の外を見やる。

「とは言っても聖女が戦うわけではありません。セイルーン五国にはそれぞれの神教がありますが、すべてフィアレーンを祀ったもの。聖女信仰はサンセットに一番根付いているものの、他国もかつて戦の際聖女フィアレーンの調停を受けたという話は伝わってますからな。聖女フィアレーンを害すれば他四国から攻撃を受けるのは目に見えている。決して害されることはないし、言うことは必ず聞くでしょう」

「一度人前に姿を現して戦いをやめなさいと言えば、それだけで戦争が収まるということかしら」

「その為の御使いですから」

誰もが女神を敬い、存在を確信しているセイルーン。

確かにこの地でならば聖女フィアレーンが現れたところで疑う者などいないだろう。

そんな胡散臭い女の言葉などと暴言を吐こうものなら、五国すべての神教が黙ってはいない。リディアにもそのぐらいのことは理解できた。

ただ一つ、疑問に思うことがある。

「皆はどうしてそれが聖女フィアレーンだと分かるのかしら。偽物だって疑う人がいてもおかしくはないと思うのだけれど」

自分は聖女だといくら声を張り上げた所で、馬鹿にされるのがおちだろう。

だというのに前回現れた聖女はどうやって信じてもらったのか。

首を捻るリディアにユリウスが目を細めて笑う。

「疑う余地なんてないからですよ。仮に化けてもすぐに分かる」

「どういう意味？」
「他に類を見ない変わった容姿をしていれば、誰が見ても聖女だと分かるでしょう」
「変わった容姿？」
「女神フィアレーンも聖女フィアレーンも、顔立ちこそ違いがあるものの共通するものがあります。何だかお分かりか」
「……いいえ、分からないわ」

眩しいものを見るような眼差しにたじろぎながら答えると、ユリウスはどう言ったら婉曲的に伝えられるか思案するように視線を巡らせてふと窓から見えた後宮に目を止めた。

「貴方は今まで城や後宮内を歩いていて、好奇の目で見られることはありませんでしたか」

突然の問いに目を白黒させ、リディアは記憶を探っていく。

「それほど大したことは。――あ、ですが」

そうしてゆっくりと糸をたぐり寄せるように記憶を探り、ようやくユリウスが言わんとしていることを理解した。

「シルヴィア様とゼナ様、それにナタリア様も私を見て驚いていたわ」

元々自分がフィアレーンの知識を欲した理由。クライヴを問い詰めた理由。
後宮に住まう姫君達の驚愕の眼差しと言葉が、リディアの疑問のすべてだった。

「髪ね。私の髪が黒いから」

どうして皆は自分の髪を見て驚くのか。

フィアレーンの再来とは何なのか。

疑問の答えは、ここにあったのだ。

「女神も聖女も、黒髪なのね」

「御名答」

だからこその再来だったのだ。

リディアにとっては当たり前のものだったから不思議で仕方なかった。けれどもユリウスの言葉が真実なら黒髪は稀有なものということになる。シルヴィア達が驚くのも無理はないのかもしれない。

「聖女フィアレーンを手元に置いておけば、戦火は免れる。仮に他国同士が争っていたとしても調停権を持つだけに優位になるでしょう。もっとも、各国の神教は湯気を立てて怒り出しそうですが」

女神の御使いを平然と政治の道具扱いしてユリウスが椅子に腰掛ける。

ぱらぱらと本のページをめくる音に支配された執務室で、リディアは暗く視線を落とした。

(私は今まで女神フィアレーンのことさえよく知らなかったわ。まず間違いなく聖女のわけない。そうなると、残りはメリアルドのミレーニア様ということになるけれど……)

リディアの知る限り、黒髪を持つのは他にプリンセス・オルテンシアしかいない。

それでも十分過ぎる程だろうが、彼女のことを思うと少し胸が痛

んだ。
ないとは思うがクライヴが彼女を政治の道具として妃に迎えるなどということはないだろうかと考えてしまったせいかもしれない。
クライヴは皇帝だ。国益のためとあらばそのぐらいのことをしても何らおかしくはないのだが、それでも胸が痛んだ。
だから呟いたのは確認のためでもあった。

「プリンセス・オルテンシアがいるメリアルドが今のところ安泰ということかしら」

メリアルド王室がそんな大事な姫を手放すかという心配もあるが、これをユリウスが首肯すれば、彼なら何があってもプリンセス・オルテンシアをサンセットに迎えるだろうとリディアは思っていた。
クライヴと国を想う者なら、そうするのは当然のことのように感じられたから。
しかしリディアの意に反してユリウスは眉を顰めた。

「何を言っているんです。だから貴方は鈍いと言うんだ」
「……コンクラード卿？」

不機嫌そうな、しかしある意味で仕方がないと許されてもいるような声音におずおずと声を掛ける。するとユリウスは立ち上がり、かつかつとリディアに近づいてきた。

「プリンセス・オルテンシアなんて端からメリアルドにいませんよ。いるのはここサンセットだけだ」
「サンセット？　でもクライヴは」

クライヴは他に黒髪の娘がいるとは言っていなかった。
そこまで考え、口ごもる。

「まだお気付きにならないか」
疑問への答えが形になりかけた頃、ユリウスが追い打ちをかけるように口を開いた。
「プリンセス・オルテンシアは貴方を指した言葉ですよ、リディア嬢。黒髪の乙女などセイルーンには二人といない。言ったでしょう？　偽物など立てようがないほど黒髪は変わっているのだと」
重々しく罪状でも宣告する低い声に肩が跳ね上がる。
震えるリディアが何もかも理解しているのを察してか、ユリウスの表情が柔らかくなる。
伸びた指先がさらりとリディアの髪を一度だけ梳いた。
甘やかすような優しさはユリウスにはひどく不似合いで、だからこそ続けられる言葉がどれだけ不穏なのかをリディアに覚悟させた。嫌がらせにそうしているわけではない。きっとこれは罪悪感だと感じさせる柔和さだった。でも、誰に？
クライヴだろうか、それとも自分だろうか。
そんな事を考えるリディアの耳を、ユリウスのやはり柔らかな声が打った。
「聖女フィアレーンは貴方だ」
陛下はそれをずっと隠していらした。
致命的な言葉をリディアの心に突き刺したユリウスは、そう締めくくって苦く笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0865u/

君よ、花よ

2011年10月10日13時23分発行